宮崎市文化財調査報告書第 108 集

生目古墳群Ⅴ

いきめこふんぐん

－生目 9・11・12・33 号墳発掘調査報告書－

２０１５

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書第 108 集

生目古墳群Ⅴ

（いきめこふんぐん）

－生目 9・11・12・33 号墳発掘調査報告書－

２０１５

宮崎市教育委員会

序

宮崎市制90周年を迎えた平成26年度、本市教育委員会では、「生目古墳群DEフェスタ」と銘打ちまして、生目古墳群に関する様々なイベントを開催しました。イベントには多くの方々に足を運んでいただき、生目古墳群に大きな注目が集まった年になったのではないかと思います。

本書に報告いたします、生目9号墳、11号墳、12号墳、33号墳は、生目古墳群史跡公園の中程に位置する円墳群です。今回の発掘調査では、この中の9号墳と33号墳が1基の前方後円墳であった可能性が非常に高くなりました。

今後、本書に報告する発掘調査成果をもとに、検討を重ねながら、市民の皆様に親しまれる史跡整備をおこなってまいりたいと思います。

最後になりましたが、発掘調査、整備工事にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、ご指導、ご助言をいただきました諸先生方、そして発掘調査、整理作業に従事していただきました作業員の皆様に、心より感謝申し上げます。

平成27年3月

宮崎市教育委員会
教育長　二 見 俊 一

例　　言

1. 本書は史跡生目古墳群保存整備事業に伴い宮崎市教育委員会が平成 16、20、21、23、25、26 年度に実施した生目 9 号墳・11 号墳・12 号墳・33 号墳の発掘調査報告書である。

2. 生目古墳群史跡公園整備専門委員会

委員長	西谷　正	（九州歴史資料館名誉館長）
委　員	石野博信	（兵庫県立考古博物館長）
	北川義男	（元南九州大学教授）
	白石太一郎	（大阪府立近つ飛鳥博物館長）
	高瀬要一	（元独立行政法人奈良文化財研究所文化遺産長）
	北郷泰道	（宮崎県教育庁文化財課専門主幹）
	柳沢一男	（宮崎大学名誉教授）
整備指導	文化庁記念物課	
	宮崎県教育庁文化財課	

3. 調査組織

調査主体　宮崎市教育委員会

発掘調査

〈平成 16 年度〉

調査総括	文化振興課長	小掠　聖
	文化財係長	米良　明信
調査事務	主事	松木　勇道
調査担当	主任技師	稲岡　洋道
	嘱託	井上　誠二

〈平成 20 年度〉

調査総括	文化財課長	小掠　聖
	主幹兼埋蔵文化財係長	山田　典嗣
調査事務	主査	松崎　留美
調査担当	主任技師	稲岡　洋道
	嘱託	井上　誠二
	嘱託	島井　伸幸
	嘱託	鈴木　弘子

〈平成 21 年度〉

調査総括	文化財課長	永井　淳生
	副主幹兼埋蔵文化財係長	富永　英典
調査事務	主査	松崎　留美
調査担当	主任技師	竹中　克繁
	嘱託	井上　誠二
	嘱託	島井　伸幸

〈平成 23 年度〉

調査総括	文化財課長	田村　泰彦
	主幹兼埋蔵文化財係長	富永　英典
調査事務	主任主事	岩切　瞳
調査担当	主任技師	竹中　克繁
	嘱託	渕内美智子

〈平成 25 年度〉

調査総括	文化財課長	橋口　一也
	副主幹兼埋蔵文化財係長	島田　正浩
整備担当	副主幹	森田　浩史
調査事務	主事	芝　優美
調査担当	主任技師	石村　友規
	嘱託	渕内美智子

〈平成 26 年度〉

調査総括	文化財課長	橋口　一也
	副主幹兼埋蔵文化財係長	島田　正浩
整備担当	副主幹	川越　健
調査事務	主事	芝　優美
調査・整理担当	主任技師	石村　友規
	嘱託	渕内美智子
整理担当	主任技師	竹中　克繁
	嘱託	前田美恵子

4. 掲載した図面の実測及び現場写真の撮影は、稲岡、竹中、石村、井上、鈴木、渕内が分担しておこなった。

5. 掲載した図面の製図、図版作成は竹中、石村、渕内、前田が、遺物の写真撮影は石村がおこなった。

6. 本書の執筆は第Ⅱ章第 2・3 節を竹中がおこない、その他の執筆、編集は石村がおこなった。

7. 本書で使用する 1 号墳、3 号墳、5 号墳、7 号墳、14 号墳、22 号墳、23 号墳およびその周辺の測量図は宮崎大学考古学研究室が作成し、それ以外の古墳およびその周辺部の測量図は宮崎市教育委員会が作成した。

8. 土層の注記は、複数年度にわたって各調査員がおこなったため、詳細な文言に関しては、解釈が異なってしまう可能性があるため統一していない。

9. 出土遺物および掲載図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本　文　目　次

第Ⅰ章　生目古墳群の概要
第１節　地理的環境と歴史的環境 …… 1
第２節　生目古墳群の既往の調査 …… 4

第Ⅱ章　生目９・11・12・33 号墳の発掘調査成果
第１節　概要 …… 8
第２節　生目９号墳および周辺の発掘調査成果 …… 11
第３節　生目 11・12 号墳の調査調査成果 …… 24
第４節　生目 33 号墳の発掘調査成果 …… 33

第Ⅲ章　総括
第１節　生目９・33 号墳の墳形について …… 47
第２節　生目９号墳周辺の地下式横穴墓について …… 48
第３節　生目９号墳・11 号墳・12 号墳の時間的位置付けについて …… 48

挿　図　目　次

第１図　生目古墳群及び周辺主要古墳・古墳群位置図 …… 2
第２図　生目古墳群周辺主要遺跡分布図 …… 3
第３図　生目古墳群主要古墳位置図 …… 5
第４図　平成６年度調査区配置図 …… 8
第５図　生目９号墳・９号墳周辺調査区全体配置図 …… 9 ～ 10
第６図　生目９号墳および周辺における地中レーダー探査結果 …… 12
第７図　生目９号墳および周辺調査区全体配置図 …… 13 ～ 14
第８図　生目９号墳９Ａ・９Ｂ・９Ｅ・９Ｚ・９Ｆ土層断面図 …… 15 ～ 16
第９図　生目９号墳９Ｃ・９Ｄ土層断面図、９Ｅ遺物出土状況図、９Ｇ出土遺物実測図 …… 18
第 10 図　生目９号墳９Ｇ土層断面図 …… 20
第 11 図　生目９号墳９Ｘ・９Ｙ土層断面図、ＳＤ１実測図 …… 23
第 12 図　生目 11 号墳・12 号墳調査区配置図 …… 25
第 13 図　生目 11 号墳土層断面図 …… 26
第 14 図　生目 12 号墳土層断面図① …… 29
第 15 図　生目 12 号墳土層断面図②、周溝内遺物出土状況平面図、出土遺物実測図 …… 30
第 16 図　生目 33 号墳調査区配置図、33 Ｄ遺構配置図 …… 34
第 17 図　生目 33 号墳 33 Ａ土層断面図 …… 35
第 18 図　生目 33 号墳 33 Ａ遺物出土状況図 …… 35
第 19 図　生目 33 号墳 33 Ａ、中世溝土層断面図 …… 35

第 20 図　生目 33 号墳 33 Ｂ西壁周溝部分土層断面図 …… 36
第 21 図　生目 33 号墳 33 Ｃ北壁不明遺構 1 土層断面図 …… 36
第 22 図　生目 33 号墳 33 Ｅ南壁土層断面図 …… 36
第 23 図　生目 33 号墳 33 Ｄ周溝および地下式横穴墓竪坑土層断面図 …… 38
第 24 図　生目 33 号墳 33 Ｄ地下式横穴墓掘り込み地業土層断面図 …… 38
第 25 図　生目 33 号墳 33 Ｄ土坑 1 土層断面図 …… 38
第 26 図　生目 33 号墳 33 Ｆ周溝収束位置サブトレンチ土層断面図 …… 39
第 27 図　生目 33 号墳 33 Ｆ落ち込みサブトレンチ土層断面図 …… 39
第 28 図　生目 33 号墳 33 Ｆ土坑 2 土層断面図 …… 39
第 29 図　生目 33 号墳 33 Ｇ土層断面図 …… 41 ～ 42
第 30 図　生目 33 号墳墳丘南北土層断面図 …… 41 ～ 42
第 31 図　生目 33 号墳出土遺物実測図① …… 44
第 32 図　生目 33 号墳出土遺物実測図② …… 45
第 33 図　生目 9 号墳墳丘復元図 …… 49
第 34 図　生目古墳群主要古墳変遷図 …… 50

表　目　次

第 1 表　生目古墳群一覧 …… 7
第 2 表　出土土器観察表 …… 46

写 真 図 版 目 次

図版 1　生目 9 号墳調査写真 1 …… 52
図版 2　生目 9 号墳調査写真 2 …… 53
図版 3　生目 9 号墳調査写真 3 …… 54
図版 4　生目 9 号墳調査写真 1、生目 9 号墳出土遺物 …… 55
図版 5　生目 9 号墳周辺調査写真 …… 56
図版 6　生目 11 号墳調査写真 …… 57
図版 7　生目 12 号墳調査写真 1 …… 58
図版 8　生目 12 号墳調査写真 2、生目 12 号墳出土遺物 …… 59
図版 9　生目 33 号墳調査写真 1 …… 60
図版 10　生目 33 号墳調査写真 2 …… 61
図版 11　生目 33 号墳調査写真 3 …… 62
図版 12　生目 33 号墳調査写真 4 …… 63
図版 13　生目 33 号墳調査写真 5 …… 64
図版 14　生目 33 号墳調査写真 6、生目 33 号墳出土遺物 1 …… 65
図版 15　生目 33 号墳出土遺物 2 …… 66

第Ⅰ章　生目古墳群の概要

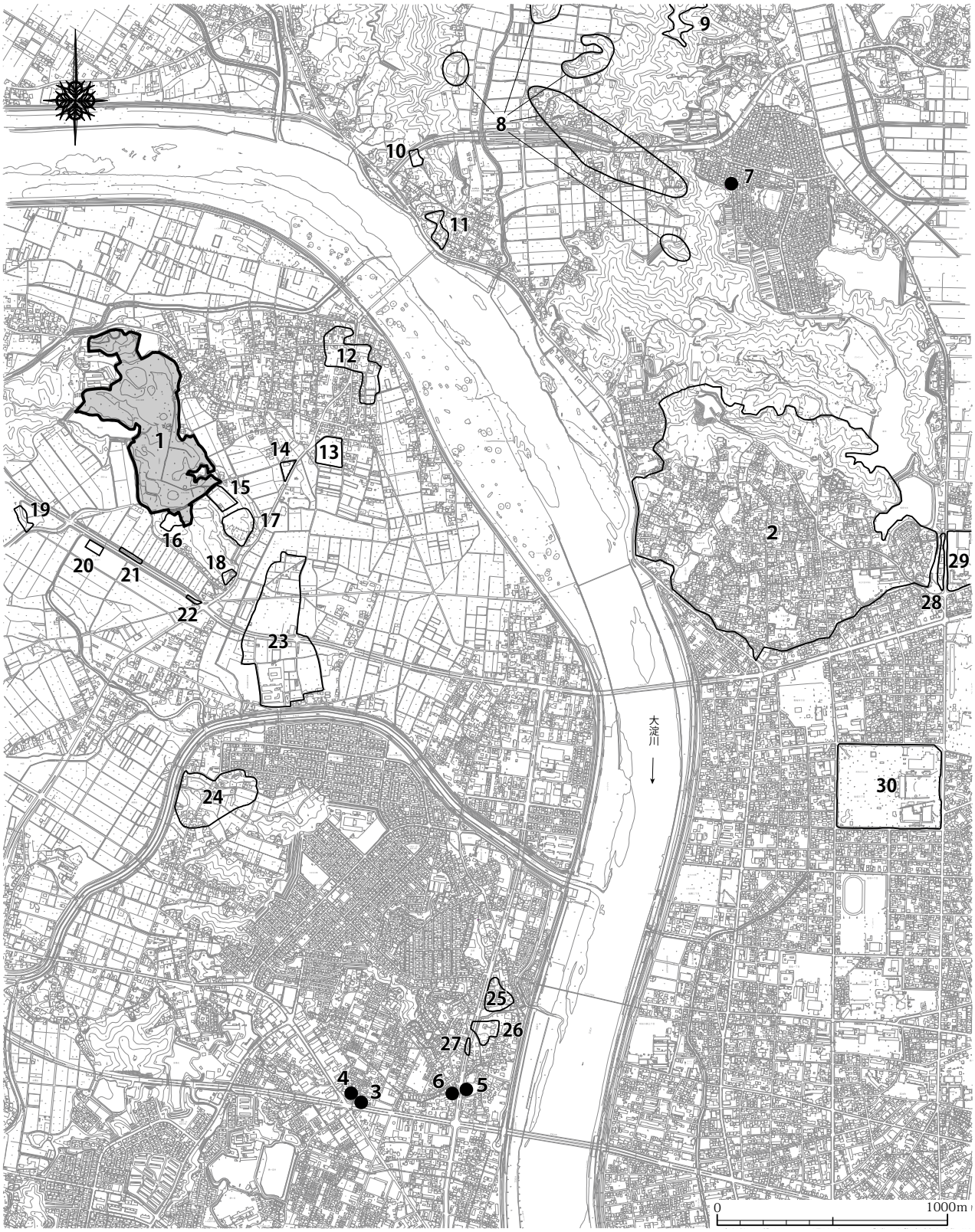
第１節　地理的環境と歴史的環境

生目古墳群が所在する宮崎県宮崎市は九州島の南東部に位置する。市域の大部分は、耳川河口～西都～綾～青島を結んだ三角地帯に広がる宮崎平野の南端に位置するが、北西側は九州山地、南西側は鰐塚山に代表される南那珂山地が連なる。宮崎平野は、主に宮崎層群を基盤としており、宮崎市域では標高 20 ～ 80m の丘陵部と標高 10m 以下の低地部から成る。また市域の東側は日向灘に面しており、青島以北は 30km 余りの砂浜海岸となっている。市街地の中心には、県下最大の河川である大淀川が流れる。大淀川は、南那珂山地の一部である鹿児島県中岳を源流とし、都城盆地を経て宮崎平野部へと東流する。宮崎市街地では東流から南流、再び東流と蛇行し、日向灘に注ぐ。この大淀川の沖積作用によって現在の宮崎市街地が位置する低地部が形成された。

生目古墳群は、宮崎市街地から北西へ直線距離で約 6km、内陸丘陵部の手前に位置する独立丘陵である跡江丘陵上とその周辺に位置する古墳の総称である。跡江丘陵は、宮崎平野の基盤層である宮崎層群の上に約 1m 程度の砂岩円礫層を挟み、その上に姶良入戸火砕流堆積物（通称シラス：26,000 ～ 29,000 年前）が 5m ～ 10m 程度堆積し形成されている。丘陵の平面形はへの字形で、南北 1.3km、東西 1.2km を測る。丘陵の北西部は小谷が入り組む地形となっているが、中央から南東部は、標高 25 ～ 28m 程度の比較的平坦な台地状の地形を呈し、生目古墳群の 50 基を数える古墳の大半はここに築かれている。丘陵眼下の北東側には、現在の跡江集落が広がる微高地が存在し、その向こう側には大淀川が流れている。この大淀川は内陸部から東流してきた流れが跡江丘陵を取り巻くようにその流れを南へと変える。また丘陵の北西側で、大淀川の支流である本庄川と大淀川が合流することから河川を非常に意識した立地といえる。

生目古墳群が所在する跡江丘陵上とその周辺には多くの遺跡が分布する。跡江丘陵の南端には、縄文時代早期の塞ノ神式土器や押型文土器が出土している跡江貝塚が所在する。生目古墳群内においても、古墳の調査中に縄文時代早期のものと思われる集石遺構や塞ノ神式土器を中心とした縄文時代早期の遺物が出土することから、跡江貝塚だけでなく、跡江丘陵上の広範囲に当時の遺構が分布しているものと思われる。また同時期の貝塚として、大淀川を挟んだ対岸側に柏田貝塚がある。弥生時代には、丘陵の南東部に弥生時代中期の環壕集落である石ノ迫第 2 遺跡が所在する。石ノ迫第 2 遺跡では弥生時代中期の集落の他、弥生時代終末期の円形周溝墓、土坑墓が確認されている。弥生時代中期から終末期の遺物は、丘陵中央部付近でも古墳の調査中に出土することから、縄文時代早期の遺構と同様に、丘陵上の広範に渡って遺構が分布しているものと思われる。近接地に営まれた環壕集落としては、大淀川対岸の下北方遺跡群内の下郷遺跡（弥生時代前期末から中期初頭、後期初頭～後期後葉）、大淀川支流の本庄川流域に塚原遺跡（弥生時代後期初頭～後葉）がある。古墳時代の遺跡としては、大淀川の対岸の下北方遺跡群内に、中期から後期にかけて下北方古墳群が造営されている。この下北方古墳群は、生目古墳群と前方後円墳の築造時期をずらすように造られており、大淀川下流域における首長墓系譜の変動が明瞭に現れている。また生目古墳群から南東に直線距離で 3km ほどの位置に、前期末から中期の古墳群と考えられている大淀古墳群が所在する。大淀古墳群は生目古墳群とは異なり低地に立地し、3 号墳では壺形埴輪が採用されているものの生

第1図　生目古墳群及び周辺主要古墳・古墳群位置図



1. 生目古墳群　2. 下北方遺跡群　3. 大淀１号墳　4. 大淀２号墳　5. 大淀３号墳　6. 大淀４号墳
7. 池内横穴群　8. 瓜生野村古墳　9. 宮崎城跡　10. 笠置遺跡　11. 柏田貝塚　12. 大屋敷遺跡
13. 堂原遺跡　14. 城平遺跡　15. 石ノ迫第２遺跡　16. 石ノ迫遺跡　17. 跡江城跡　18. 跡江貝塚
19. 深田遺跡　20. 跡江地区遺跡　21. 沖ノ田遺跡　22. 雀田遺跡　23. 間越遺跡　24. 平岩遺跡
25. 竹之下遺跡　26. 多宝寺遺跡　27. 権現昔遺跡　28. 宮大茶園遺跡　29. 垣下遺跡　30. 船塚遺跡

第2図　生目古墳群周辺主要遺跡分布図(S=1/25000)

目古墳群とは系譜が異なる。跡江丘陵に近接する古墳時代の集落遺跡としては、丘陵の南東約 0.8km の位置に古墳時代中期から後期の竪穴住居が確認されている間越遺跡や、現在の跡江集落が立地する微高地上に営まれた古墳時代中期の大屋敷遺跡がある。現在までのところ、生目古墳群が最も盛行する古墳時代前期の集落は近接地では確認されていないが、平成 25 年度に、跡江集落が立地する微高地上で、弥生時代終末期の集落である城平遺跡が確認されたため（現在整理作業中)、今後微高地上で古墳時代前期の集落が確認される可能性は高い。古墳時代以降の遺跡としては、丘陵の南に近接する微高地上、現在の生目の杜スポーツ公園が立地する場所に、古代の掘立柱建物、井戸などが検出された深田遺跡が所在する。中世になると、跡江丘陵の南東端に跡江城が築かれる。また生目 3 号墳、22 号墳では、後円部 3 段目斜面を削る形で薬研堀を巡らせていることから、陣城のような施設が後円部墳頂平坦面に構築されていた可能性がある。その他にも古墳群内の各地で、中世の溝・道路状遺構・土坑・ピットなどが検出されている。丘陵下に目を向けると、低地中に位置する沖ノ田遺跡、雀田遺跡、跡江地区遺跡で水田址が検出されている。跡江集落とその周辺には、近世の庚申塔、供養塔が点在していることから、生目古墳群周辺では、連綿と人々の営みが続いてきたことがわかる。

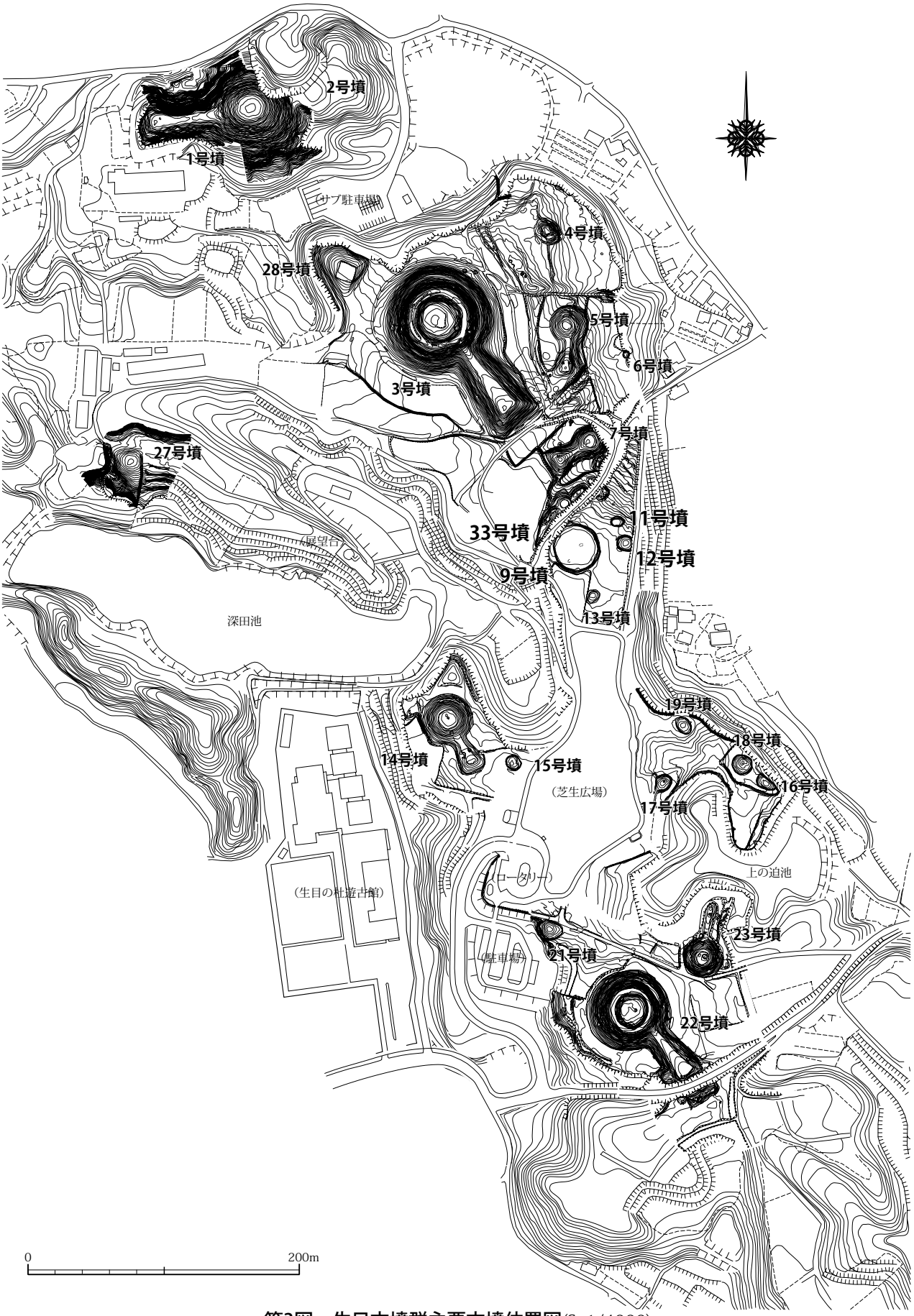
第 2 節　生目古墳群の既往の調査

生目古墳群は前方後円墳 8 基、円墳 42 基、総数 50 基の古墳群である。昭和 18 年 9 月 8 日の国指定の際には、前方後円墳 7 基、円墳 36 基の計 43 基であったが、その後の発掘調査によって、墳丘が消滅した古墳の確認や、墳丘と思われたマウンドが切通しの道を造る際の廃土山であったことが確認されるなどによって、現在の数字となっている。最も近年の変更は、平成 25 年度に調査をおこなった 35 号墳が、古墳ではなく廃土山であったということが明らかになり、古墳の総数が 51 基から 50 基へ、円墳数が 43 基から 42 基になっている。

前述のように、生目古墳群が国史跡に指定されたのは古く昭和 18 年であるが、初めて本格的な発掘調査がおこなわれたのは、遺構の残存状況を確認するためにおこなわれた、平成 5 ～ 7 年度の墳丘周辺を中心とした調査である。史跡整備に伴う発掘調査は、平成 10 年度から開始された。ここからは主要な古墳の調査成果について概観していきたい。

生目古墳群には、九州島で唯一、古墳時代前期に位置付けられる 3 基の 100m 級前方後円墳が存在する。その中で最大規模の 3 号墳は、墳長 137m、後円部 3 段、前方部 2 段築成である。これまでに 19 ヶ所の調査区を設定し調査をおこなっているが、3 号墳に伴う遺物は出土していない。3 号墳は墳丘斜面を葺石、平坦面を敷石で覆われており、墳丘全面が石で覆われている。また墳丘外にも幅約 1.5m の礫敷帯（報告書では基底部礫敷帯）が巡ることが明らかになっている。墳形から 4 世紀中頃の築造と考えられている。後円部の 3 段目斜面は、中世に薬研堀が巡らされ、墳頂平坦面を陣城のような施設として利用していたと考えられる。墳丘測量図にみられる後円部 2 段目の幅広のテラスは、この薬研堀が埋没した痕跡である。

3 号墳に次ぐ規模である 1 号墳は、丘陵の北端から小谷を隔てた独立丘陵上に立地する。墳長は前方部先端が崩落しているため、現況長となるが 120m を測る。平成 25・26 年度に発掘調査をおこなっており、後円部は 3 段築成であることが明らかになっている。また調査成果から、前方部も 3 段築



第3図　生目古墳群主要古墳位置図(S=1/4000)

成である可能性が非常に高い。2ヶ年で500㎡以上の調査区を設定し、調査をおこなったが、1号墳に伴う遺物は出土しておらず、築造時期は未だ確定的ではない。

22号墳も前方部の先端が切通しにより削平されており、復元長は101mである。トレンチ調査によって、後円部は3段築成であり、焼成前穿孔の壺形埴輪をもつことが明らかになっている。また、前方部は、現地表の観察から2段築成と考えられる。前方部の右側面には、発掘調査によって張り出し部が確認されており、そこから集成編年4期に位置付けられる土師器が出土している。22号墳も3号墳と同様に、後円部3段目斜面が中世の薬研堀によって掘削されており、測量図に見られる幅広のテラスは、この薬研堀の痕跡である。

墳長63mの14号墳は、発掘調査によって、後円部2段、前方部2段築成で、壺形埴輪をもつことが明らかになっている。14号墳は、非常に丁寧に施工された葺石が良好な状態で残存しており、墳丘斜面、平坦面共に石で覆われていたことが明らかになっている。また壺形埴輪を、墳頂平坦面、スロープ上に樹立していたことが明らかになっている（テラス面にも樹立していた可能性が高い)。この壺形埴輪の形状から、14号墳は22号墳に後続する時期に位置付けられている。

14号墳に後続する5号墳は、墳頂57mを測り、後円部、前方部共に2段築成である。14号墳と同様に壺形埴輪を樹立するが、後円部、前方部墳頂面の平野部側にのみ少量樹立している。また、葺石も斜面部に限定され、埴輪、葺石共に退化傾向にある。

墳頂46mの7号墳では、後円部南西側から後円部墳丘内の中心方向に玄室をもつ、大型の妻入り型地下式横穴墓が確認されており、構築状況、規模から7号墳の中心埋葬施設の可能性が高い。また、この地下式横穴墓と墳丘主軸を挟んだ対面側の位置から造り出しが検出され、多量の土師器、須恵器が出土している。これらの遺物から、7号墳は集成編年8期に比定され、生目古墳群最後の前方後円墳となっている。

円墳として指定されていた21号墳は、発掘調査の結果、復元墳長42mの古墳群中最小の前方後円墳であることが明らかになった。21号墳は葺石をもたず、段築も削平が激しく明確ではない。周溝内からは13基に及ぶ地下式横穴墓が検出され、その内の1基が宮崎平野部最古、5世紀前葉に構築されたことが明らかになっている。

前方後円墳以外の円墳に関しても、その実態が明らかになりつつある。現況径10m程度の小円墳群である16～19号墳は、発掘調査の結果、16号墳が集成編年10期に位置付けられ、17号墳が集成編年7期、19号墳が集成編年10期に位置付けられる可能性が高く、いずれも生目古墳群における前方後円墳の空白期に当たる。本報告書で報告する、小円墳である11号墳、12号墳を含め、生目古墳群を築造した首長層の勢力の盛衰を考える上で、非常に重要な調査成果といえる。

【主要参考文献】

青山尚友　2010『ここまでわかった宮崎の大地』鉱脈社。

宮崎市教育委員会　2010『生目古墳群Ⅰ』－生目5号墳発掘調査報告書－、宮崎市文化財調査報告書第80集。

宮崎市教育委員会　2014『生目古墳群Ⅳ』－生目14号墳発掘調査報告書－、宮崎市文化財調査報告書第98集。

第1表　生目古墳群一覧

現No.	旧No.	墳形	規模（m） 長×円径×高	企画	葺石	出土遺物	備考
1	6	前円	120以上×73×12.7	後円部3段	有		平成25･26年度調査
2	5	円	27		無		
3	17	前円	137×77×11	後円部3段、前方部2段	有		後円部上段に中世の薬研堀が巡る
4	18	円	21		無		
5	19	前円	57×29×4.4	後円部、前方部2段	有	壺形埴輪、壺形土器、高坏	周溝外側で19号地下式横穴墓を確認
6	20	円	8		無		
7	21	前円	46×24×3.9	後円部2段、前方部2段、造出し有	有	土師器（甕、壺、椀、高坏）、須恵器（坏、高坏、ハソウ、把手付鉢、大甕、脚台付壺、筒形器台）石製垂玉、石製小玉、石製紡錘車	後円部中心に向かって、18号地下式横穴墓を構築、その他周溝内から8基、周溝外から4基の地下式横穴墓を確認。
8	22	円		無段築	無		周溝内に2基の地下式横穴墓
9	25	前円か	60×38	墳丘上部削平	無		33号墳を前方部とする前方後円墳か
10	24		11				古墳ではない
11	23	円	10				
12		円	12				昭和37年度確認
13	26	円	11				
14	27	前円	63×39×4.4	後円部、前方部2段	有	壺形埴輪	周溝内より22号地下式横穴墓を確認
15		円	11		無		昭和37年度確認
16	30	円	16		無	須恵器	
17	32	円	17		無	土師器（壺、高坏）	周溝内より地下式横穴墓を確認
18	29	円	17		無		
19	28	円	15		無		周溝外側で地下式横穴墓を確認
21	35	前円		後円部2段	無	壺形埴輪	周溝内より地下式横穴墓を確認
22	34	前円	101×60×9.2	後円部3段、前方部2段か？	有	壺形埴輪、土師器（甕、高坏、壺）	周溝内より、張り出し部、23号地下式横穴墓を確認、後円部上段に中世の薬研堀
23		前円	57×30×4.9		無		
24	2	円	10				
25	3	円	11				
26	4	円	14				
27	13	円	19				
28	14	円	20		無		
29	15	円					
30	16	円					
31	未F	円			無		平成17年度確認（5号墳と7号墳の間）
32	未G	円			無		平成16年度確認（7号墳南側）
33	41	円			無		平成14年度確認（9号墳･新30号墳間）･概報Ⅵで旧5号墳と誤認･誤表記
34	42	円					
35	36	円					平成25年度調査、古墳ではない
36	1	円					
37	7	円					
38	8	円					
39	9	円					
40	10	円					
41	11	円					
42	12	円					
43	37	円					
44	38	円					
45	39	円					
46	40	円					
47	未A	円	10.5		無		11号地下式横穴墓を埋葬主体
48	未B	円	9.5		無		12･13号地下式横穴墓を埋葬主体
49	未C	円	17		無		
50	未D	円	10.5		無		14号地下式横穴墓を埋葬主体
51	41	円					
52	42	円					
53	43	円					

第Ⅱ章　生目 9・11・12・33 号墳の発掘調査成果

第 1 節　概要

位置と既往の発掘調査　生目古墳群は、主要古墳の配置や築造時期、埴輪の有無を含め、丘陵北半群と南半群に分割されている（宮崎市教委 2011 など）。生目 9 号墳は、この北半群内の南端付近に位置する。この付近は、東西から迫が入り込み、丘陵幅が狭くなっているが、9 号墳が立地する位置は、9 号墳を頂点として北から南東方向の範囲が下降傾斜する地形となっており、それらの方向からの眺望が非常に優れている。

生目 9 号墳とその周辺は平成 6 年度に、史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査として、墳丘周辺部のトレンチ調査がおこなわれている。この調査では、9 － 1 トレンチ、11 － 4 トレンチにおいて地下式横穴墓が確認されている。また、9 － 2 トレンチでは、二段掘土壙を中心埋葬施設とする円形周溝墓と、その周溝内に構築された横口をもつ土坑墓が検出されている。また 9 － 1、11 － 3、12 － 1 トレンチにおいて、12 号墳の周溝を確認している。

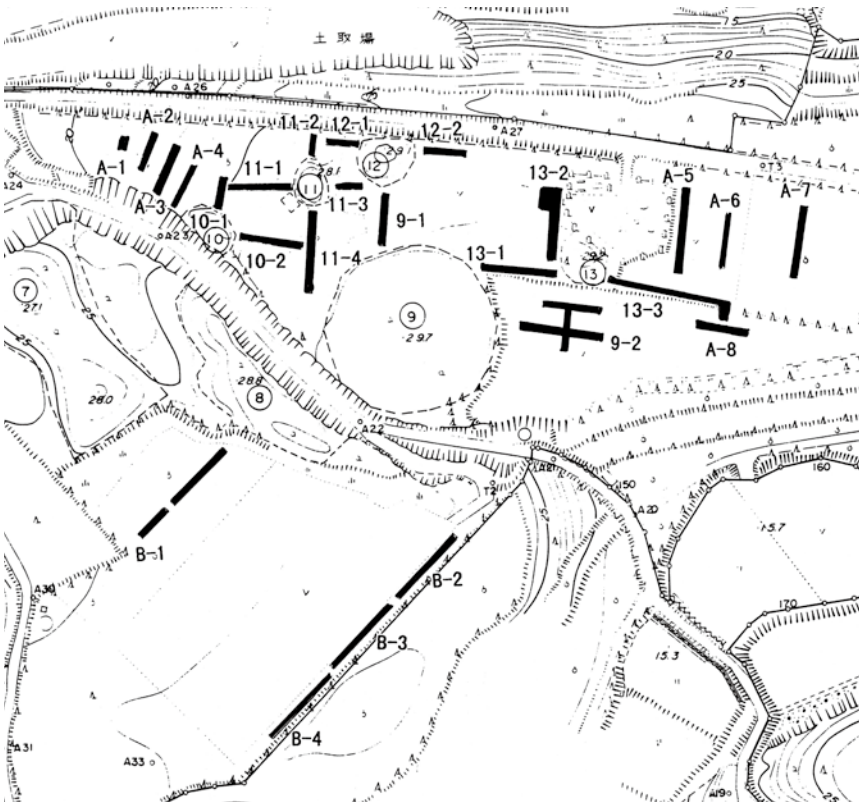
基本層序　生目古墳群が所在する跡江丘陵では以下が基本的な層序となり、今回の調査箇所も同様である。基本層序の詳細は『生目古墳群Ⅰ』の第Ⅰ章第 2 節を参照されたい（宮崎市教委 2010）。

Ⅰ層：表土。

Ⅱ層：黒褐色土（0 ～ 50cm）桜島第 3 テフラ（文明ボラ 1471 年）、新燃享保軽石（1717 年）。

Ⅲ層：黒ボク土（0 ～ 30cm）TH-S（霧島高原スコリア 11 世紀～ 13 世紀）。

Ⅳ層：黒ボク土（0 ～ 30cm）自然堆積層、Ⅴ層と基本的には同様だが、古墳構築後の堆積。



第 4 図　平成 6 年度調査区配置図
（史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書より転載）

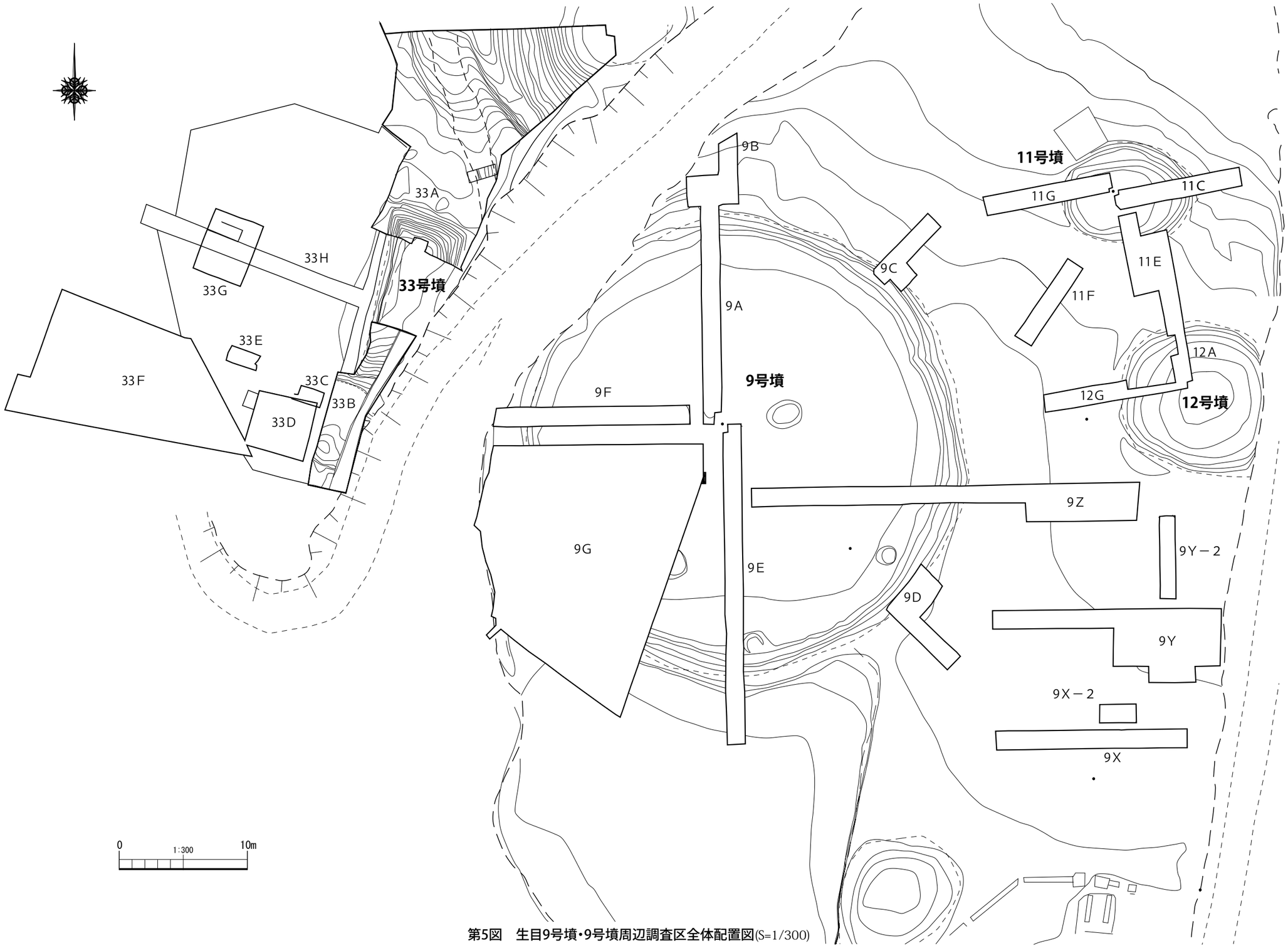
Ⅴ層：黒ボク土（0 ～ 50cm）自然堆積層、Ⅳ層と基本的には同様だが、古墳構築前の堆積。

Ⅵ層：アカホヤ土（0 ～ 30cm）テフラ層、（K-Ah7300 年前）。

Ⅶ層：暗褐色土（80cm 前後）ローム層、下位で霧島小林降下軽石（14,000 ～ 16,000 年前）。

Ⅷ層：シラス（500cm 以上）テフラ層（26,000 ～ 29,000 年前）。

古墳を調査対象とした場合、Ⅴ層以下が地山となる。9 号墳もⅤ層以下を削り出し、その上に盛土を施し、墳丘を構築している。



第5図　生目9号墳・9号墳周辺調査区全体配置図(S=1/300)

第２節　生目９号墳および周辺の発掘調査成果

(1) ９号墳

現況径 36m、高 1.5 ～ 2m の円墳である。大型の平面規模に比して低平であり、現況の見た目は奇異な印象を受ける。北西側にはかつて大規模な切り通しの道が入っており、墳丘の一部は垂直に近く削平されている。2008 年度と 2009 年度、計 12 箇所のトレンチおよび調査区によって調査をおこなった。

発掘調査に先立つ 2005 年度、9 号墳および周辺の地中レーダー探査を実施した。その結果、9 号墳の裾部で複数の地下式横穴墓かと思われる反応があり、その確認のため 2008 年度、反応箇所にトレンチを設定して調査をおこなった（９Ｂ・９Ｃ・９Ｄ）。またレーダー探査により 9 号墳の南東に消滅墳周溝の可能性が考えられる反応があったため、同じく 2008 年度に確認のため 5 本のトレンチで調査をおこなった（９Ｘ・９Ｘ－２・９Ｙ・９Ｙ－２・９Ｚ）。翌 2009 年度には 9 号墳墳丘上に十字トレンチを設定するとともに（９Ａ・９Ｚ・９Ｅ・９Ｆ）、レーダー探査において墳丘西側に突出部をもつ鍵穴形の反応が見出されたため、墳丘部分の一部面的な調査をおこなった（９Ｇ）。

以下、9 号墳の調査について北に設定した９Ａトレンチから時計回りに詳述する。

９Ａ・９Ｂ　９Ａは現況墳頂中央から北方向に設定した幅 1.5m、長 17.0m のトレンチ、９Ｂは 9 号墳北裾部に設定した幅 1.5m、長 5.6m のトレンチで、一部拡張によって両トレンチを連結したことから一括して詳述する。

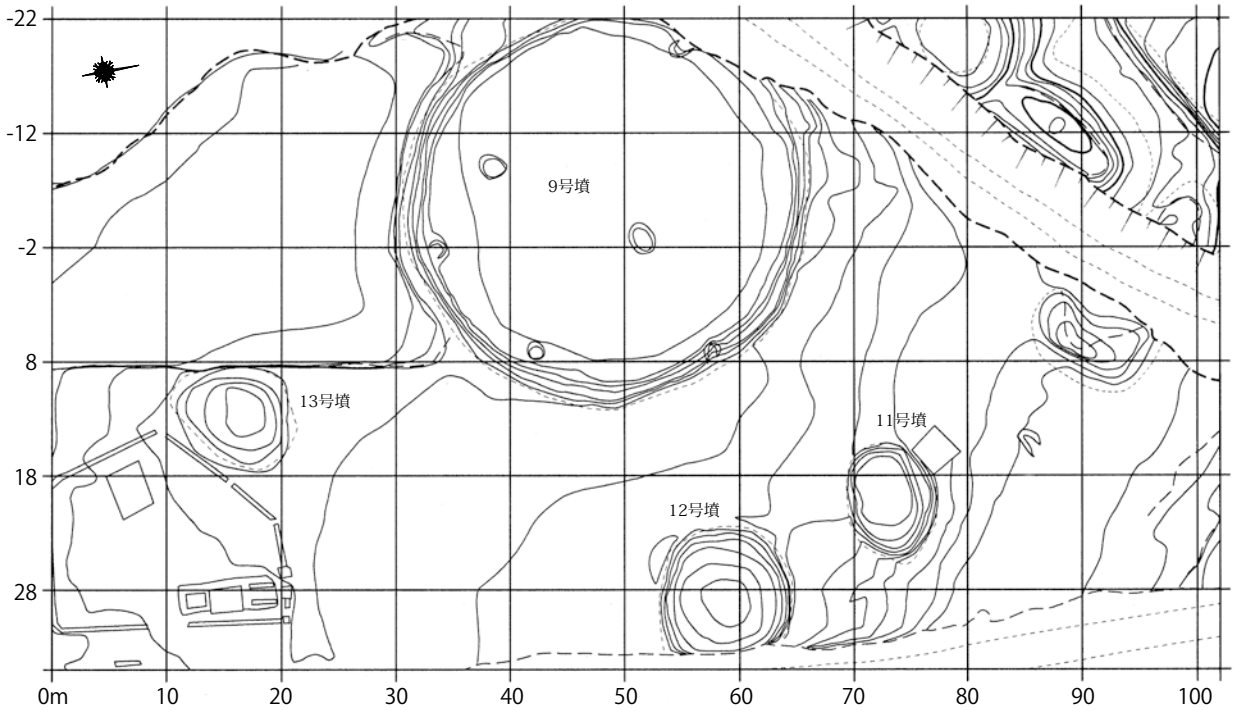
墳丘裾から外側は現地表から 0.5 ～ 0.6m でローム土による地山となるが、現況墳端から北側 3.2m から先は地山直上が撹乱土で削平を受けており、周溝外側の立ち上がりは確認できない。この撹乱と墳丘斜面との間は比較的堆積の残りが良く、Th-S 層も確認できる。墳丘裾では地下式横穴墓の竪坑が検出され、前述のレーダー探査の反応と重なる。縦軸は 1.9m あり、構築位置から玄室は 9 号墳墳丘内に位置していると考えられる。厳密な 9 号墳の墳端そのものは、この地下式横穴墓のために確認することができない。

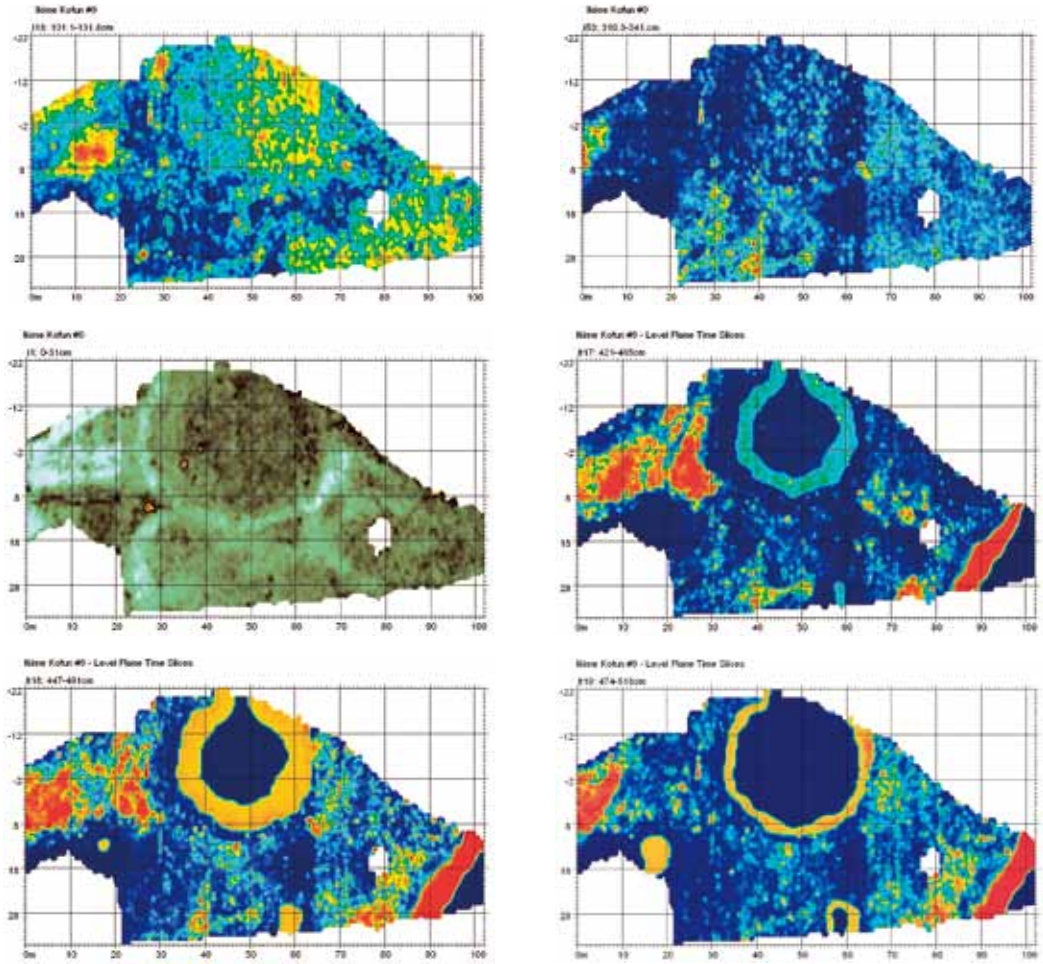
墳丘斜面も大きな削平を受けることなく比較的良好な残存状態であり、墳丘面上には自然堆積の黒ボク土が載る。先述の地下式横穴墓検出面から 0.6m の高さまでローム土の地山削り出し、その上 1.2m は盛土による。本来、地山はローム土の上にアカホヤ土、黒ボク土が堆積しているが、本トレンチ墳丘斜面では確認できない。斜面は一定の角度で傾斜し、段築、葺石は確認できない。

墳頂平坦面は現地表から 0.3 ～ 0.5m で盛土による墳丘面となる。ほぼ一定の平坦面であるが、墳丘面直上には Th-S 層が堆積している。本来の堆積では、古墳構築と Th-S 降灰の間に黒ボク土の堆積があり、前述の斜面では確認できたが、墳頂平坦面では黒ボク土の堆積は確認できない。また、墳丘面では埋葬施設と思しき遺構の存在も確認できなかった。

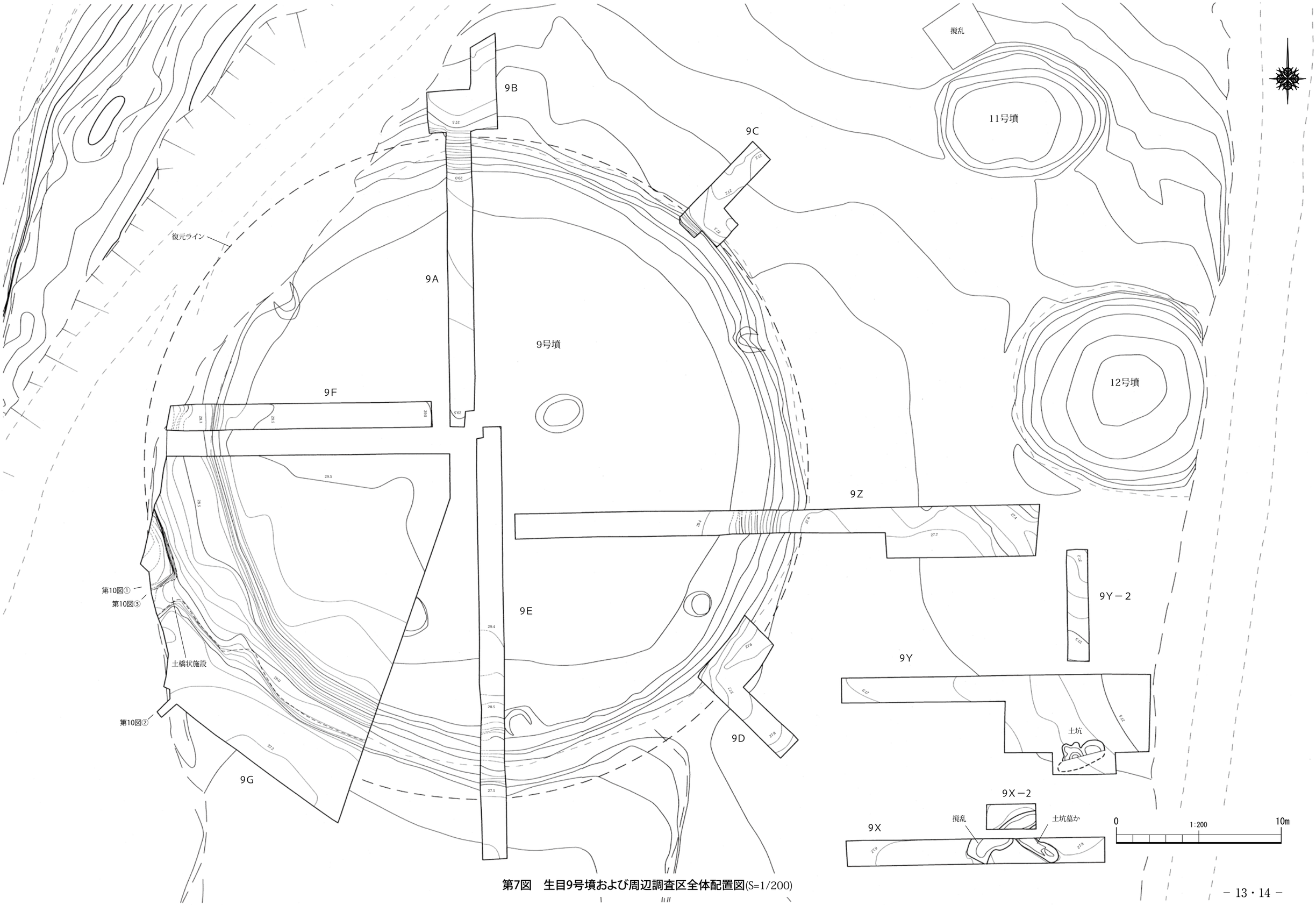
９Ｃ　9 号墳北東の墳丘裾部に設定した幅 1.5m、長 6.3m のトレンチで、後に遺構検出にともなって一部拡張をおこなった。

現地表から 0.25 ～ 0.45m で地山となるが、地山直上は撹乱土であり、一部重機のバケットによると思しき痕跡もある。そのため周溝、墳端は残存しておらず、墳丘斜面は垂直に近く削られている。墳丘斜面では盛土下の地山削り出し部分において、本来の堆積である黒ボク土、アカホヤ土、ローム土が確認できた。



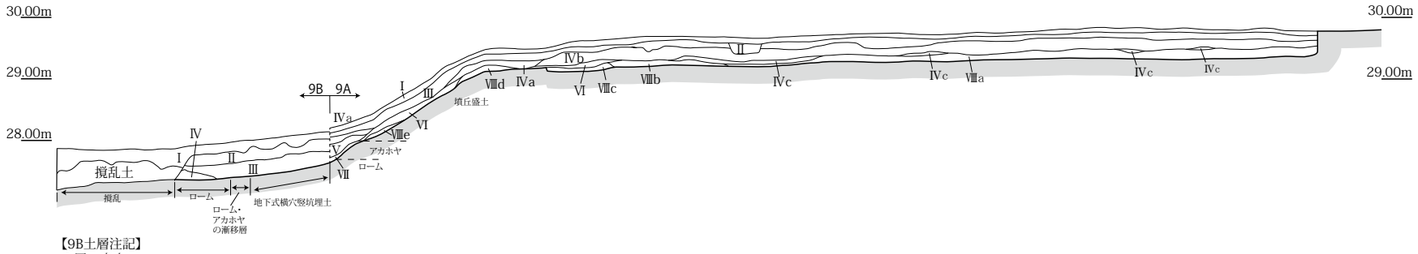


第6図　生目9号墳および周辺における地中レーダー探査結果



第7図　生目9号墳および周辺調査区全体配置図(S=1/200)

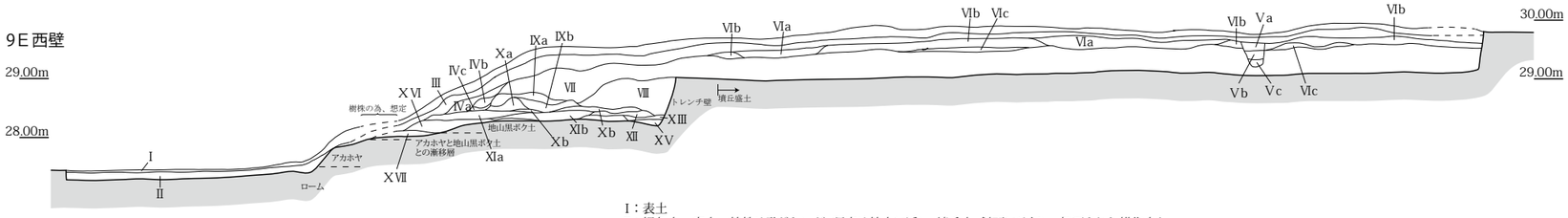
9A・B東壁



【9B土層注記】
Ⅰ層：表土
Ⅱ層：黒ボク土 (Th-S 層)　黒色 (Hue10YR2/1) 粘性あり、しまりあり、Th-S を全体的に含む。
Ⅲ層：黒ボク土　黒色 (Hue10YR1.7/1) 粘性あり、しまりあり、Th-S がわずかに含まれている。
Ⅳ層：アカホヤ土(地山)　暗褐色土(Hue10YR3/4) 粘性あり、しまりあり、粉っぽいアカホヤで構成されている。

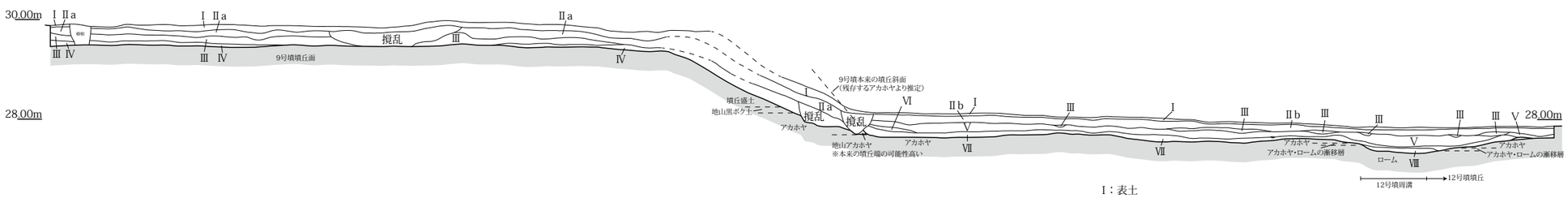
【9A土層注記】
Ⅰ：表土　9B の Ⅰ 層の一部
Ⅱ：樹根
Ⅲ：暗褐色土　客土　9E 東面のⅢ層と同じ。9B の Ⅰ 層の一部
Ⅳa：暗褐色土　客土Ⅲ層と Th-S 堆積Ⅳb 層との漸移層、ないしⅣb 層の崩れと客土との混ざりにより生成された層
9E のⅥa 層と同じ、9B の Ⅱ 層と同じ。
Ⅳb：暗褐色土　Th-S 堆積層　9E 東面のⅥb 層と同じ。
Ⅳc：暗褐色土　Th-S 堆積Ⅳb 層と墳丘盛土との漸移層。9E 東面のⅣc 層と同じ。
Ⅴ：暗褐色土　粒子が細かく、ややややわらかい　まばらにアカホヤ粒子を含有する(墳丘盛土や地山削り出し部分から
わずかに混ざり込んだもの)。墳丘築造後堆積の黒ボク土層、9B のⅢ層と同じ。
Ⅵ：暗褐色土　客土に近いややわらかさを持つ。Ⅴに似るが、やや明度が高く、また、含有されるアカホヤ粒子も径 5mm
位のやや大き目のものもいくつかある。Ⅴと同じ墳丘築造後堆積の黒ボク土と考えられるが、Ⅴよりも
墳丘の崩れ土の混ざり具合が多いものと思われる。
Ⅶ：暗褐色土　やわらかく、径数 cm のアカホヤブロックを多量に含有する。墳丘の崩れ土そのもの。
Ⅷa ～ e：暗褐色土　墳丘盛土。地山粒子、ブロック含有の割合で細分されるが、基本的には同質。9E 東面のⅦ層と同。

9E西壁



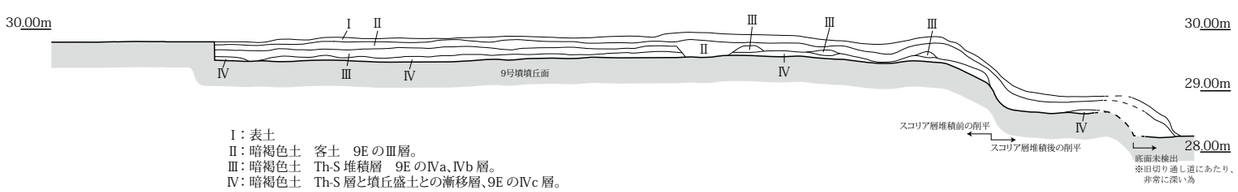
Ⅰ：表土
Ⅱ：褐色土　客土　粘性は殆どないが、硬度は粘土に近い。墳丘上、斜面には無い。転圧された耕作土か。
Ⅲ：暗褐色土　客土　色調は直下のⅥ層に似るが、しまりが無く、極めてややわらかい。Th-S 粒子 (Ⅶ層) やボラ?粒子(Ⅴ層)を
まばらに含有。ボラ?粒子は極めて微量。Th-S 粒子、ボラ粒子ともに本来的なものではなく、下の層からの混入と考えられる。
Ⅳa：暗褐色土　比較的硬くしまる。Ⅴb 層に多量に入るテフラ粒子をまばらに含有。また、極めて微量ながら Th-S 粒子をも含む。
Th-S 粒子は直上のⅢ層からの混入と思われ、本層は客土Ⅲ層とテフラ堆積Ⅴb 層との漸移層と位置付けられる。
Ⅳb：暗褐色土　テフラを極めて多量に含有。本層のテフラはⅥ層の Th-S と異なり灰白色で、極めて硬い。指頭ではつぶせない。径は 5mm
程度のものが殆どだが、稀に 1cm 大のものも混ざる。各所に形成されている客土と Th-S 層との漸移層Ⅵa 層中に当テフラの
混入が見られない事から、Th-S 降灰後の降灰物と思われ、跡江台地上で稀に確認される文明ボラかと思われる。
Ⅳc：暗褐色土　硬くしまる。Ⅴb テフラもまばらに含み、Ⅴb 層と墳丘土との漸移層と位置付けられる。
Ⅴa：暗褐色土　Th-S 粒子を極めて多量に含有。左右のⅥ層に近似するが、比してややややわらかい。Th-S 堆積によるピット埋土、
ないし左右からの崩れと思われる。
Ⅴb：暗褐色土　ややややわらかい。Th-S 粒子を多く含むが、Ⅳa 程では無い。
Ⅴc：暗褐色土　やわらかいが、Ⅳa・b に比して粒子が細かい。Th-S 粒子をまばらに含有。
Ⅵa：暗褐色土　ややややわらかい。Th-S 粒子をまばらに含有する。墳丘盛土に見られるアカホヤ粒子、ローム粒子などは一切含まれない。
客土Ⅲ層と Th-SⅥb 層との漸移層
Ⅵb：暗褐色土　硬くしまる。Th-S 粒子(径 5mm 弱の橙色粒子、指頭で押しつぶせる程の硬度のパミス)を極めて多量に含有し、
Th-S 降灰時の堆積そのものと位置付けられる。
Ⅵc：暗褐色土　局所的に数ヶ所形成されている。硬くしまる。Th-S 粒子をまばらに含有し、稀にアカホヤ粒子も見られる。
このアカホヤ粒子は、直下の墳丘盛土から混入したものであり、本層は Th-S 堆積Ⅵb 層と墳丘盛土との漸移層と位置付け
られる。本層の存在は、Th-S 堆積時に、墳丘構築後堆積の黒ボク層が存在していなかった事を示している。
Ⅶ：黒褐色粒質土　墳丘盛土　所々、硬くしまる箇所もあるが、全体的にややややわらかい。一見、墳丘構築後堆積の
黒ボク土、ないし地山黒ボク土の様にも見えるが、アカホヤやローム等の地山由来の含有物が含まれる。
全体的に径 2、3mm 程度のアカホヤ粒子(橙色の土、やわらかい、パミスではない)がまばらに入り、また、径 5cm 弱
のアカホヤ・ロームのブロックも、本セクション全体を通してわずかに数個ではあるが、含まれる。また、ローム由来かと
思しき粒子も含まれる。
Ⅷ：黒褐色粘質土　Ⅶ層に似るが、極めて硬くしまる。含有物はⅦと同じだが、ブロックは無い。また、ローム由来かと思しき
粒子の入り方の度合いがⅦ層より強い。
Ⅸa：黒褐色粒質土　Ⅶに似るが、アカホヤ粒子の含有が多く、ブロック状のものも多くみられる。硬くしまる。
Ⅸb：黒褐色粘質土　硬くしまり、Ⅸa に似るが、色調はやや明るい。含有物の入り方はⅨa と同じ。
Ⅹa：黒褐色粘質土　硬くしまる　アカホヤ粒子・ブロックを多量に含有するが、Ⅹb 程ではない。
Ⅹb：黒褐色粘質土　硬くしまる　アカホヤ粒子・ブロックを極めて多量に含有。アカホヤ土主体。
XIa：黒褐色粘質土　Ⅸb と同種。
XIb：黒褐色粘質土　ⅩⅠa と比して径 1cm 程度のアカホヤブロックの含有が更に多い。
XII：黒褐色粘質土　硬くしまる　アカホヤ・ローム等の目に付く含有物が一切無い。
ⅩⅢ：黒褐色粘質土　硬くしまる　径 1cm 程度のアカホヤブロックがまばらに見られる。
ⅩⅣ：黒褐色粘質土　Ⅹa と同質
ⅩⅤ：黒褐色粘質土　アカホヤ由来の含有物は無いが、ローム由来の粒子が多く含まれる。
ⅩⅥ：地山削り出し部分　墳丘構築前堆積の黒ボク土。
ⅩⅦ：地山削り出し部分　アカホヤと地山黒ボクとの漸移層。

9Z北壁



Ⅰ：表土
Ⅱa：暗褐色土　客土　Ⅲ・Ⅴ層に比して、やや明度が高い。9E のⅢ層。
Ⅱb：暗褐色土　客土　Th-S 粒子を極めて多量に含有するが、アカホヤ粒子、文明ボラ(?)粒子もまばらながら含有する。極めて硬くしまる。
Ⅲ：暗褐色土　Th-S 堆積層　9E のⅥa・Ⅵb 層。
Ⅳ：暗褐色土　Th-S 堆積層も墳丘盛土との漸移層。9E のⅥc 層。
Ⅴ：黒褐色土　粒子細かく、密度が高いがややわらかい。古墳築造後堆積の黒ボク土層。極めて微量に Th-S 粒子とアカホヤ粒子を含有。混入か。
Ⅵ：黒褐色土　Ⅴに似るが、アカホヤ粒子を斑状に含有。墳丘からの崩落土。
Ⅶ：暗褐色土　粒子細かくややわらかい。Ⅴ層と、その直下層との漸移層。
Ⅷ：褐色土　粒子細かくややわらかい。12 号墳周溝埋土。

9F南壁



Ⅰ：表土
Ⅱ：暗褐色土　客土　9E のⅢ層。
Ⅲ：暗褐色土　Th-S 堆積層　9E のⅣa、Ⅳb 層。
Ⅳ：暗褐色土　Th-S 層と墳丘盛土との漸移層、9E のⅣc 層。

0　1:100　5m

第8図　生目9号墳9A・9B・9E・9Z・9F土層断面図(S=1/100)

本トレンチでは地下式横穴墓かと思しき堆積を確認し、トレンチの一部拡張をおこなったが、結果撹乱坑であったことが判明した。

9Z　墳頂から東方向に設定したトレンチで、先行して墳丘裾平坦部に設定したトレンチを後に延長して墳丘上を含めたため、現況の墳丘中央からは南にずれる。長30.3m、墳丘部分から墳丘裾にかけては幅1.5m、先行して調査をおこなった墳丘裾平坦部では幅3.0mである。

墳丘裾平坦部では現地表から0.35～0.5mで地山アカホヤ層が検出される。トレンチ東端では東に隣接する12号墳の周溝が確認されたが、詳細については次節の12号墳の項にて述べる。地山上にはTh-S層、黒ボク土層の堆積が良好に残存していたが、9号墳にともなう周溝は確認されなかった。墳端位置には撹乱が入るが、現況墳端とおおむね重複する位置で、わずかに本来の墳端と思しき地山アカホヤ土の立ち上がりが確認できた。

斜面では9Ａトレンチでは確認できた墳丘面上における黒ボク土層の堆積が残存しておらず、墳丘面直上にTh-Sがまばらに混入する層が載っている。先述の墳端と思しき地山立ち上がりの残存から復原される斜面の傾斜とも大きく異なっており、早い段階で削平を受けているものと考えられる。墳端位置から0.5mの高さまでアカホヤ土と黒ボク土の地山削り出し、これより上1.2mは人為的盛土である。

墳頂平坦面は現地表から0.45mで墳丘面となる。9Ａトレンチと同じく、墳丘面上に黒ボク土層の堆積はなく、Th-S層が堆積している。また埋葬施設と思しき遺構が確認できなかった点も同様である。

9D　9号墳南東裾部に設定した幅1.5m、長6.8mのトレンチで、一部遺構の確認にともない拡張をおこなった。

現地表から0.3～0.4mでアカホヤ土およびローム土の地山となり、地山上のTh-S層、黒ボク土層の残存は良好である。本トレンチはレーダー探査において地下式横穴墓の可能性が考えられた反応の確認を主眼としたが、遺構ではなく地形的な窪みと自然堆積土の局所的な変化であったことが確認された。

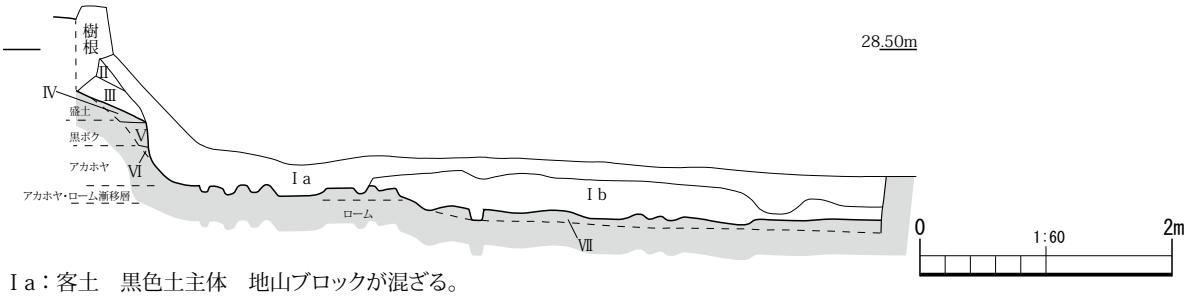
9E　墳頂中央から南方向に設定した幅1.5m、長25.0mのトレンチである。

墳丘裾平坦部は現地表より0.15mで地山ローム層となり、現況墳端から外側4.0mの位置で垂直に立ち上がる。地山上には耕作土が堆積しており、墳端を含め大きく削平されている。

墳丘斜面も大きく削平を受け原形をとどめていないが、一部墳丘面上で桜島第3テフラと思しき堆積があり、中世段階での削平がおこなわれている可能性が高い。墳丘裾平坦部で検出された地山面から1.0mの高さまでは地山黒ボク土、アカホヤ土、ローム土が観察されるが、アカホヤ土堆積上部のレベルまで先述の耕作土が載っており、本来の地山削り出しがアカホヤ土、ローム土まで含んでいたかどうかは明確ではない。墳丘盛土は一部断ち割りをおこない、黒褐色粘質土を細かく積み重ねて墳丘を構築していることが確認できた。ただし、ブロック状に入る観もあり、典型的な版築という様相ではない。

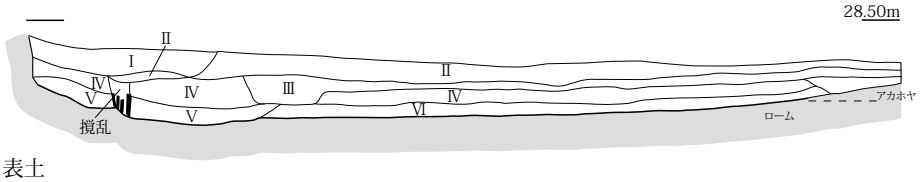
墳頂平坦面では現地表からおおむね0.4mで墳丘面となる。9Ａトレンチ、9Ｚトレンチと同じく、墳丘面直上にはTh-S層が載り、自然堆積の黒ボク土層はない。埋葬施設と思しき遺構が検出されなかったことも同様である。また平坦面上でも一部墳丘の断ち割りをおこなっているが、これにお

9Ｃ北西壁

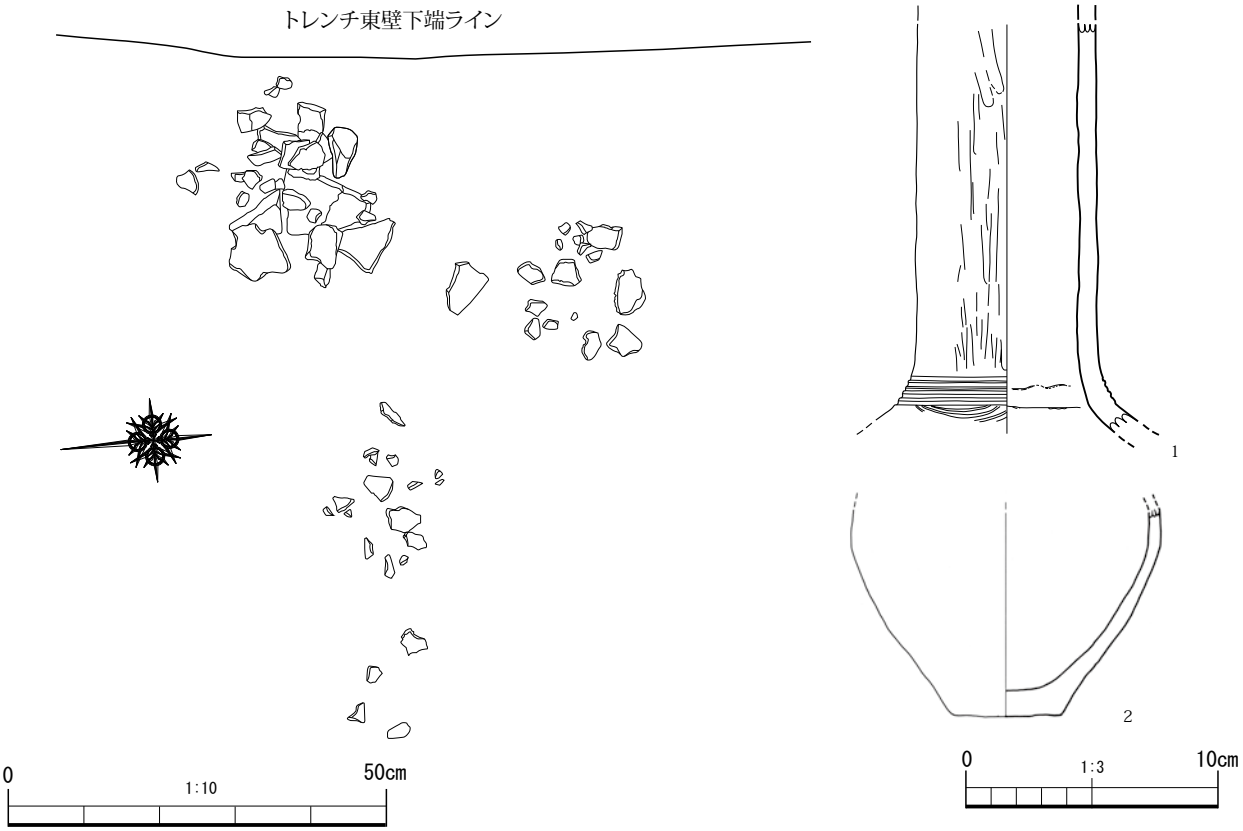


Ⅰa：客土　黒色土主体　地山ブロックが混ざる。
Ⅰb：客土　褐色土（アカホヤ・ローム）ブロック主体　黒色土がまだらに入る。
Ⅱ：黒褐色　しまりあり　1 ～ 2mm 程度の Th-S を少量含む。
Ⅲ：黒褐色　しまりあり　1mm 程度のアカホヤ粒子を微量に含む。自然堆積の黒ボク層（基本層序Ⅳ層）
Ⅳ：黒色　しまりあり　1 ～ 2mm 程度のアカホヤ・ロームブロックを少量含む。Ⅴ層よりやや明るい。墳丘盛土。
Ⅴ：黒色　しまりあり　形成する粒子が細かく、含有物が無い。やや粘性あり。地山の黒ボク層。（基本層序Ⅴ層）
Ⅵ：アカホヤ（地山）
Ⅶ：ローム（地山）

9Ｄ南西壁



Ⅰ：表土
Ⅱ：黒褐色土　Hue10YR2/2、しまりなし、粘性なし、Th-S を全体的に多く含んでいる。（Th-S の二次堆積）
Ⅲ：黒色土（Th-S 層）Hue10YR2/1、しまりややあり、粘性なし、Th-S を全体的に多く含んでいる（Ⅱ層よりも Th-S の密度は低い）
Ⅳ：黒ボク土　Hue10YR1/1、しまりなし、粘性あり、純粋な黒ボク土ではなく、Th-S もわずかながらに含んでいる。
Ⅴ：地形の窪み（撹乱を挟んで墳丘側ではアカホヤ粒子が、外側ではアカホヤブロック、黒ボク土、ロームが混じりあっている）
Ⅵ：黒ボクとロームの漸移層。



第9図　生目9号墳9Ｃ・9Ｄ土層断面図、(S=1/60)**9Ｅ遺物出土状況図**(S=1/10)**、9Ｇ出土遺物実測図**(S=1/3)

いても埋葬施設の存在は確認できなかった。

墳頂平坦面の Th-S 層中からは大型の壺かと思しき土器片が一定量出土したが、図化はできなかった。

9 G　9 号墳の南西、9 Ｅトレンチと 9 Ｆトレンチの間において、現況墳丘中央から墳丘裾まで設定した調査区である。レーダー探査において見出された墳丘土中の鍵穴形の反応の確認と、北西に隣接する 33 号墳が 9 号墳と合わせて 1 基の前方後円墳であった場合に想定されるくびれ部の位置において、9 Ｅトレンチ、9 Ｆトレンチでの調査ののち、広く面的に調査をおこなった。

墳丘裾平坦面部では、現地表から 0.3 ～ 0.5m でローム土の地山に達する。地山上の堆積は Th-S 層と黒ボク土層が残り比較的残存状態が良好である。墳端から外側に 4.0m までローム土を床面とする平坦面が続き、先述の堆積もそのままであるが、その先は客土によって破壊され、周溝外側の立ち上がりは見出せなかった。調査区北半においては、長い長方形壇が墳丘に沿って取り付いているように見えるが、直上には近現代の耕作土が載っており、本来の墳丘が耕作によって壇状に削り込まれたためと思われる。

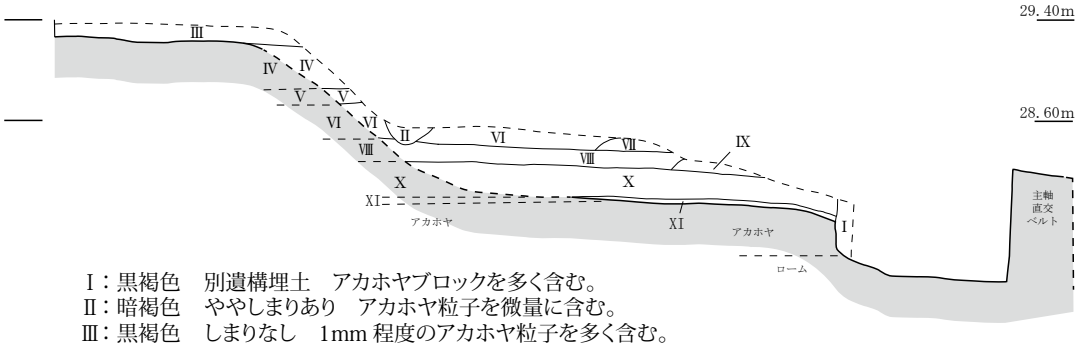
調査区西端においては墳丘から外側に伸びる土橋状の施設を検出した。アカホヤ層以下の地山を垂直に近く削り出して構築されており、検出面での上端幅は 1.1m、底面からの高さ 0.4m（南側）であるが、直上は耕作土であるため、本来の規模、高さではない。また、北側には後述する別の大型の遺構が掘り込まれており、現状では土橋状に見えるが、本来は平坦面が更に北へ続く、墳丘に取り付く突出部であった可能性もある。

この土橋状施設の北側は南側よりも更に垂直に近く立ち上がるが、これは、別の遺構が掘り込まれていることによる。この遺構の埋土は通有に周溝内に見られる Th-S 層や黒ボク土層ではなく、地山のアカホヤ土、ローム土のブロックや粒子を含有する土で、墳丘盛土や地下式横穴墓の竪坑埋土などに見られるものである。以西が切り通しの道として大規模に削平されているため、本遺構の大半は消失していると思われるが、検出面における残存長軸 4.0m、短軸 1.7m と大規模なものである。垂直に近い壁面から深 0.9m ほどで緩やかなすり鉢状の床面となるが、床面そのものは切り通し道の削平により検出できなかった。墳丘側では、この遺構が墳丘斜面上の堆積土の上から掘り込まれていることが確認できるため、古墳構築後、一定期間の後につくられたものであることがわかるが、遺物の出土がないため、正確な時期は不明である。ただし埋土中にはまったくテフラが含まれないことから、Th-S 降灰以前のものである可能性が高い。なお、この土橋状施設の南側ではある程度の点数の土器片が出土しているが、いずれも近現代の耕作土中よりの出土である（**第 9 図 1・2**）。

墳丘斜面は先述の墳端等、一部で本来の形状を残していると思しき箇所もあるが、大半は大幅に削平を受けている。底面から 0.9m ほどの高さまで、ローム土、アカホヤ土、黒ボク土の地山削り出し、これ以上が人為的な盛土となる。盛土は、先述の 9 Ｅトレンチでの状況とは異なり、比較的水平に近く土が積み重ねられており、一部、外側に土手状の盛土をした後、その環状の内側を埋めたような堆積が観察できる（**第 10 図上 Ⅶ・Ⅸ層**）。

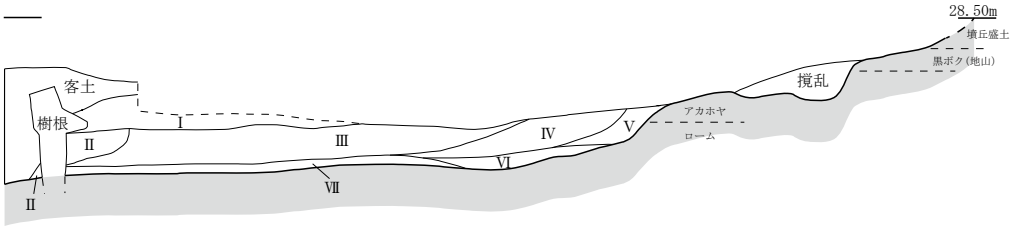
墳頂平坦面はその名の通り比較的平坦であるが、他のトレンチの状況と同様墳丘面直上に Th-S 層が堆積しており、墳丘構築時の形状かどうか確実ではない。レーダー探査における鍵穴形の反応については、平面観察ではそのような形状の盛土状況は見出せなかった。墳丘中央付近で、比較的

①9G　土橋状施設北側ー墳丘



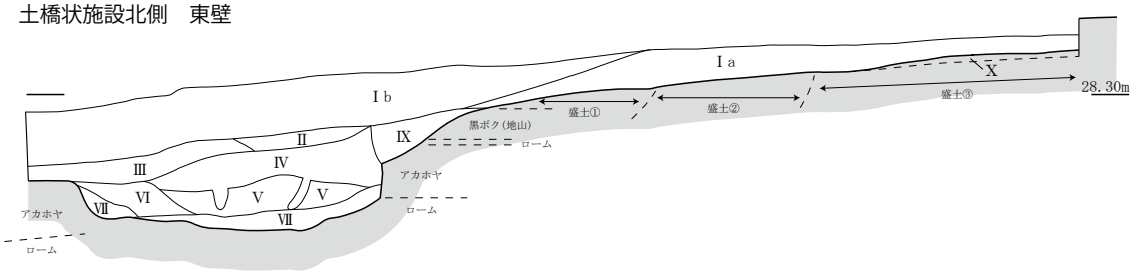
Ⅰ：黒褐色　別遺構埋土　アカホヤブロックを多く含む。
Ⅱ：暗褐色　ややしまりあり　アカホヤ粒子を微量に含む。
Ⅲ：黒褐色　しまりなし　1mm 程度のアカホヤ粒子を多く含む。
Ⅳ：黒褐色　しまりなし　1 ～ 20mm 程度のアカホヤ粒子・ブロックを含む。
Ⅴ：黒色　　ややしまりあり　1mm 程度のアカホヤ粒子と 5mm 程度のロームブロックを少量含む。
Ⅵ：黒褐色　しまりあり　1 ～ 4cm 程度のアカホヤブロック、1cm 程度のロームブロックを多く含む。（盛土③）
Ⅶ：黒色　　しまりあり　1 ～ 2cm 程度のアカホヤ粒子を微量に含む。Ⅹ層よりやや明るい。（盛土②）
Ⅷ：黒色　　かたくしまる　Ⅹ層よりやや明るい。褐色土をまだらに含む。粒子等含まない。
Ⅸ：暗褐色　かたくしまる　1 ～ 2mm 程度のアカホヤ・ロームブロックを多く含む。（盛土①）
Ⅹ：黒色　　かたくしまる　やや粘性あり。形成する粒子が細かい。地山の黒ボク層。（基本層序Ⅴ層）
ⅩⅠ：褐色　かたくしまる　地山黒とアカホヤの中間層でローム質。

②9G　周溝内ベルト　南東壁



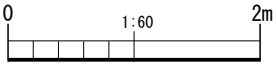
Ⅰ：暗褐色　かたくしまる　スコリア粒を非常に多く含む。3mm 程度の軽石、小礫を少量含む。
Ⅱ：黒褐色　しまりあり　1 ～ 3mm 程度のスコリア粒を含む。（基本層序Ⅲ層）
Ⅲ：黒色　　しまりあり　1mm 程度の橙色粒子を微量に含む。（基本層序Ⅲ層）
Ⅳ：黒色　　しまりあり　Ⅲ層よりやや明るく、含む橙色粒子の量もⅢ層より多いが質的にはⅢ層と同じと考える。
Ⅴ：暗褐色　しまりあり　1 ～ 5mm 程度の橙色粒子（アカホヤ）を多く含む。
Ⅵ：暗褐色　しまりあり　1 ～ 4cm 程度のアカホヤ、ロームブロックを含む。
Ⅶ：褐色　　しまりあり　床面の地山ローム土と直上層の黒ボク層が混ざり合う層。（漸移層）

③9G　土橋状施設北側　東壁



Ⅰa：暗褐色 ややしまりあり　微量にスコリア粒を含む 1 ～ 5mm 程度のアカホヤ粒子を少量含む。1 ～ 3mm 程度の軽石を少量含む。
Ⅰb：暗褐色 ややしまりあり　スコリアを多く含む。3mm 程度の軽石を少量含む。
Ⅱ：暗褐色　ややしまりあり　1mm 程度の橙色粒子（アカホヤ）を微量に含む。
Ⅲ：黒褐色　ややしまりあり　1 ～ 5mm 程度の橙色粒子（アカホヤ）を微量に含む。
Ⅳ：褐色　　しまりあり　1 ～ 10cm 程度のアカホヤ・ロームブロックを多く含む。
Ⅴ：黒色　　しまりあり　1 ～ 3mm 程度の橙色粒子を微量に含む。
Ⅵ：黒褐色　しまりあり　1 ～ 5mm 程度のアカホヤ・ローム粒子を少量含む。
Ⅶ：暗褐色　しまりあり　1 ～ 5mm 程度のアカホヤ・ローム粒子を少量含む。
Ⅷ：褐色　　かたくしまる　1 ～ 10cm 程度のアカホヤ・ロームブロックを非常に多く含む。
Ⅸ：黒色　　しまりあり　1mm 程度の橙色粒子を微量に含む。
Ⅹ：黒褐色　しまりあり　1mm程度の橙色粒子（アカホヤ）を非常に多く含む。1～2cm程度のアカホヤ・ロームブロックを含む。（墳丘盛土③）

盛土①暗褐色　1 ～ 7cm 程度のアカホヤ・ロームブロックを多く含む。
　　②黒色　　1 ～ 10cm 程度のアカホヤ・ローム粒を含む。色味は黒だが、やや明るめ。
　　③黒褐色　1 ～ 15cm 程度のアカホヤ・ロームブロックを多く含み、黒ボク土もまだらに含む。



第10図　生目9号墳9G土層断面図(S=1/60)

広範囲にわたって土器細片や外面平行タタキ、内面同心円当て具痕の須恵器片が出土しているが、いずれも図化はできなかった。

9Ｆ　現況墳頂中央から西方向に設定した幅 1.5m、長 15.4m のトレンチである。

9 号墳の西から北西にかけては、かつて大規模な切り通しの道が入っており、墳丘裾は残存していない。現況墳端から切り通し道の間は、現況でテラス状の平坦部が幅 2.5m ほど形成されているが、黒ボク土、Th-S 堆積土ともになく、近年、墳丘を削り込む形で形成されたものであり、切り通し道の掘削にともなうものの可能性もある。この平坦部から現況斜面にかけて検出された墳丘部分は人為的な盛土であり、下位の地山削り出し部分は削平によって残存していない。

墳頂平坦面では現地表から 0.3 ～ 0.4m で墳丘面となる。9Ａ・9Ｚ・9Ｅトレンチと同様、墳丘面上には Th-S 堆積土が載り、黒ボク土は堆積していない。また埋葬施設が検出されなかったことも同様である。

出土遺物（第９図）　1・2 ともに 9Ｇ調査区土橋状施設近くの客土中より出土したものである。1 は弥生時代の免田式土器頸部である。磨滅が激しいが直線的な頸部は外面全体にミガキが施され、肩部には線刻による重弧文が見られる。2 は土器底部である。底部がやや突出気味の中型壺かと思われ、弥生時代末～古墳時代前期の範疇で捉えられる。

小結　近年の耕作および切り通し道による墳丘周辺の削平が大きいが、9Ｚトレンチと 9Ｇ調査区で 9 号墳本来の墳端を確認することができた。また 9Ａトレンチでは墳丘裾に地下式横穴墓が構築されているため厳密に墳端そのものは確認できないが、地下式横穴墓の竪坑が墳丘を大きく削り込んで構築されるとは考え難いので、墳丘側の地下式横穴墓竪坑端が、おおむね墳端位置になると思われる。以上より復元すると 9 号墳の径は 38m となる。

墳丘の高さについては北側で 1.8m、南側で 2.2m であるが、墳頂平坦面においては墳丘盛土の直上に Th-S 層が堆積しており、11 ～ 13 世紀の Th-S 降灰以前に何らかの大規模な削平がおこなわれている可能性が高い。墳丘上のトレンチ、調査区ともに埋葬施設と思しき遺構の検出がなされなかったことも、この削平によるものかと思われる。

残存する墳丘斜面はもとより、墳丘の覆土や周溝内からも葺石の転石と思しきものの出土は皆無であったため、葺石を持たない古墳であったと考えられる。段築についても検出されなかったが、先述のとおり墳丘上部が大幅に削平されている可能性があり、その有無については明確ではない。

地中レーダー探査において見られた墳丘土中の鍵穴形の反応については、発掘調査ではその正体を確認することはできなかった。ただし一部セクションにおいて、墳丘盛土は外側に土手状の盛土をおこなったのち、その中を埋めるような形で構築がおこなわれていったと観察できる箇所があり、レーダーの反応についても、このような構築単位が反映されたものかと考えられる。レーダーの反応に見られる北西への突出については、その先が切り通し道によって大規模に削平されており、明らかにはならなかった。

周溝については、墳丘下部が地山削り出しであるため、本来、周溝が巡っていたと考えるのが自然であるが、12 ヶ所のトレンチ、調査区いずれにおいても周溝外側の立ち上がりが検出できなかったため、その有無については明確ではない。9Ｅ調査区において墳丘に付帯した地山削り出しによる施設が土橋であれば周溝の傍証になるとも思われるが、当該施設は突出部の可能性もあり、9 号

墳が周溝を持たない古墳であった可能性も残る。

調査面積に比して遺物の出土は僅少かつ細片が殆どで、良好な資料には恵まれなかった。図化した2点も客土中出土であり、9号墳の時期を直接的に示すものではない。墳丘頂部では須恵器片も出土しているが比定される時期幅が広く、かつ墳丘上では比較的早い段階での削平がおこなわれていると考えられるため、やはり9号墳の時期を示す資料としての評価はできない。

ただし、9号墳周辺一帯は8号墳、11号墳、12号墳、13号墳、32号墳と円墳が集中するエリアであり、かつそれらは9号墳を取り巻くように位置している。最大規模の9号墳が、これら密集する円墳群構築後の空隙地に築かれたと考えるよりは、これらに先行して9号墳が存在していたと見る方が可能性は高いように思われる。

(2) 9号墳周辺

9号墳の南東側、12号墳の南側に位置する現況空隙地において、前項に述べたレーダー探査により円墳周溝かと思われる反応が見出された。墳丘が削平された消滅墳の可能性があり、確認のため当該箇所に5本のトレンチを設定し、調査をおこなった。

9Ｘ・9Ｘ－2　9Ｘは当該箇所において最も南に東西方向で設定した幅1.5m、長15.0mのトレンチ、9Ｘ－2はこれの北に隣接して設定した幅1.5m、長2.9mのトレンチである。

9Ｘトレンチでは現地表から0.25m前後でアカホヤ土の地山に達し、地山上堆積土の大半は客土であるが、地山直上では自然堆積の黒ボク土と地山の漸移層が形成されており、地山面は古墳時代前後の形状を留めていると判断される。地山は東側にむけてきわめて緩やかに傾斜しており、トレンチ西端と東端で最大0.22mの高低差がある。

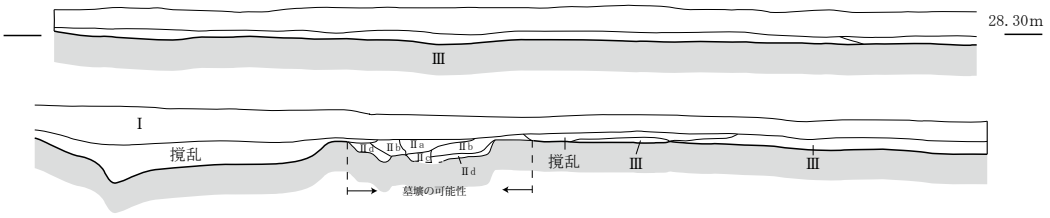
トレンチ東半において2基の溝状の堆積が確認された。方形溝となる可能性もあり、隣接して9Ｘ－2トレンチを設定して検討した結果、西側の1基については撹乱と判断した。東側の1基については何らかの遺構と考えられる。検出面での上端幅は0.85m、深0.15mであるが、この遺構は直上に客土が堆積しており、本来の規模は不明である。埋土の状況から、やや狭小ではあるが土坑墓の可能性が考えられる。

9Ｙ・9Ｙ－2　9Ｙは空隙地のほぼ中央、9Ｘ－2トレンチの北側に東西方向で設定した幅1.5m、長17.9mのトレンチで、後に南側に最大で4.4mの拡張をおこなった。9Ｙ－2は9Ｙに直交する軸で北側に隣接して設定した幅1.3m、長6.6mのトレンチである。

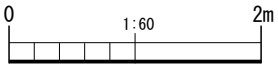
9Ｙトレンチでは現地表からおおむね0.2mで、トレンチ西半においてはアカホヤ土、トレンチ東半ではローム土の地山に達する。地山直上が客土であり、本来の形状、高さを保ったものかは明確ではない。

トレンチの東側では暗褐色土の堆積が広範囲に認められ、何らかの遺構の可能性があるため確認のためにトレンチの拡張および北側に隣接して9Ｙ－2トレンチを設定して調査をおこなった。結果として暗褐色土の性格は判然としなかったが、9Ｙにおける拡張区の南端において土坑状の遺構を検出した（**第11図　9Ｙ　SD1**）。平面形はやや不整形で、長軸2.8m、短軸は最大で1.6mである。半裁して埋土を確認したところ、断面形も不整形で、数種の埋土が確認できた。地山土のブロック、粒子を含む土坑墓の可能性が考えられる土もあるが、ピット等複数の遺構が切り合ったものである

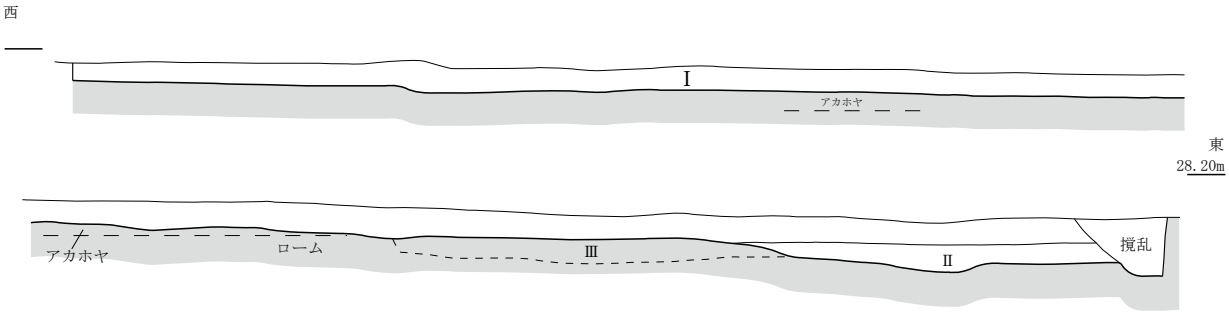
9X



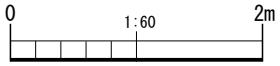
Ⅰ：表土層。
Ⅱ：黒ボク土層。(Hue10YR7/1 黒色)
Ⅲ：漸移層：Ⅱ層と地山アカホヤ土との漸移層。



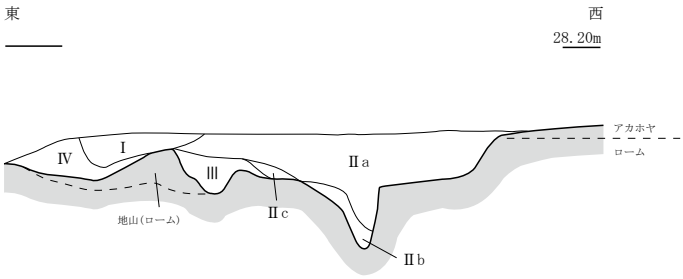
9Y北壁



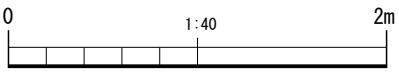
Ⅰ　暗褐色　硬くしまる　炭化物、小礫、アカホヤ、ローム、Th-Sを多く含む。客土。(耕作土)
Ⅱ　黒褐色　しまりあり　Th-S粒を多く含む。(Th-S層)
Ⅲ　褐色　しまりあり　地山。(ローム)



9Y　SD1



Ⅰ：しまりあり　黒褐色　Th-S 粒多く含む。(Th-S 層)
Ⅱa：ややしまりあり　暗褐色　1 ～ 5mm 程度のアカホヤ、ロームブロック粒子を含む。
Ⅱb：しまりなし　暗褐色　1mm 程度の橙色の粒子を微量に含む。
Ⅱc：ややしまりあり　暗褐色　1mm 程度の橙色粒子を少量含む。
Ⅲ：しまりあり　暗褐色　1 ～ 5cm 程度のアカホヤブロックを多く含む。
Ⅳ：しまりあり　褐色　1 ～ 4mm 程度のアカホヤ、ローム粒子を多く含む。黒ボク土がまだらに入る。



第11図　生目9号墳9Ｘ・9Ｙ土層断面図(S=1/60)、**SD1実測図**(S=1/40)

可能性もある。出土遺物はなく、明確な時期は不明であるが、一部、最上層として Th-S 層があり、これの降灰以前のものであることは知れる。

また 9 Ｙトレンチ東端においては Th-S 層を埋土とする段状の落ち込みが幅 3m にわたって検出された。ローム土の地山直上に Th-S が堆積しているため、降灰以前の整地等の可能性が考えられる。

なお 9 Ｙ－２トレンチでは 12 号墳の墳端および周溝が確認されており、これについては次節の 12 号墳の項で詳述する。

9 Z　9 Ｙ－２トレンチの北西に東西方向で設定したトレンチである。調査の結果、消滅墳の周溝は確認されなかったが、12 号墳の墳端および周溝が確認され、またのちに 9 号墳墳丘上からのトレンチと連結したため、詳細については 9 号墳および 12 号墳の項で詳述する。

小結　結果としてレーダー探査で見られた消滅墳の周溝らしき遺構はいずれのトレンチにおいても検出されなかったが、東側に緩やかに下る旧地形の確認および数基の遺構が確認できた。特に Th-S 降灰以前に整地かと思しき旧地形の削平がおこなわれていた可能性を確認できたことは、9 号墳をはじめ周辺の古墳の現況を考える上で重要である。

第 3 節　生目 11・12 号墳の発掘調査成果

(1) 11 号墳

9 号墳の北東、12 号墳の北に隣接する現況高 0.85m（南側）、平面長軸 10.7m、短軸 7.7m の東西に長い楕円形の小円墳である。現況墳丘端から東に 7m 弱で崖（台地際に入れられた道）となり、台地の際に位置している。また現況の地形は、南側はほぼ平坦であるが、11 号墳を境として北東に向かって傾斜している。

調査はほぼ東西南北の十字状にトレンチを配置しておこなった（11 C、11 E、11 G）。ただし 11 号墳の北側は大きく傾斜しており、現況で大型の撹乱坑も存在するためトレンチは設定しなかった。また、11 号墳における周溝残存の有無を確認するため、上記 3 ヶ所のトレンチ調査ののち、南西側にもう 1 箇所のトレンチを追加して調査をおこなった（11 F）。

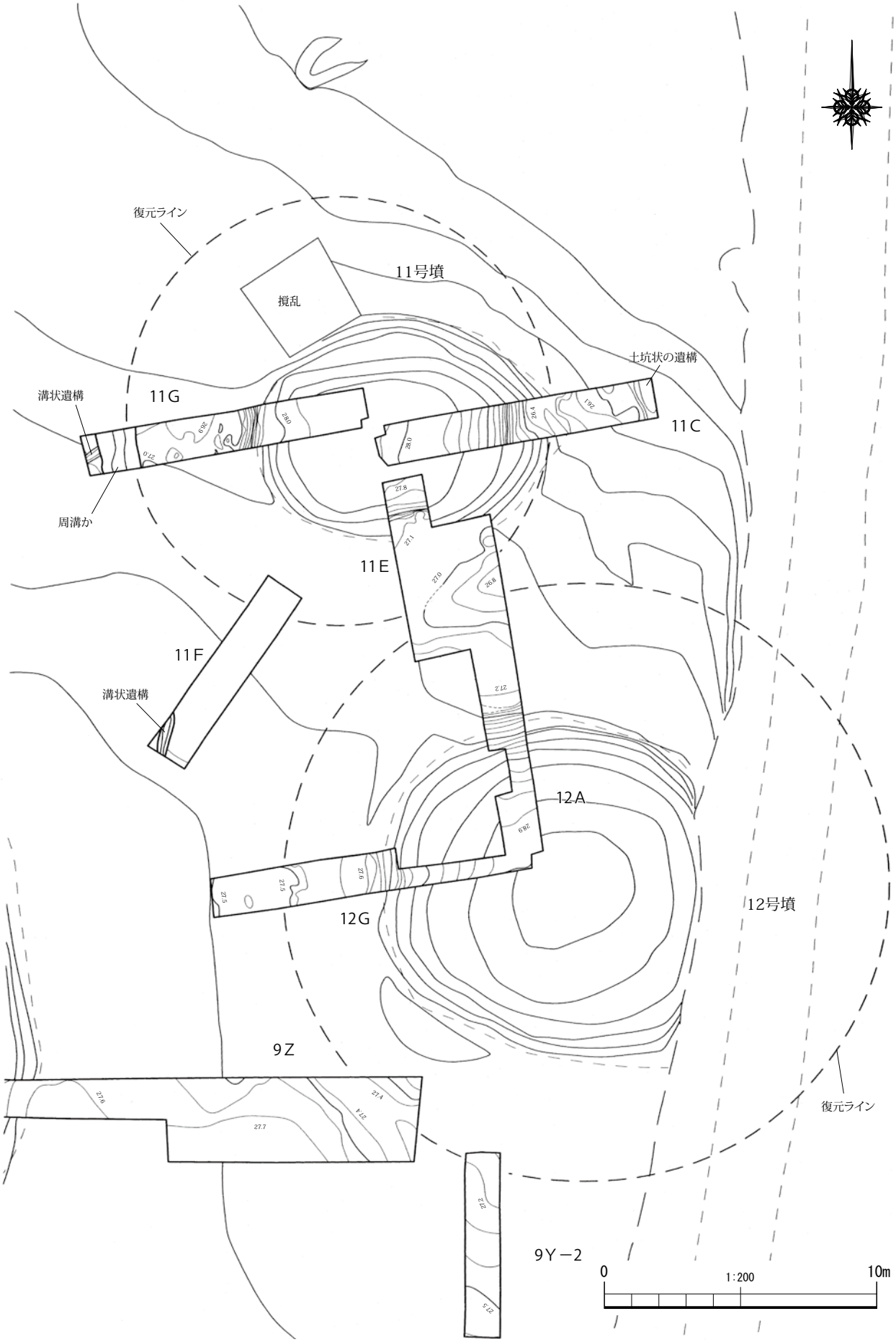
11 C　現況墳頂中央から東方向に設定した幅 1.5m、長 9.9m のトレンチである。

墳丘裾の平坦面部は東側に傾斜しており、ローム土の地山直上に広範にわたって撹乱土が堆積している。この撹乱の削平によって墳端および周溝は残存していない。またトレンチ東端において、土坑状の遺構を検出した。掘り下げはおこなっていないが、検出面における埋土の観察から、地下式横穴墓の可能性も考えられる。ただし、想定される墳丘端から 3m 以上外側に離れており、地下式横穴墓の場合でも、11 号墳にともなうものかどうかは明確ではない。

墳丘は高 1m ほどが地山（下からローム土、アカホヤ土、黒ボク土）削り出し、その上に 0.8m ほど暗褐色土を主体として地山のアカホヤ土、ローム土のブロック・粒子が混ざった土により盛土が施されている。斜面中、地山削り出し部分上部から下は傾斜が大きくなっており、前述の撹乱土にともない、墳丘斜面も削平を受けているものと考えられる。

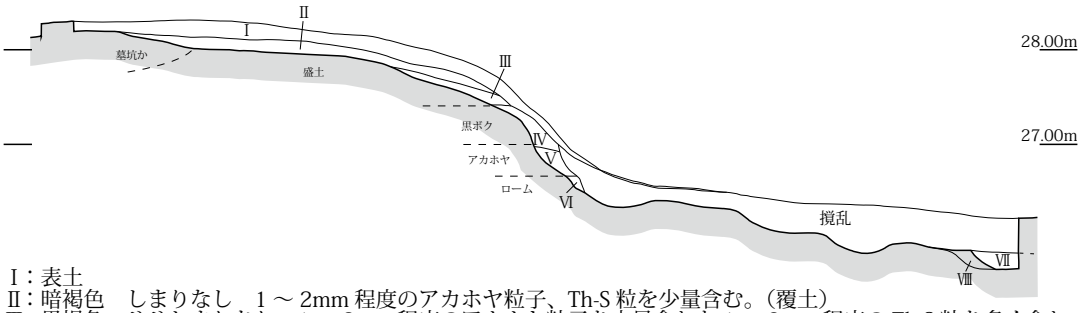
墳丘部分は現地表から 0.1 ～ 0.3m で墳丘面となる。墳頂中央付近で土師器甕・壺等と思しきやや厚手の微細片が出土しているが、図化は出来なかった。

11 E　現況墳丘中央の 11 Ｃトレンチから 0.4m ほどの間を空けて、南方向に設定したトレンチであ



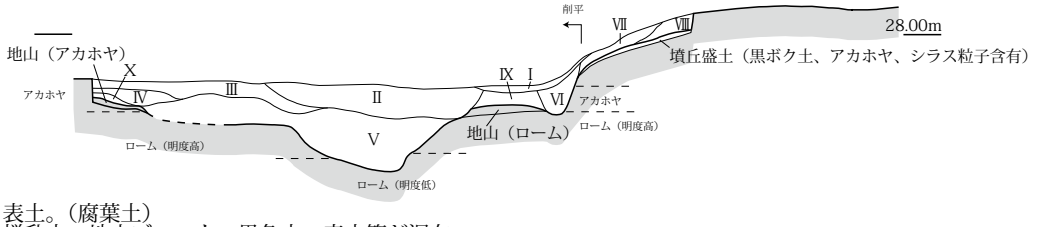
第12図　生目11号墳・12号墳調査区配置図(S=1/200)

11Ｃ北壁

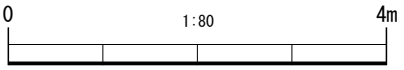


Ⅰ：表土
Ⅱ：暗褐色　しまりなし　1 ～ 2mm 程度のアカホヤ粒子、Th-S 粒を少量含む。（覆土）
Ⅲ：黒褐色　ややしまりあり　1 ～ 2mm 程度のアカホヤ粒子を少量含むも 1 ～ 3mm 程度の Th-S 粒を多く含む。（墳丘覆土）
Ⅳ：黒褐色　しまりなし　Th-S を含まない、地山の黒ボクに似る。
Ⅴ：暗褐色　しまりなし　アカホヤと地山黒ボクをまだらに含む。
Ⅵ：褐色　　しまりあり　ロームブロックとアカホヤをまだらに含む。
Ⅶ：黒　　しまりあり　粒子等を含まない。黒ボク層。別遺構埋土。時期不明。
Ⅷ：褐　　しまりあり　地山。（ローム）

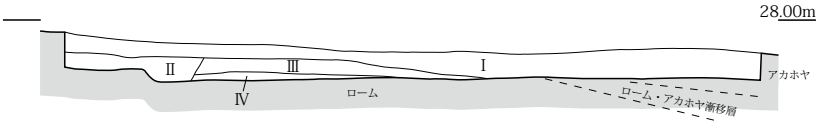
11Ｅ西壁



Ⅰ：表土。（腐葉土）
Ⅱ：撹乱土。地山ブロック、黒色土、表土等が混在。
Ⅲ：撹乱土。暗灰色土を主体とし、地山粒子やテフラ状の粒子を含有。
Ⅳ：撹乱土。Ⅱと同質。
Ⅴ：撹乱土。黒ボク土を主とし、アカホヤブロック、灰色土等を含有。
Ⅵ：撹乱土。暗褐色の腐葉土、樹根か。
Ⅶ：暗褐色土　フカフカでしまり、粘性ともに無し。微量にテフラを含有する。
Ⅷ：黒褐色土　Ⅶに似るが、やや明度が低く、湿性もある。アカホヤ粒子、
　　ローム粒子等は含まない。
Ⅸ：客土　　暗褐色土を主体とし、明黄褐色土、黒色土等が混在。
Ⅹ：暗褐色土　　しまり、粘性ともにあり、微量に Th-S 含有　本来的な堆積土。

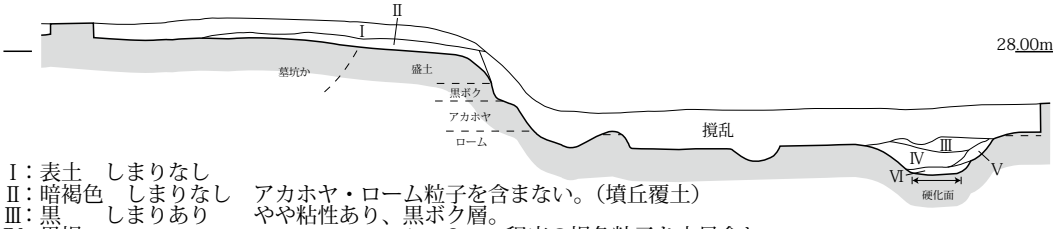


11Ｆ北西壁



Ⅰ：暗褐色土　かたくしまる。Th-S を多く含む。地山（アカホヤ・ローム）のブロックや粒子、小礫などを含む。
　　またビニール等も含む。（客土）
Ⅱ：黒褐　　ややしまりあり。1 ～ 5cm 程度のロームブロックを含む。Th-S 粒を微量に含む。
　　中世以降（Th-S 降灰後）の遺構埋土。
Ⅲ：黒　　しまりあり。1 ～ 3cm 程度の Th-S 粒を多く含む。（基本層序Ⅲ層）
Ⅳ：褐　　しまりあり。褐色ローム土に黒ボク層がまだらに入る。（地山の漸移層か）

11Ｇ南壁



Ⅰ：表土　しまりなし
Ⅱ：暗褐色　しまりなし　アカホヤ・ローム粒子を含まない。（墳丘覆土）
Ⅲ：黒　　しまりあり　　やや粘性あり、黒ボク層。
Ⅳ：黒褐　　〃　　〃　　1 ～ 2 mm 程度の褐色粒子を少量含む。
Ⅴ：暗褐　　〃　　Ⅳ層よりやや明るい。1 ～ 3mm 程度の褐色粒子を含む。
Ⅵ：褐　　〃　　Ⅳ・Ⅴ層と地山（褐色ローム）との漸移層。

第13図　生目11号墳土層断面図(S=1/80)

る。当初は幅 1.5m、長 6.4m のトレンチであったが、墳丘裾の平坦面部分では昭和 30 年代に設置された石製の境界柵をはじめ多数の撹乱が入っており、墳端部を確認することができなかったため、拡張して隣接する 12 号墳に設定した 12 Ａトレンチと連結し、面的に調査をおこなった。

墳丘裾の平坦面部分では、11 号墳と 12 号墳の間で 1 条の周溝を確認したが、次項に述べる 12 号墳にともなうものである可能性が高い。11 号墳と 12 号墳の周溝が重複したものである可能性もあるが、周溝内堆積土の観察では切り合い関係は見出せず、また後述する 11 Ｆトレンチでは周溝が検出されなかったため、11 号墳にともなうものではないと判断した。この周溝の立ち上り（12 号墳外側）からわずかに 0.25m 離れた位置に 11 号墳の墳端かと思しき傾斜変換が確認できる。想定される墳端一帯のほとんどは撹乱によって削平されており、この傾斜変換の残存がごくわずかであるためやや確度に欠けるが、墳丘斜面において本来に近い形状が残存していると思しき部分から復原、推定される墳端位置とほぼ重なるため可能性は高い。またこの平坦面部分では遺物も一定量出土しているが、すべて 12 号墳周溝での検出であり、11 号墳にともなうものではない。

墳丘斜面においては 11 Ｃトレンチと同様、下部でアカホヤ土、ローム土の地山削り出し、上部で地山土のブロック・粒子を含有する暗褐色土の盛土を確認した。下半が削平によって急傾斜となっているのも同様である。

11 F　先述の 11 Ｅトレンチで確認された周溝が 11 号墳にともなうものか否かを検討するために、11 号墳南西側（11 Ｅトレンチと 11 Ｇトレンチの間）に設定した幅 1.4m、長 7.3m のトレンチである。周溝検出の有無に調査目的を絞ったため設定範囲は墳丘裾の平坦面部にとどめた。

現地表から 0.25 ～ 0.4m で地山となる。トレンチの北東半（11 号墳側）では地山直上は瓦礫を含む客土であるが、南西半では Th-S 層の堆積が確認できた。地山検出面はほぼ平坦に整えられているが、この検出面の北東半において地山アカホヤ土、ローム土および両層の漸移層が縞状に検出され、旧地形が 11 号墳方向に傾斜していたことが確認された。この地山検出面上に Th-S 層が堆積しているため、同層の堆積以前に整地がおこなわれているということになるが、それが 11 号墳ないし隣接する 9 号墳や 12 号墳築造にともなうものか否かは不明である。

遺構は Th-S 層を掘り込んで構築された浅い溝が確認できたのみであり、11 号墳にともなう周溝は確認されなかった。

11 G　現況墳頂中央から西方向に設定した幅 1.5m、長 10.1m のトレンチである。

墳丘裾の平坦面部では、現地表から 0.4m で地山ローム層が検出され、直上には撹乱土が入る。トレンチ西端、現況の墳端から 3.3m ほどの間を空けて溝状遺構が検出された。検出面での上端幅 1.4m、下端幅 0.5m、深さ 0.4m で、墳丘に平行して軸をとり、底面は硬化している。出土遺物はなく、検出面直上が撹乱土であるため堆積からの古墳との前後関係も確認できないが、11 号墳周溝の可能性はある。

現況墳丘端では 11 Ｅトレンチ同様、石製の境界柵設置にともなう溝状の削平がおこなわれており、また墳丘斜面が削平により垂直に近い立ち上がりとなっている。墳丘斜面では下半が黒ボク土、アカホヤ土、ローム土の地山削り出し、上半では地山ブロック・粒子を含む土による人為的盛土が確認できる点も他のトレンチと同様である。

墳丘部分は現地表から 0.15 ～ 0.3m で墳丘面となる。薄手の土器細片が数点出土したが、いずれ

も図化は出来なかった。

小結　いずれのトレンチにおいても現況の墳丘端は大きく削平を受けており、本来の墳形、規模は不明である。11 Ｃトレンチおよび 11 Ｅトレンチでは墳丘上部は一部本来の形状を保っていると思われ、この部分を参考にすれば段築、葺石を持たない古墳である。11 Ｇトレンチで検出された溝状遺構については、現況墳丘端から外側に約 4m も離れているが、現況の墳丘が大幅に削平を受けていることから周溝の可能性も考えてよい。この溝状遺構を周溝とした場合、墳丘を挟んで反対側の 11 Ｃトレンチにおける墳端位置を本来の形状を保っていると思しき墳丘上部の傾斜から推定すると、11 号墳の復元径は 15.0m、周溝底面からの墳丘高は 1.4m となる。

良好な遺物の出土がなかったため時期は不明であるが、後述する 12 号墳周溝との位置関係から、少なくとも 12 号墳には先行すると考えられる。

(2) 12 号墳

9 号墳の東、11 号墳の南に隣接する現況高 1.3m、径 12m の小円墳である。台地の東際に位置し、墳丘東側は道によって垂直に近く削平されている。調査は墳丘上から北および西方向に入れた 2 本のトレンチ（12 Ａ・12 Ｇ）および 9 号墳墳頂から伸び、11 号墳の南西に位置するトレンチ（9 Ｚ）の 3 本でおこなった。

12 Ａ　墳頂中央から北方向に設定したトレンチである。前節に述べたとおり、11 号墳の南に設定した 11 Ｅトレンチと連結している。

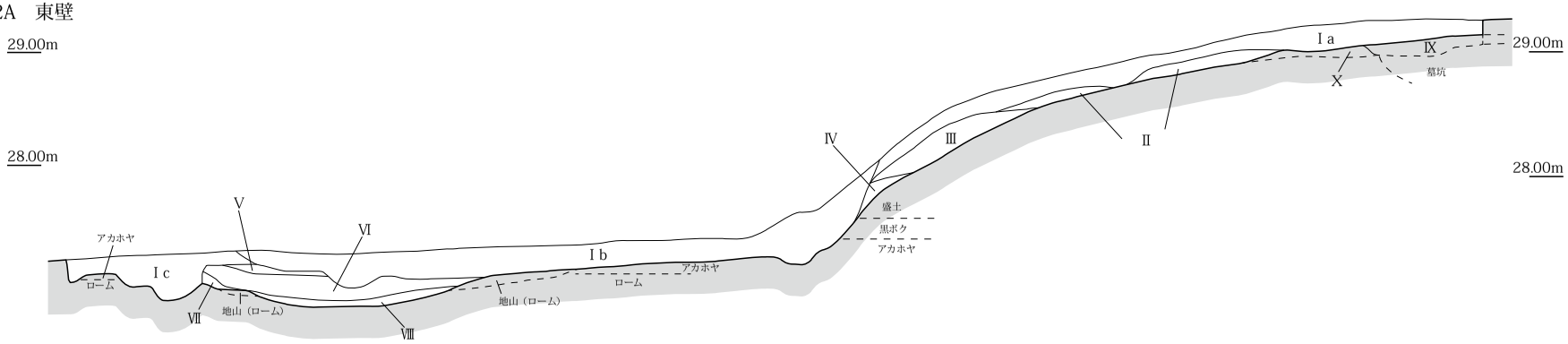
墳丘裾の平坦面部では現地表より 0.2 ～ 0.5m でアカホヤ土およびローム土の地山に達する。現況墳端は 11 号墳同様、石製柵の設置にともない溝状に掘削・削平されているが、これより 4m ほど外側で12号墳にともなうと思われる周溝を確認した。残存は最深で0.16m、底面の幅は0.6mで、墳丘側、外側ともに立ち上がりは緩やかである。周溝部分より頸部片（**第 15 図 4**）を含む土器細片が数点出土している。

墳丘斜面は大きく削平を受けており、本来の形状をとどめていない。周溝底面から 0.8m の高さまでローム土、アカホヤ土の地山削り出しで、その上 0.65m が人為的な盛土である。

墳頂平坦面は現地表から 0.15 ～ 0.2m で墳丘面となるが、盛土がかなり流出していると見られ、緩やかに傾斜し明確な平坦面をなしていない。墳頂中央近くで墓坑の可能性がある堆積を確認している。平面不整形であるが、墳丘盛土とは様相がやや異なっており、墓坑のプランである可能性が考えられる。また墳丘平坦面から斜面にかけて、土器胴部片（**第 15 図 3**）を含む土師器細片が数点出土している。

9 Ｙ－2　現況墳端より 3.9m 南に位置する南北方向のトレンチである。本来、前節に述べた 9 号墳周辺の調査において設定したトレンチであるが、12 号墳の墳端および周溝が検出されている。墳丘部分はトレンチ北端からわずか 0.7m の範囲が検出されただけであるが、ローム土の地山削り出しで、墳端は現況墳端より 4.2m 外側にある。周溝底面は平坦で下端幅 1.9m、外側の立ち上がりは極めて緩やかである。堆積土の残存状況は良好で、周溝上面は Th-S 層に覆われ、周溝内には黒ボク土層が堆積している。この周溝内堆積の黒ボク土より、須恵器壺が出土している（**第 15 図 6**）。破片はある程度まとまった状態で出土しており、接合状態も良好であったことから、周溝内に投げ入れられ

12A　東壁



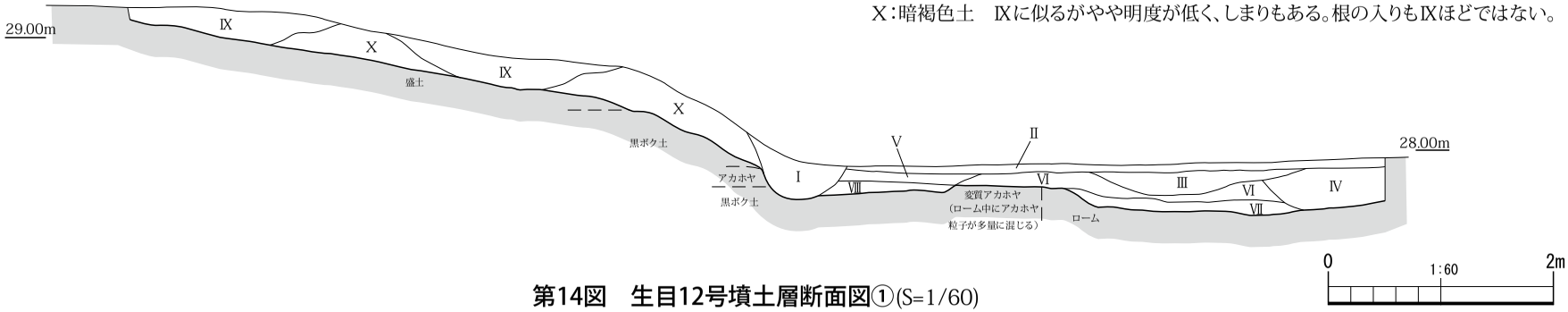
【12A 土層注記】

Ⅰa 表土　しまりなし
Ⅰb 暗褐色　かたくしまる　Th-S 粒　小礫　アカホヤ・ロームブロックを含む。（客土、耕作土）
Ⅰc カクラン
Ⅱ　暗褐色　しまりなし　1mm 程度の橙色粒子を少量含む。
Ⅲ　暗褐色　しまりあり　Ⅱ層よりやや黒味が強い　1mm 程度の橙色粒子を微量に含む。
Ⅳ　黒褐色　〃　1mm 程度の橙色粒子を少量含む。
Ⅴ　黒色　かたくしまる　1～2mm 程度の Th-S 粒を含む。（基本Ⅲ層）
Ⅵ　〃　〃　やや粘性あり、黒ボク層。（基本Ⅳ層）
Ⅶ　暗褐色　〃　1～10mm 程度のアカホヤ粒、ブロックを含む。周溝立ち上がり、崩落による流れ込み。
Ⅷ　明褐色　〃　黒ボクをまだらに含む。黒ボクと地山（ローム）の漸移層。
Ⅸ　黒褐色　ややしまりあり　1mm 程度の橙色粒子を含む。墓坑埋土か。
Ⅹ　褐色　〃　1～2mm 程度の橙色粒子を多く含み、1cm 程度のアカホヤ・ロームブロックを少量含む。（墳丘盛土）

【12G 土層注記】

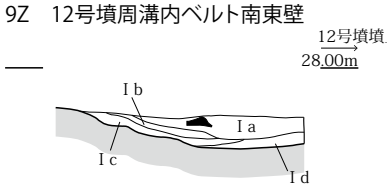
Ⅰ：撹乱　腐葉土。墳端に沿って溝状に巡る。
Ⅱ：表土
Ⅲ：暗褐色土　極めて硬くしまる。Th-S多量に含有。
Ⅳ：土坑か。硬くしまり、アカホヤ、ロームブロックを含有。本トレンチの西壁、東壁でも確認できる。
Ⅴ：黒褐色土　Ⅲ同様、極めて硬くしまる。Th-S微量に含有。撹乱土か
Ⅵ：黒褐色土　硬くしまる。微量にアカホヤ粒子が入るが、含有物はほとんど無し。古墳構築後の自然堆積の黒ボク土。
Ⅶ：暗黄褐色土　硬くしまる。ロームと黒色土が混ざり合った様な印象。周溝埋土。
Ⅷ：暗褐色土　硬くしまる。アカホヤブロック含有。撹乱土か。
Ⅸ：暗褐色土　しまりなく、極めてやわらかい。Ⅹに比してやや明度が高く、草根（ひげ根）が多量に入る。腐葉土に近い。
Ⅹ：暗褐色土　Ⅸに似るがやや明度が低く、しまりもある。根の入りもⅨほどではない。

12G



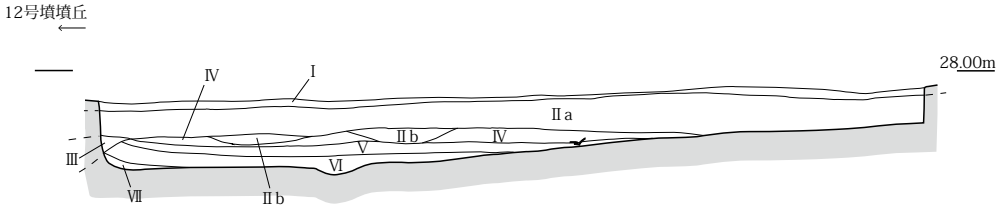
第14図　生目12号墳土層断面図①(S=1/60)

9Z　12号墳周溝内ベルト南東壁

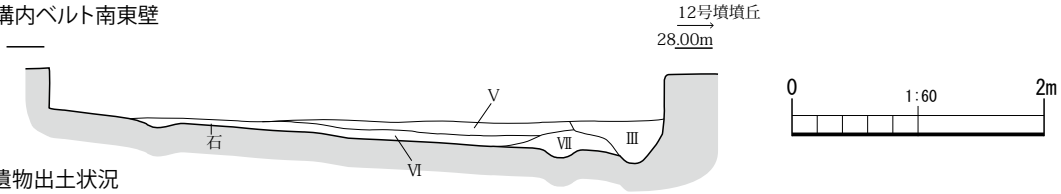


Ⅰa：黒色土　不純物がほとんど入らない。本層内からは砂岩製の角礫が多数出土している。わずかに土器も出土。基本層序Ⅳ層。
Ⅰb：黒色土　Ⅰaに土壌化したアカホヤ火山灰が混入する。全体の10％程度入る。
Ⅰc：黒色土　Ⅰbの状態に加え、アカホヤのブロック大粒が入る。地山アカホヤとの漸移層。全体比が黒ボクとアカホヤが50％：50％である。
Ⅰd：褐色土　Ⅰaと地山ローム層との漸移層。

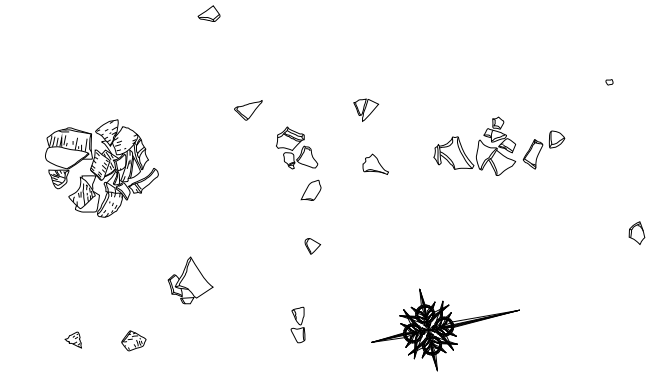
9Y－2　東壁



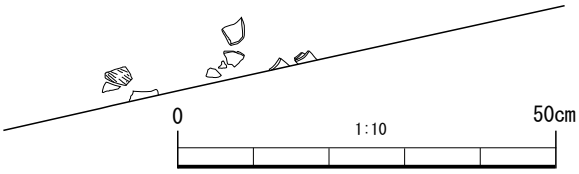
9Y－2　周溝内ベルト南東壁

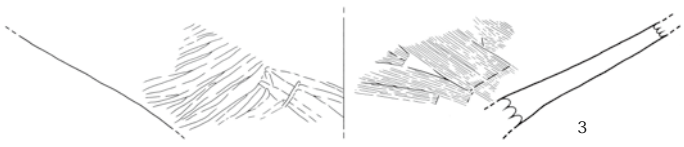


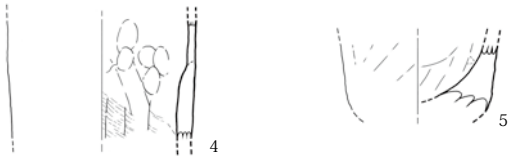
9Y－2　遺物出土状況

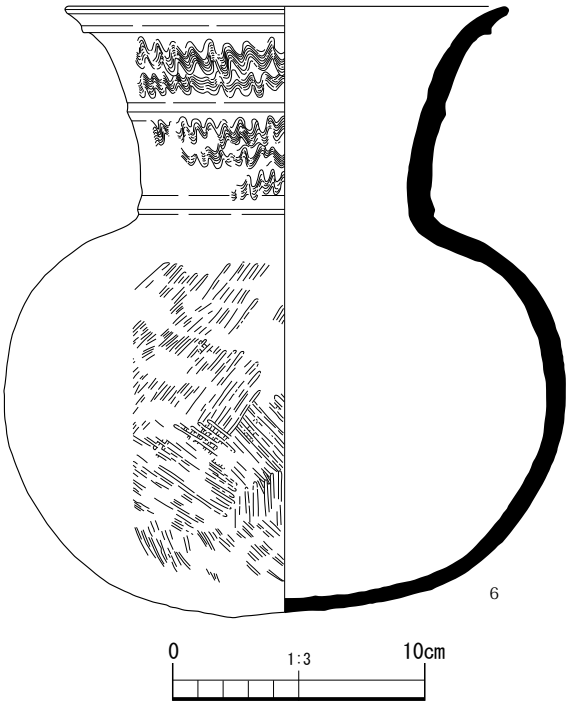


Ⅰ　表土
Ⅱa　暗褐色　しまりあり　Th-S粒、小礫、軽石、橙色ブロックを含む。客土。（耕作土）
Ⅱb　Ⅱaと同じだが、Th-Sの密度が高い。（わだち跡か、畑のうね）
Ⅲ　撹乱　しまりあり
Ⅳ　黒褐色　しまりあり　Th-S粒を多く含む。（Th-S層）（基本層序Ⅲ層）
Ⅴ　黒色　しまりあり　やや粘性あり、黒ボク層。（基本層序Ⅳ層）、遺物（須恵器）片を含む。
Ⅵ　褐色　しまりあり　Ⅴ層と地山との漸移層、黒ボクをまだらに含み、ロームブロックを含む。
Ⅶ　褐色　しまりあり　地山。（ローム層）









第15図　生目12号墳土層断面図②(S=1/60)**、周溝内遺物出土状況平面図**(S=1/20)**、出土遺物実測図**(S=1/3)

たもののように見受けられる。

9 Z　9 号墳の墳頂から 11 号墳の南西にかけて設定したトレンチである（詳細は第 2 節参照）。

トレンチの東端（11 号墳側）で 11 号墳の周溝および墳端を確認した。現地表面より 0.26m で周溝底面となり、墳端は現況墳端より 3.6m ほど外側に位置している。周溝外側の立ち上がりは、比較的緩やかである。また周溝内堆積土最上層からは多数の砂岩礫が検出された。周溝外から流れ込んだもののようであり、赤化したものも含まれる。円礫はなく、何らかの加工剥片のように見受けられる。

12 G　墳頂中央から西方向に設定した幅 1.4m、長 11.3m のトレンチで、墳頂中央では先述の 12 A トレンチと連結させている。

墳丘裾の平坦部では現地表から 0.2 ～ 0.5m でアカホヤ土およびローム土の地山となる。11 号墳同様、現況墳端部は石製柵の設置にともなって大幅に削平されているが、本来の墳端は現況墳端より外側に 2.6m の位置において確認することができた。周溝の残存はわずかに深 15㎝ほどで、周溝外側の立ち上がりは土坑状の堆積によって切られており、周溝の幅等は不明である。またこの土坑状の堆積内から土器細片数点がまとまって出土したが、接合状況は思わしくなく、図化できるものはなかった。なお周溝と現況墳丘との間では、地山直上に Th-S 層が堆積していることから、古墳構築後、比較的早い段階での古墳の一部削平と整地がおこなわれているものと考えられる。

12 A トレンチと同じく墳丘斜面は大きく削平を受けており、本来の形状をとどめていない。周溝底面から 0.9m の高さまでローム土、アカホヤ土の地山削り出しで、その上 0.8m（墳頂中央）が人為的な盛土である。

墳頂平坦面は現地表から 0.1 ～ 0.3m で墳丘面となるが、これも 12 A トレンチと同じく盛土がかなり流出していると見られ、明確な平坦面をなしていない。墳頂中央近くで墓坑かと思しき堆積を確認している。また墳丘面上で土器底部（**第 15 図 5**）を含む細片数点が出土している。

出土遺物（第 15 図）　3 と 5 は墳丘上出土で、3 は大型の壺と思しき土器胴部片である。底部近くと思われ、外面には丁寧なミガキ、内面には目の細かなハケメが入る。5 は土器底部であるが、細片で磨滅が激しく、器種等不明である。4 は北側の周溝出土で復元径 6.8㎝、長頸壺の頸部かと思われる。外面の調整はミガキによると思われるが、磨滅が激しく判然としない。6 は南側の周溝内堆積土中出土の須恵器壺である。胴部は上半に最大径を持ち底部にかけてやや先細り気味となる扁平気味の球形で、胴部と頸部のつなぎ部分はしまりがある。頸部は胴部から直角に近く角度をもって直線的に立ち上がり、中程に一条の突帯が巡る。口縁部先端は先細り気味で、突帯が一条巡る。口縁部形態等、初期須恵器の範疇でとらえられ、TG232 ～ TK73 型式に位置付けられるものと思われる。

小結　現況の墳丘は周囲を大きく削平されてしまっているが、4 ヶ所のトレンチすべてで周溝および墳端を検出できたことから、本来は径 20m の円墳であったことが確認された。周溝底面からの墳丘の高さは、北側の 12 A トレンチで 1.45m、西側の 12 G トレンチで 1.7m であるが、両トレンチとも墳丘面直上が客土であるため確実ではない。墳丘斜面は削平および盛土の流出によって本来の形状を保っていないと思われることから、段築の有無については明確ではない。また葺石については 9 Z トレンチで砂岩礫がまとまって出土したものの、周溝外からの何らかの加工剥片の流れ込みと思われ、他のトレンチでは墳丘面はもちろん、周溝内からも葺石の転石と考えられるものの出土

が 1 点もなかったことから、本来葺石を持たない古墳であったと考えられる。

なお周溝についてはその規模が一定ではなく、南側では底面の下端幅が 1.9m あるのに対し、北側では 0.6m と顕著に狭くなっている。これは北側に隣接する 11 号墳の存在に制約されたためと解釈できることから、12 号墳は 11 号墳に後出すると考えられる。

遺物については周溝内から初期須恵器の壺が出土しており、出土状況から 12 号墳の時期を示すものである可能性が高いと思われる。よって 12 号墳は須恵器 TG232 ～ TK73 型式期に比定される。

第４節　生目 33 号墳の発掘調査成果

33 号墳は現況で、長軸 15m、短軸 6.5m、高さ 1.4m の長方形の墳丘となっているが、昭和 18 年の指定時は円墳として指定されている。墳丘のすぐ東側は切通しの道によって崖面となり、西側は畑として活用されていたことから、円墳が削平を受け現況の状態になったと想定されていた。東側と西側の墳丘周縁は垂直に近い角度となっている。調査は平成 16、21、23、25、26 年度におこなっている。平成 16 年度の調査は、8 号墳の調査の一環としておこなわれたため、調査時はトレンチ名が 8 Ｄとなっているが、本報告書では 33 号墳の調査として取り扱うため、33 Ｈに振り替えている。平成 23 年度の調査によって、33 号墳の北側、南側から 9 号墳に向け直線的に伸びる周溝が検出された。そのため、平成 25、26 年度の調査では、9 号墳を後円部とする前方後円墳の前方部であるという仮定でトレンチを設定、調査をおこなった。また 33 Ｃ～ 33 Ｇトレンチは耕作機械による撹乱がひどく、遺構検出が困難な状況であった。

以下、33 号墳の調査について、トレンチ毎に詳述する。

33 A　現況の墳丘の北側に設定したトレンチである。トレンチ拡張の結果、8 号墳のトレンチである 8 Ⅲと一体となっている。トレンチは墳端部や周溝を面的に調査するため、長軸 9.6m、短軸 9.3m の一部が突出する長方形状のトレンチとした。

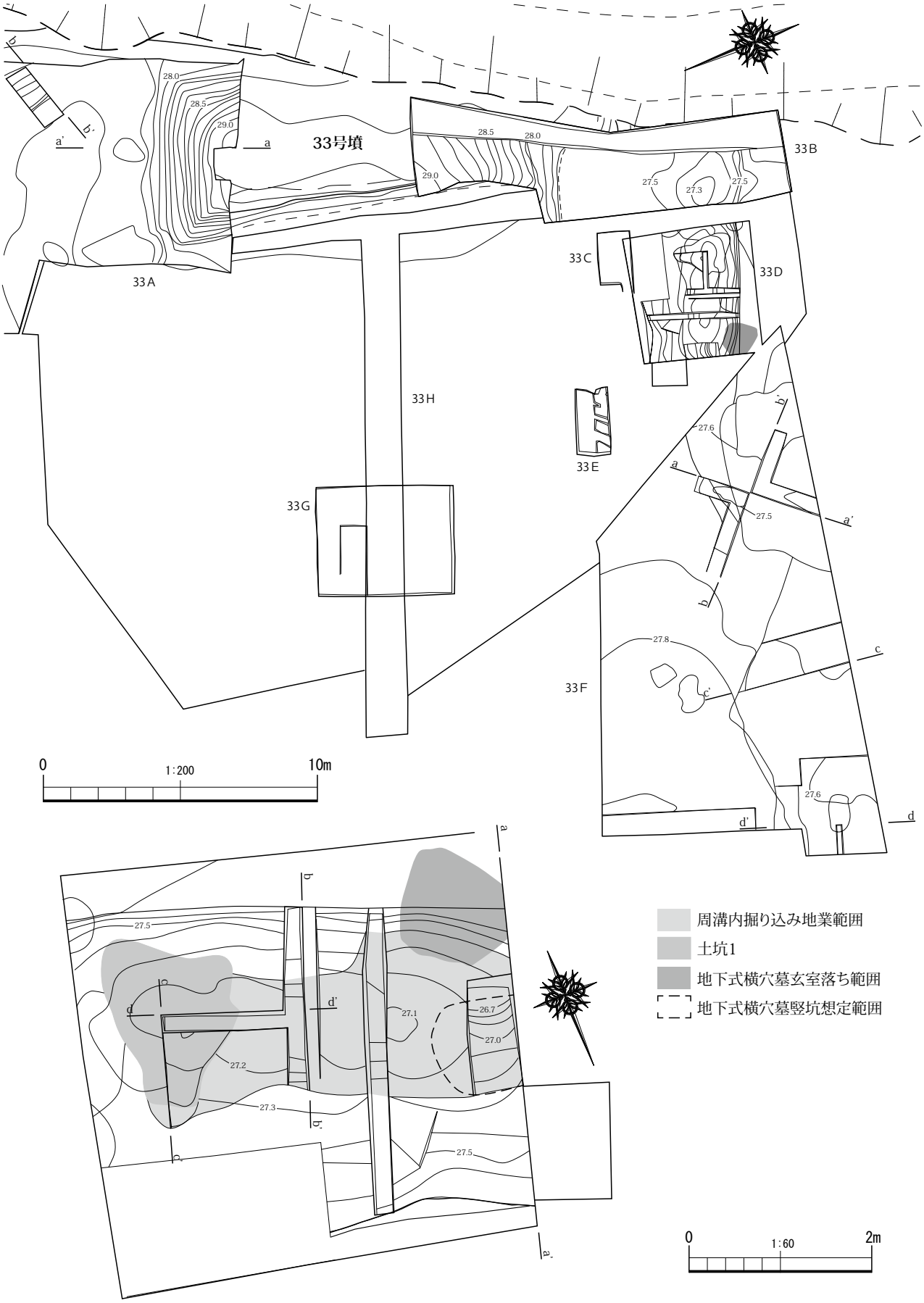
調査の結果、当初、周溝と墳丘端部を確認したと思われたが、報告書を作成する過程で再検討した結果、周溝と墳丘端部ではない可能性が生じた。その詳細については、墳丘南北断面の項と、第Ⅲ章の総括においておこないたい。ここでは調査により得られた情報の記載のみおこなう。墳丘は下部を地山（下層から褐色ローム、アカホヤ、黒ボク土、周溝と思われる落ち込み底から 1.0m）を削り出し、その上部に盛土を 0.5m 施し築造されていることが明らかになった。ただし、現況の墳頂部の直上層が客土であるため、削平を受けている可能性が高く、本来は更に墳丘高が高かったと思われる。周溝と思われた落ち込みは外縁側の肩が削平されているため確実ではないが、横断面は逆台形状を呈し、床面幅は 1.8m を測る。

遺物は墳丘斜面から周溝と思われた落ち込み内を覆う 12 層（黒ボク土）中から弥生土器が一括して出土した（**第 18 図**）。出土状況をみると、土器片が纏まって出土しており、完形に近い状況に復元できる個体も存在する。これら遺物の帰属については、弥生時代の遺構面、包含層である黒色土が墳丘の盛土として使用されているため、その中に混入していたものが、流土とともに周溝内に堆積したと考えることが､最も妥当な見解と思われる。ただし､堆積土が比較的均質な土であることや、遺物の一括性が高いことが疑問点として残る｡また出土した器種が､日常的に使用される甕を含まず、器台や免田系の長頸壺である点にも注意が必要である。

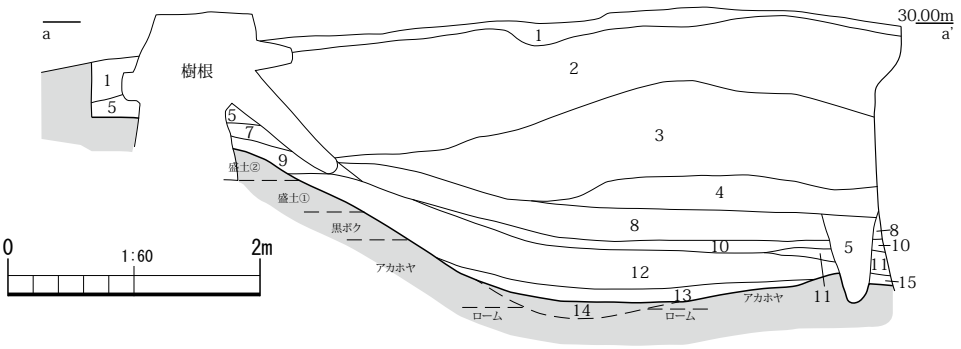
トレンチの北東側では中世の道路状遺構を検出した。断面形は逆台形状で北側壁面は二段掘り、南側は素掘りである。硬化面が 3 面確認され、長期にわたり使用されていたと考えられる。この道路状遺構は、7・8 号墳間を通り、7 号墳南側周溝内で収束する。

33 B　現況の墳丘の南側に設定したトレンチである。トレンチは、墳丘の現況肩部から周溝外縁の立ち上がりを捉える位置に設定した。墳丘の残存状況に合わせて拡張したため、長軸 13.3m、短軸 3.0m の不整形のトレンチである。

調査の結果、9 号墳に向け直線状に伸びる周溝を検出した。検出面はアカホヤ火山灰層である。

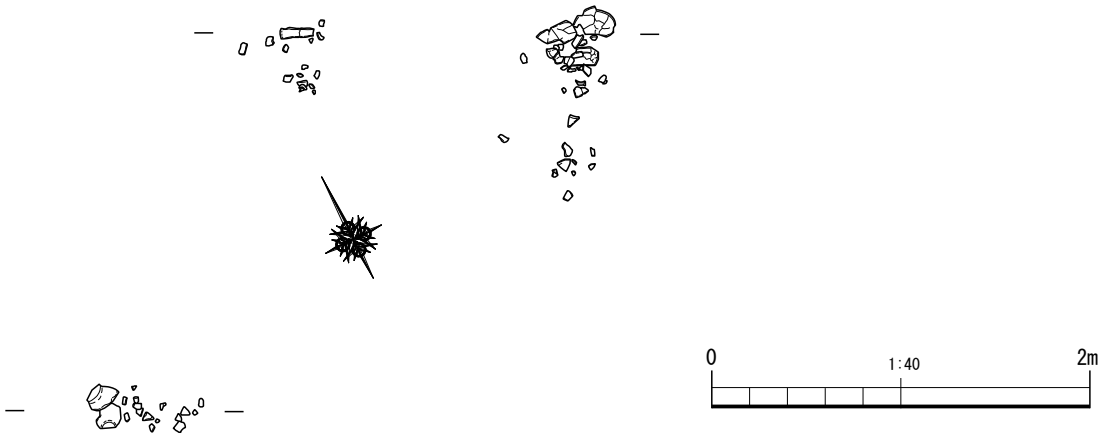


第16図　生目33号墳調査区配置図(S=1/200)、**33Ｄ遺構配置図**(S=1/60)

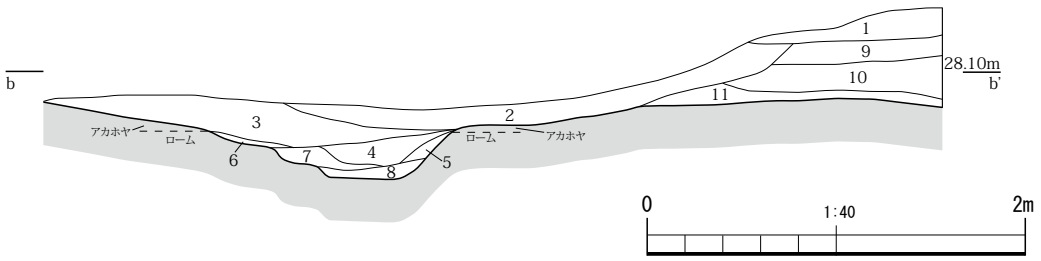


1.表土
2.客土。シラス主体土。微量にロームブロック含む。
3.客土。黒色土。ローム・アカホヤブロックを非常に多く含む。
4.客土。黒色土。ローム・アカホヤブロックを少量含む。
5.撹乱土。10～13層の混合土。
6.黒褐色土。やや締り有。シラス粒子を少量含む。
7.黒褐色土。やや締り有。1～2㎜程度のTh-S・アカホヤ・シラス粒子を含む。
8.暗褐色土。硬く締まる。Th-Sを非常に多く含む。
9.暗褐色土。やや締り有。1㎜程度のアカホヤ粒子とTh-Sを含む。
10.黒色土。締り有。Th-S含む。基本層序Ⅲ層。
11.黒褐色土。締り有。10層、12層よりやや明るい。Th-Sを含む上層は12層に似る。
12.黒色土。締り有。1～2㎜程度のアカホヤ粒子を少量含む。(基本層序Ⅳ層)
13.褐色土。締り有。1～2cm程度のローム・アカホヤブロックを少量含む。黒色土がまだらに入る。12層と地山の漸移層)
14.褐色土。締り有。アカホヤとロームの中間層。(地山)
15.褐色土。締り有。1～5程度のアカホヤ・ロームブロックを多く含む。古墳以前の遺構埋土。
盛土①.黒色土。1～5㎜程度のアカホヤ粒子を少量含む。 盛土②.黒褐色土。1～10㎜程度のアカホヤ粒子を多く含む。

第17図　生目33号墳33Ａ土層断面図(S=1/60)

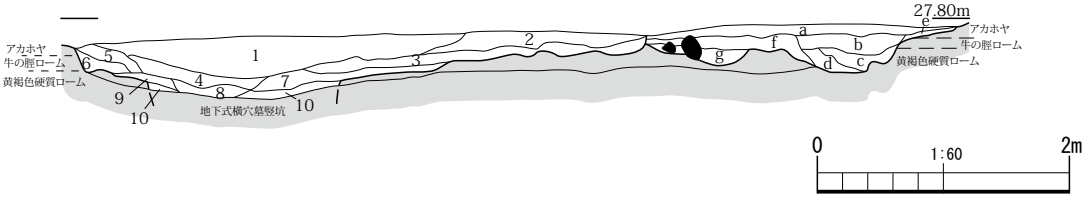


第18図　生目33号墳33Ａ遺物出土状況図(S=1/40)



1.暗褐色土。締り硬い。Th-Sを非常に密に含む。
2.暗褐色土。締り硬い。Th-Sを多量に含む。1～10㎜程度の橙色粒子少量含む。小礫を少量含む。
3.暗褐色土。締り有。Th-Sを多量に含む。1～5㎜程度の橙色粒子を多量に含む。2層よりやや暗い。
4.黒褐色土。締り有。1～3㎜程度のTh-S含む。1㎜以下の橙色粒子含む。
5.暗褐色土。1㎜程度のTh-S、橙色粒子を少量含む。褐色ロームが斑紋状に混ざる。
6.褐色土。非常に硬く締まる。1～3㎜の灰色パミスを非常に密に含む。硬化面。
7.褐色土。非常に硬く締まる。2cm程度のアカホヤブロック、褐色ローム土、黒色土が斑紋状に混ざる。硬化面。
8.褐色土。非常に硬く締まる。褐色ロームが非常に硬く締り含まれる。アカホヤブロック含む。硬化面。
9.黒色土。締り有。1～3㎜程度のTh-Sを含む。他のTh-S含有層より黒味が強い。基本層序Ⅳ層。
10.黒色土。締り有。Th-Sを含まない。1㎜程度の橙色粒子を微量に含む。33号墳周溝埋土。基本層序Ⅳ層。
11.褐色土。締り有。アカホヤ粒子とブロック、黒ボク土が斑紋状に混ざる。10層と地山アカホヤとの漸移層。

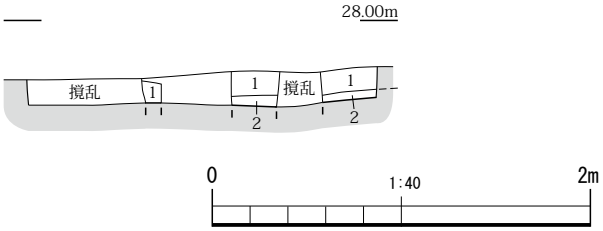
第19図　生目33号墳33Ａ、中世溝土層断面図(S=1/40)



1.10YR1.7/1黒色土。締りやや弱い。粘性弱い。シルト。周溝埋土。基本層序Ⅳ層。
2.10YR2/2黒褐色土。締りやや弱い。粘性弱い。シルト。1層より色調が赤みがかる。周溝埋土。
3.10YR3/4暗褐色土。締り弱い。粘性弱い。砂混シルト。褐色ロームブロック含む。周溝埋土。
4.10YR3/3暗褐色土。締り弱い。粘性弱い。砂混シルト。微細なアカホヤ粒子微量に含む。周溝埋土。
5.10YR2/3黒褐色土。締り弱い。粘性弱い。砂混シルト。微細なアカホヤ粒子少量含む。
6.10YR3/4暗褐色土。締りやや強い。粘性弱い。砂質土。5㎜以下のアカホヤブロック・牛の脛ロームブロック少量含む。周溝肩崩落土。
7.10YR4/4褐色土。締りやや弱い。粘性弱い。砂混シルト。アカホヤ粒子・牛の脛ロームブロック・褐色ローム少量含む。周溝埋土。
8.10YR3/2黒褐色土。締りやや弱い。粘性弱い。砂混シルト。1cm程度のアカホヤブロック少量含む。地下式横穴墓竪坑上置き土。
9.7.5YR3/3暗褐色土。締りやや弱い。粘性弱い。砂質土。
　3cm未満のアカホヤ粒子・牛の脛ロームブロック中量含む。地下式横穴墓竪坑上置き土。
10.10YR4/3にぶい黄褐色。締り強い。粘性やや弱い。シルト。
　褐色ロームに5㎜程度のアカホヤ・牛の脛ローム・小林降下軽石混ロームブロック混ざる。地下式横穴墓竪坑埋土。

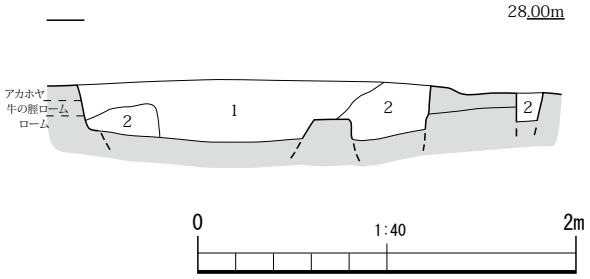
a.10YR2/2黒褐色土。締り弱い。粘性弱い。シルト。微量にアカホヤ粒子含む。別遺構埋土。
b.7.5YR2/2黒褐色土。締りやや弱い。粘性弱い。シルト。5㎜以下のアカホヤブロック少量含む。別遺構埋土。
c.7.5YR3/3黒褐色土。締りやや弱い。粘性弱い。砂混シルト。5㎜以下のアカホヤブロック含む。別遺構埋土
d.10YR3/3暗褐色土。締りやや強い。粘性弱い。砂混シルト。5㎜以下の黄褐色硬質ロームブロック含む。別遺構埋土。
e.7.5YR3/4暗褐色土。締り弱い。粘性弱い。砂混シルト。地山アカホヤ流入土層。別遺構埋土。
f.7.5YR3/2黒褐色土。締りやや有。粘性弱い。砂混シルト。アカホヤ粒子少量含む。別遺構埋土。
g.10YR3/4暗褐色土。締りやや弱い。粘性弱い。砂混シルト。5cmアカホヤ・黄褐色硬質ロームブロック少量、アカホヤ粒子中量含む。

第20図　生目33号墳33Ｂ西壁周溝部分土層断面図(S=1/60)



1.10YR2/2黒褐色土。締り弱い。粘性弱い。シルト。微量にアカホヤ粒子含む。
2.10YR2/2黒褐色土。締り弱い。粘性弱い。砂混シルト。地山土（アカホヤと牛の脛ロームの漸移層）と1層の混合土。

第21図　生目33号墳33Ｃ北壁不明遺構1土層断面図(S=1/40)



1.10YR2/1黒色土。締り強い。粘性弱い。2㎜程度のアカホヤ粒子含む。撹乱土。
2.10YR1.7/1黒色土。締り強い。粘性やや有。アカホヤ・牛の脛ローム・褐色ロームブロックを多量に含む。撹乱土。

第22図　生目33号墳33Ｅ南壁土層断面図(S=1/40)

当初は幅が 7m に達する幅広の周溝と思われたが、平成 25 年度調査での平面検出及び断面の再検討により、古墳築造以前の不明遺構 1 が切り合っているため、幅広の周溝と誤認していたことが明らかになった。周溝幅は 4.56m、検出面からの深さは 0.5m を測り、横断面形は浅いU字形を呈す。周溝外縁側の立ち上がり角度は 60°と急角度で立ち上がる。墳丘側の立ち上がりは、墳丘が消失している関係もあり判然としない。周溝の最深部は小林降下軽石混ローム層に達している。この土層断面図を作図した地点では、通常この層の上層に位置する褐色ローム層が欠落している。周溝床面から地下式横穴墓の竪坑と思われる土層の乱れを検出したが、平面検出に止めた。竪坑の埋土はローム中に、アカホヤ・牛の脛ローム・小林降下軽石混ロームの小ブロックが混ざる。

33 号墳の周溝に切られる不明遺構 1 は平面形が方形基調であるが、床面が不安定なため竪穴住居とは考え難い。遺物は弥生土器片と思われる出土しているが図化に耐え得るものではなかった。33 号墳に先行する遺構であり、黒ボク土を主体とする埋土であることも加えると、弥生時代の遺構と想定されるが性格は不明である。

33 C　33 Bトレンチでも確認した周溝に切られる不明遺構 1 に設定したトレンチである。調査以前はこの不明遺構 1 と、西側にある撹乱に切られた地山（アカホヤ）部分が、3 号墳や 22 号墳で検出されている、前方部側面の張り出し部に類似していたためトレンチを設定した。調査の結果、周溝ではなく別の遺構であったことは 33 Bトレンチの項目で記載済みである。33 Cトレンチ内では、検出面からの深さ 0.16m で地山との漸移層に達する。

33 D　南側周溝に直交する形で設定した長軸 4.8m、短軸 4.6m のトレンチである。耕作機械による撹乱が激しく、間を縫うように周溝の一部を掘り下げた。

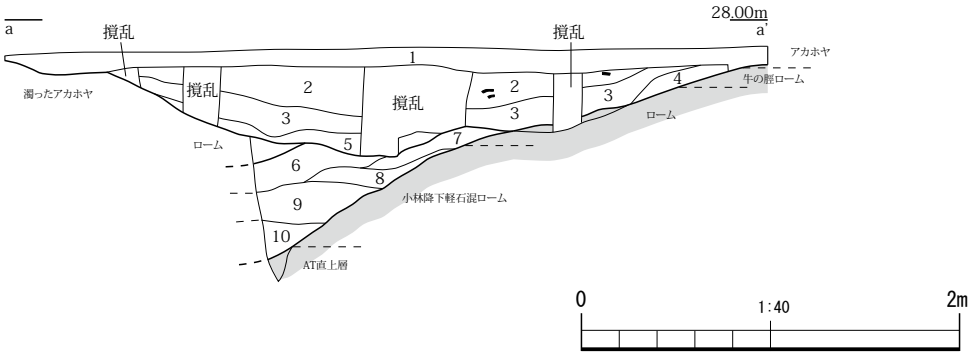
調査の結果、周溝幅は 3.56m、検出面からの深さは 0.58m を測る。周溝の断面形状は浅いU字形を呈し、土層の堆積状況はレンズ状の自然堆積である。当初トレンチ内で 2 基の地下式横穴墓と思われる土層の乱れを検出したが、サブトレンチ調査により、1 基は古墳構築後の土坑と判明した。残る 1 基は、サブトレンチ調査、周辺の平面検出により地下式横穴墓と認定した。この地下式横穴墓周囲の周溝床面は、地下式横穴墓構築のための掘り込みが施されており、その中には地下式横穴墓の竪坑と同質の、アカホヤブロック、牛の脛ロームブロックを含む土が堆積していた。

遺物は自然堆積の黒色土層である 2 層から弥生土器が纏まって出土した。本トレンチ内の周溝立ち上がり位置の墳丘は消失しているが、33 Aトレンチの状況から、墳丘盛土に弥生時代の遺構面・遺物包含層となる黒色土を用いていた可能性は高く、その層が流出し、周溝内に流土とともに堆積したと想定される。出土遺物は大隅産と思われる大型の壺と免田式土器の長頸壺などが出土している。

33 E　33 Cトレンチと合わせて、前方側面の張り出し部確認のために設定したトレンチである。調査の結果、本トレンチを設定した掘り込みは、現代の撹乱であることが明らかになった。

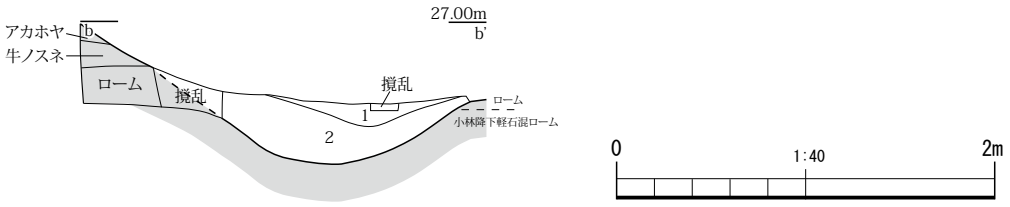
33 F　33 号墳が前方後円墳の前方部であると仮定し、前方部隅角を検出するために設定したトレンチである。耕作機械による撹乱が著しく、面的に検出する必要があったため長辺 20m、短辺 10m の台形状のトレンチとした。

調査の結果、33 号墳の周溝は本トレンチ内で収束することが明らかになった。周溝は本トレンチの東側に位置する 33 Dトレンチから徐々に浅くなり収束する。ただし収束地点付近を不明遺構 2 が



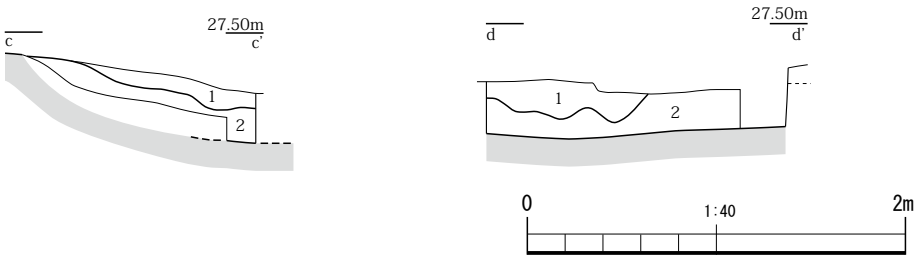
1.旧調査時埋戻し土
2.10YR2/1黒色土。締り有。粘性やや有。シルト。弥生後期土器出土層。
3.10YR3/3暗褐色土。締り有。粘性やや有。シルト。上位を中心に5層に黒色土が少量混ざる。
4.10YR4/4褐色土。締りやや有。粘性弱い。砂質土。アカホヤ～牛の脛ロームの漸移層が崩落土。
5.10YR4/6褐色土。締り有。粘性弱い。砂混シルト。
6.10YR4/6褐色土。締り有。粘性やや有。砂混シルト。
　径2～10cmのアカホヤ・牛の脛ローム・褐灰ロームブロック多量に含む。地下式横穴墓竪坑埋土。
7.10YR4/6褐色土。締りやや有。粘性やや有。シルト。
　径1～2cm程度のアカホヤブロック少量、褐灰ロームブロック中量含む。地下式横穴墓竪坑埋土。
8.10YR4/6褐色土。締りやや有。粘性やや有。シルト。ローム土主体でブロックをあまり含まない。
9.10YR4/6褐色土。締り有。粘性やや有。シルト。小林降下軽石混ローム主体土。
　色調が地山よりやや暗く、淡黄褐色土ブロックを多量に含む。地下式横穴墓竪坑埋土。
10.10YR4/4褐色土。締り有。粘性有。シルト。小林降下軽石混ローム主体土。9層より淡黄褐色土ブロック少ない。地下式横穴墓竪坑埋土。

第23図　生目33号墳33Ｄ周溝および地下式横穴墓竪坑土層断面図(S=1/40)



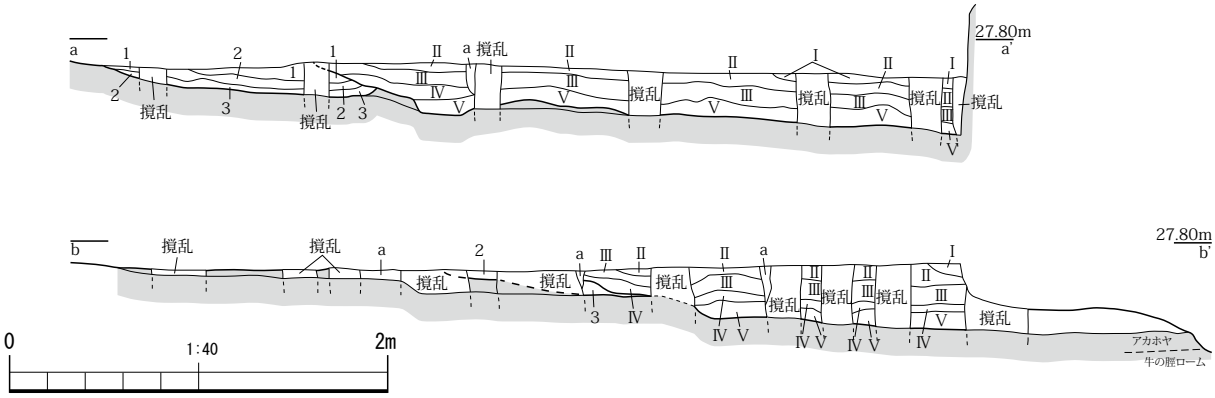
1.10YR4/4褐色土。締り有。粘性弱い。シルト。微量に径2cm程度のアカホヤ・牛の脛ロームブロック含む。
2.10YR5/6黄褐色土。締り有。粘性やや有。シルト。褐色ロームを主体とする土に径2cm程度のアカホヤブロック、
　径2～5cm程度の牛の脛ロームブロックを比較的均質に含む。

第24図　生目33号墳33Ｄ地下式横穴墓掘り込み地業土層断面図(S=1/40)



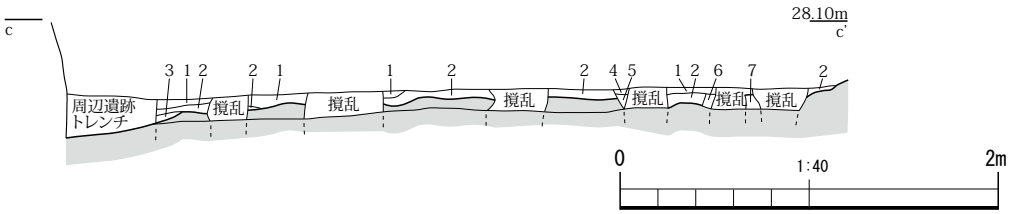
1.10YR2/1黒色土。締りやや有。粘性やや有。シルト。黒色土を主体とする土に径5cm程度のアカホヤブロック含む。
2.10YR5/6黄褐色土。締り有。粘性やや有。シルト。褐色ロームを主体とする土に径2cm程度のアカホヤブロック、
　径2～5cm程度の牛の脛ロームブロックを比較的均質に含む。

第25図　生目33号墳33Ｄ土坑1土層断面図(S=1/40)



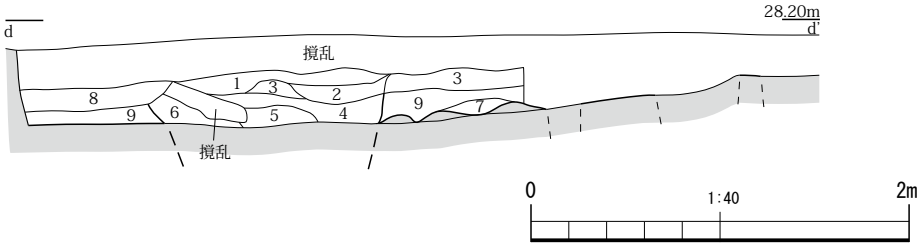
1.7.5YR3/5暗褐色土。締りやや有。粘性弱い。砂混シルト。アカホヤ小ブロック・アカホヤ粒子含む。周溝埋土。
2.10YR4/6褐色土。締りやや弱い。粘性弱い。砂混シルト。アカホヤ小ブロック含む。周溝埋土。
3.10YR4/6褐色土。締りやや弱い。粘性弱い。砂混シルト。アカホヤブロック多量に含む。周溝埋土。
Ⅰ.10YR2/2黒褐色土。締りやや有。粘性弱い。シルト。Th-S多量に含む。
Ⅱ.10YR2/2黒褐色土。締りやや有。粘性やや弱い。シルト。Th-S微量に含む。
Ⅲ.10YR2/3黒褐色土。締りやや有。粘性やや弱い。シルト。Th-S含まない。アカホヤ粒子微量に含む。基本層序Ⅳ層。
Ⅳ.10YR3/4暗褐色土。締りやや弱い。粘性弱い。砂混シルト。アカホヤ小ブロック・アカホヤ粒子含む。
Ⅴ.10YR4/6褐色土。締りやや弱い。粘性弱い。砂混シルト。アカホヤブロック少量含む。Ⅳ層と地山アカホヤ層の漸移層。
ａ.10YR2/2黒褐色土。締りやや弱い。粘性やや弱い。シルト。トレンチャーによる上層の引き込み。撹乱土。
※Ⅰ～Ⅴは不明遺構2埋土。

第26図　生目33号墳33Ｆ周溝収束位置サブトレンチ土層断面図(S=1/40)



1.10YR2/3黒褐色土。締り有。粘性弱い。砂混シルト。Th-S多量に含む。
2.10YR4/4褐色土。締りやや有。粘性弱い。砂混シルト。アカホヤ小ブロック含む。
3.10YR2/2黒褐色土。締り有。粘性やや弱い。砂混シルト。アカホヤ粒子含む。
4.10YR2/2黒褐色。締り有。粘性やや弱い。砂混シルト。アカホヤ粒子含む。トレンチャーによる撹乱土。
5.10YR2/3黒褐色土。締りやや有。粘性弱い。砂混シルト。アカホヤ小ブロック含む。トレンチャーによる撹乱土。
6.10YR6/6明黄褐色土。締り有。粘性弱い。砂混シルト。牛の脛ローム主体撹乱土。
7.10YR3/4暗褐色土。締りやや有。粘性弱い。砂混シルト。アカホヤブロック多量に含む。二次堆積アカホヤ火山灰層。

第27図　生目33号墳33Ｆ落ち込みサブトレンチ土層断面図(S=1/40)



1.10YR2/1黒色土。締り有。粘性やや有。シルト。Th-S多量に含む。
2.10YR3/2黒褐色土。締り有。粘性やや弱い。シルト。
3.10YR3/2暗褐色土。締り有。粘性やや弱い。シルト。Th-S・褐色土少量含む。
4.10YR3/4暗褐色土。締りやや強い。粘性やや弱い。シルト。褐色土粒子中量含む。土坑埋土。
5.10YR4/4褐色土。締りやや弱い。粘性やや弱い。シルト。明黄褐色硬質ロームブロック少量含む。土坑埋土。
6.10YR4/6褐色土。締りやや弱い。粘性やや弱い。シルト。明黄褐色硬質ロームブロック少量含む。土坑埋土。
7.10YR4/3にぶい黄褐色土。締り有。粘性弱い。砂混シルト。明黄褐色ロームブロック少量含む。
8.10YR2/1黒色土。締り有。粘性やや有。シルト。Th-S多量に含む。褐色土含む。
9.10YR4/6褐色土。締りやや弱い。粘性やや弱い。シルト。明黄褐色ロームブロック多量に含む。

第28図　生目33号墳33Ｆ土坑2土層断面図(S=1/40)

切っていることと、耕作機械による撹乱が著しいことから、サブトレンチによる調査をおこなったが明瞭ではない。

不明遺構 2 はトレンチ内での平面形は不整形で、断面形状は皿状を呈し、壁面の立ち上がりは緩やかである。検出面からの深さは 0.36m を測る。埋土は黒ボク土主体であり、上層には Th－S を含む。床面は比較的平坦であるが、立ち上がりが緩やかである点や、遺物が出土しなかったことから竪穴住居ではないと考えられる。

トレンチの南西側は黒ボク土が壁際に堆積する状況であったため、サブトレンチを設定し調査をおこなった。耕作機械により分断されているため判然としないが、地山が南側に向かって緩やかに下降傾斜している状況が確認できた。トレンチの南側は谷地形となっているため、堆積状況も加味し、谷へと向かう自然の落ち込みと判断された。落ち込みからは土器片が出土しているが、細片のため時期は不明である。

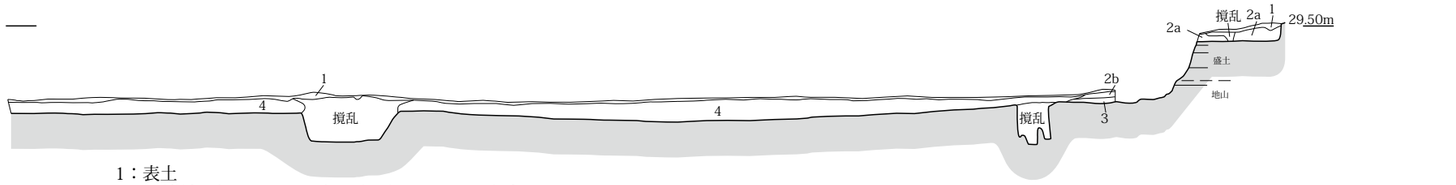
トレンチの南西端では土坑 1 が検出された。落ち込み堆積土上から掘り込んでいる。平面検出のみで掘削はおこなっていない。平面形は楕円形を呈し、長軸 1.3m、短軸 0.7m を測る。

33 G　前方部前面の周溝痕跡と思われた黒色土を含む位置に設定した、長軸 5m、短軸 4m のトレンチである。黒色土には短軸方向にサブトレンチを設定し掘下げをおこなったが、この黒色土は、耕作機械による撹乱土であることが明らかになった。

33 H　33 号墳の墳丘西側にＴ字形に設定したトレンチである。北は 33 A、南は 33 B と接合する。東西方向は幅 1.5m、長さが 19m で 33 G と接合する。

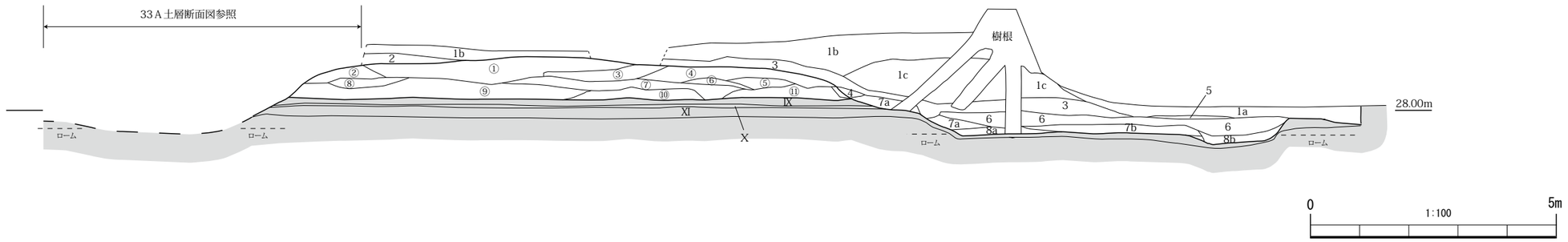
調査の結果、西側で周溝と思われる落ち込みを検出していたが、後の 33 G の調査によって撹乱であることが明らかになっている。

53 号地下式横穴墓　33 D で検出された。周溝底面に竪坑を設け、周溝外縁側に玄室を有する。竪坑は横に長い楕円形を呈すると思われるが、全面検出をおこなっていないため平面規模は不明である。玄室内の環境変化に配慮し、玄室とは逆側にのみサブトレンチを設定することが調査の条件であったため、それに従いサブトレンチを設定した。周溝底面からの深さは 0.6m を測り、壁面はスロープ状を呈す。サブトレンチ内では平坦な床面は検出されていない。サブトレンチ底面の地山は AT 直上の砂質土である。竪坑の埋土は褐色ローム主体の埋土であり、上層ではアカホヤ・牛の脛ローム、下層では小林軽石混ローム・AT 直上層のブロックが混ざる状況である。ただし、上層ではその状況が顕著であるが、下層は地山に近い埋土となり、判別が難しくなる。このような地山土に類似した竪坑埋土は、下北方花切第 2 遺跡の下北方 24 号地下式横穴墓でも確認されている（平成 26 年度報告書刊行）。竪坑埋土内に黒ボク土のブロックが含まれないのは、地下式横穴墓構築に先立ち、周溝内に掘り込みを施したためと思われる。掘り込みの範囲は長軸 4.0m 以上、短軸 1.2m、深さは 0.36m である。掘り込み内の埋土も地下式横穴墓竪坑の埋土と類似するが、ブロックの混入が低密度である。この掘り込みがおこなわれているため、53 号地下式横穴墓が、周溝掘削と同時期に構築されたものか、時期を経て構築されたものなのか明らかではない。周溝外縁立ち上がりから肩部にかけて、玄室が陥没した痕跡と思われる土層の乱れを検出した。周囲の地山はアカホヤであるが、陥没痕跡部分はアカホヤが変成し、淡褐色を呈する。また周溝立ち上がり壁面においては、周囲で確認される牛の脛ローム層が欠落している。この陥没痕跡の範囲は楕円形を呈し、1.4m × 1.1m ＋ α である。



1：表土
2a：黒褐色（Hue10YR3/1）しまりなし。スコリアを含む。
2b：黒褐色（Hue10YR3/1）Ⅱa 層より硬くしまる。
3：黒色（Hue10YR2/1）しまりあり。0.5 ㎝程度の黄色ブロックを含む。
4：褐色（Hue10YR4/4）しまりあり。1 ～ 5 ㎝程度の黄色のブロックを多く含む。20×30cm 程度の大きなブロックも含む。

第29図　生目33号墳33G土層断面図(S=1/100)



1a：表土＋耕作土　アカホヤ・黒ボク・スコリア・ゴミをまだらに含む。（耕作土）
1b：表土＋客土　シラス主体若干のロームブロックを含む。
1c：客土　黒色土　ローム・アカホヤブロックを多く含む。

2：黒褐　ややしまりあり　シラス粒子を少量含む。
3：暗褐　かたくしまる　スコリア粒子を非常に多く含む。小礫・軽石なども少量含む。
4：褐　しまりなし　アカホヤ粒子を微量に含む。⑪より暗くアカホヤブロックもない。盛土ではなく後の流出土と考える。
5：黒　しまりあり　スコリア粒子を多く含む。（基本層序Ⅲ層）
6：黒　しまりあり　1 ～ 2mm 程度のアカホヤ粒子を少量含む。黒ボク層。（基本層序Ⅳ層）
7a：暗褐　しまりあり　Ⅵ層と地山の漸移層。Ⅵ層より明るく含むアカホヤ粒子が多い。
7b：黒褐　しまりあり　Ⅵ層と地山の漸移層。Ⅵ層よりやや明るくローム土がまだらに入る。
8a：褐　しまりあり　1 ～ 3cm 程度のアカホヤ・ロームブロックを多く含む。
8b：黒褐　しまりあり　黒ボク・ローム土が混ざりあう層中に 1cm 程度のアカホヤブロックを含む。

①：黒　しまりあり　1 ～ 3mm 程度のアカホヤ粒子を多く含む。
②：黒褐　しまりあり　1 ～ 3cm 程度のアカホヤブロックを含む。
③：黒褐　しまりあり　1 ～ 2mm 程度のアカホヤ粒子を少量含む。1 ～ 4cm 程度のアカホヤブロックを少量含む。
④：黒褐　しまりあり　1mm 程度のアカホヤ粒子を少量含み、ローム土がまだらに入る。
⑤：黒褐　しまりあり　黒味が強く、やや粘性がある。ローム土がまだらに入る。
⑥：褐　しまりあり　アカホヤ土主体で黒色土がまだらに入る。
⑦：黒　しまりあり　1 ～ 2mm 程度の橙色・褐色粒子を含む。
⑧：赤褐　かたくしまる　5cm 程度のアカホヤブロックを多く含み、黒色土がまだらに入る。
⑨：黒　しまりあり　3 ～ 15cm 程度のアカホヤブロックを含み、1 ～ 10cm 程度のロームブロックを少量含む。
⑩：赤褐　かたくしまる　アカホヤブロックが密集して形成する層。
⑪：赤褐　かたくしまる　アカホヤブロックが密集して形成する層。

Ⅸ：黒　かたくしまる　黒味が強く形成する粒子が細かい、やや粘性あり、地山黒ボク層。（基本層序Ⅴ層）
Ⅹ：暗褐　かたくしまる　地山黒ボクとアカホヤ層との中間層。（ローム質）
Ⅺ：赤褐　かたくしまる　地山アカホヤ層。（基本層序Ⅵ層）

第30図　生目33号墳墳丘南北土層断面図(S=1/100)

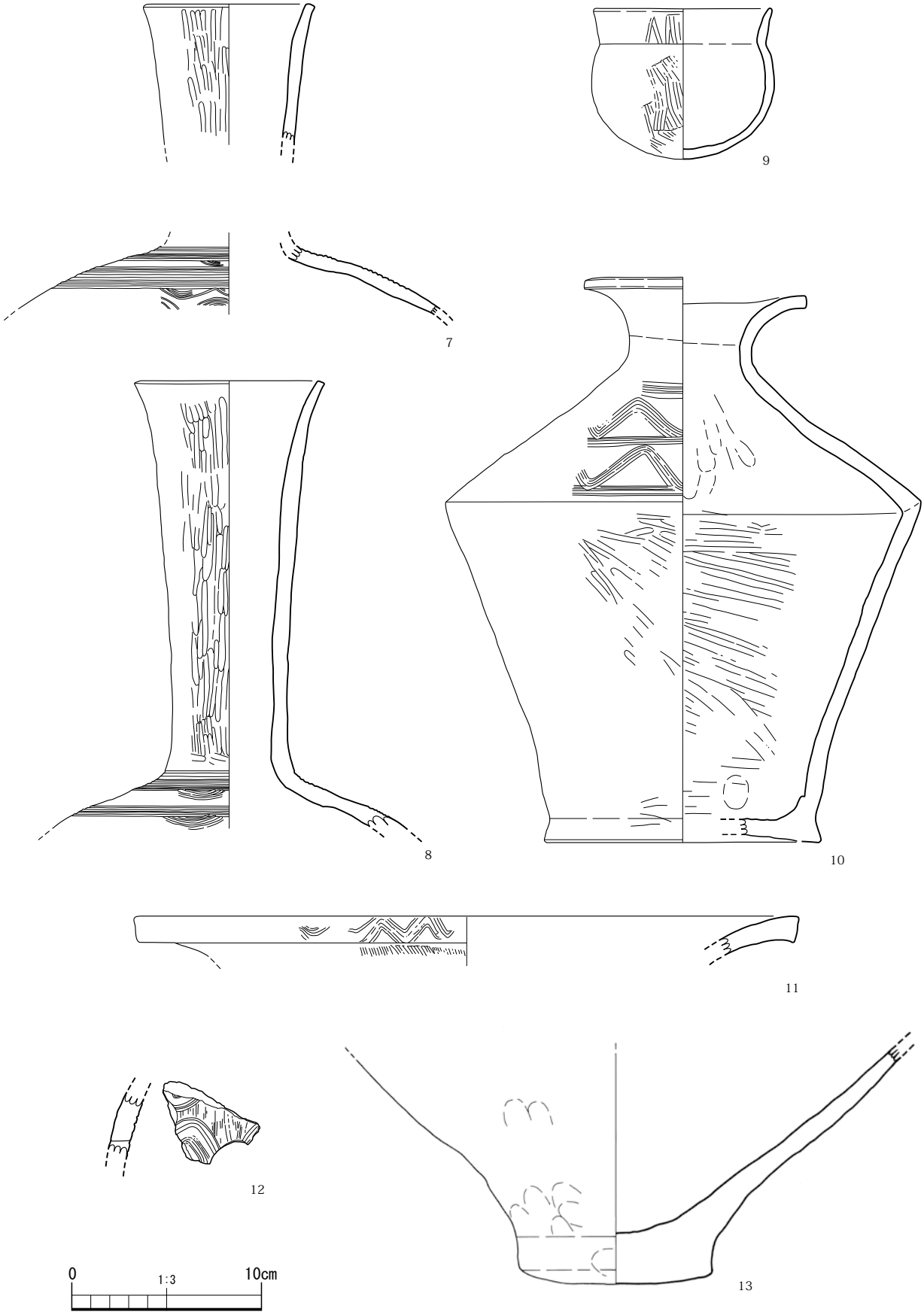
竪坑端から玄室陥没痕跡の端までは 2.6m を測る。竪坑内や周辺から遺物は出土していない。

以上、詳述をおこなってきたが、53 号地下式横穴墓は、竪坑の埋土が通常、生目古墳群で確認される地下式横穴墓の竪坑埋土とは異なり地山ブロックの含有が顕著ではない。羨門の検出が叶わなかったため、地下式横穴墓と断定するには一抹の不安が残る。

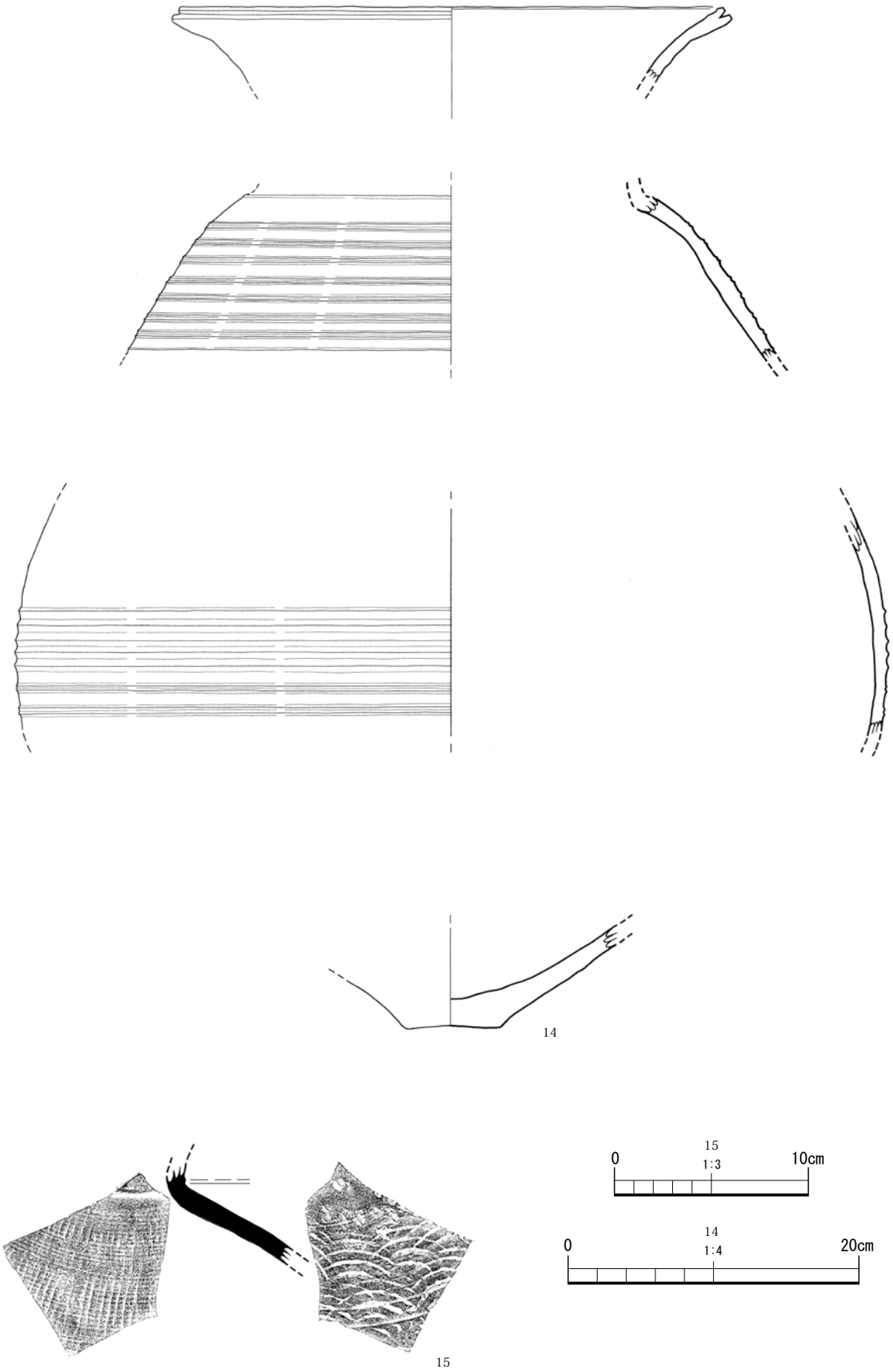
墳丘南北断面　33 号墳は、前述のとおり後世の削平によって墳丘断面が露出しており、特に西側断面は壁面が垂直に近い形状となっていたため断面図を作成した。ここから墳丘の構築方法を検討すると、まず周溝を掘削すると共に地山を削り出し墳丘下部としている。地山削り出し部分は場所によって差異があるが、概ね 0.8m 程度である。この際、地山削り出し部の最上層は黒ボク土層であり、上面はほぼフラットに仕上げられている。しかし、盛土の状況は、南側と北側で大きく異なっている。南側は、細かな土手状盛土（土層断面図⑩、⑪）を構築し、墳丘中央部に水平積みの⑨層を盛土する。次に、⑩、⑪層と⑨層の一部を覆うように③～⑦層を積み上げ、大きな土手状の盛土としている。その後、墳丘の中央付近に再び水平積みで①層を盛土する。対して北側は、下層には細かな土手状盛土がなく、盛土最下層は、水平積みと見られる⑨層が斜めに切れ直接墳丘面となっている。その上層はレンズ状堆積の⑧層があり、⑨層と⑧層を覆うように小さな土手状盛土である②層が構築される。この②層と南側の③層との間に、水平積みである①層が盛土されている。②、③層と①層の関係性をみると、本来は北側にも土手状盛土を施し、⑨層を盛土していた可能性が高く、北側墳丘斜面は本来の形状を保っておらず、削平を受けていると思われる。この場合、33 A の土層堆積状況や、断面、平面で検出されている周溝との齟齬が生じることになる。これらの点に関しては、第Ⅲ章の総括で記述したい。墳丘端部付近に土手状盛土を施し、その内部に水平積みを施す墳丘構築方法は、青木敬氏の「西日本的工法」にあたるものである（青木 2003）。

出土遺物（第 31･32 図）　遺物は 33 A、33 D から主体的に出土している。7、8 は免田式土器である。7 は口縁部から肩部片で、外面に丹塗りを施しており、肩部には線刻による上下方向の重弧文が施される。頸部の一部を欠損しているため、頸部長は不明である。8 も口縁部から肩部片である。頸部外面には縦方向のミガキを施し、肩部には線刻による下方向の重弧文を施す。9 は小型直口壺である。10 は特異な器形であり長胴壺とした。文様構成や算盤玉状に胴部中位が張り出す器形から免田式土器の影響下にあると思われるが、胴下部は緩やかに窄まりながら長く伸び、幅広の平底を呈す。11 は器台の口縁部と思われる。口縁部は面を有し、そこに波状文が施される。12 は器台の胴部片である。残存部では弧を描く線刻が施され、円孔と思われる透かし孔を有する。13 は壺底部である。14 は大隅産の大型の壺で胴部が大きく張り、胴部、肩部に貼付突帯を有する。口縁端部には深い沈線が施されている。15 は客土中から出土した須恵器甕である。9 の直口壺、15 の須恵器以外は、弥生時代後期段階に位置付けられる。また、出土状況も一括性が高いが、33 号墳に伴う遺物ではなく、墳丘盛土内の所産と考えるのが妥当と思われる。

小結　33 D で確認された 9 号墳に向け直線状に伸びる周溝から、33 号墳は 9 号墳を後円部とする前方後円墳の前方部である蓋然性が高まった。その時期は、遺物が出土しているものの、積極的に 33 号墳に伴う遺物と評価できるものはなく、遺物からの時期比定は困難である。9 号墳、33 号墳の位置付けは墳丘の復元も含め、第Ⅲ章の総括において詳細な記述をおこなうことにする。



第31図　生目33号墳出土遺物実測図①(S=1/3)



第32図　生目33号墳出土遺物実測図②(S=1/3・1/4)

第2表　出土土器観察表

掲載頁 図番号	番号	遺構等	種別 器種	法量cm（ ）:復元 口径	底径	器高	色調 外面	内面	焼成	調整 外面	内面	胎土（上:mm 下:量） A	B	C	D	E	備考	実測番号
p.18 第9図	1	9号墳 G調査区	弥生土器 長頸壺	－	－	－	10YR5/4 赤褐	10YR3/1 暗赤灰	良好	縦位ミガキ、線刻による直線文・重弧文	ナデ	2.5 中					免田式土器	3
	2	9号墳 G調査区	弥生土器 壺	－	6.4	－	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR3/1 黒褐	良好	工具ナデ、ナデ	ナデ、指オサエ	3 多						2
p.30 第15図	3	12号墳 Aトレンチ	弥生土器 壺	－	－	－	7.5YR5/4 にぶい褐	2.5Y5/1 黄灰	良好	指ナデ後ミガキ	指ナデ後斜めハケ	2 少						14
	4	12号墳 Aトレンチ	弥生土器 長頸壺	－	－	－	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR5/3 にぶい黄橙	良好	ミガキ	ハケメ、ナデ	2 多					免田式土器か	16
	5	12号墳 Gトレンチ	弥生土器？ 不明	－	(7.3)	－	10YR6/3 にぶい黄橙	N3/0 暗灰	良好	ナデ	ナデ	3.5 多						15
	6	12号墳 周溝内	須恵器 壺	17.2	丸底	24.1	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/1 褐灰	良好	波状文、タタキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ					3 少		1
p.44 第31図	7	33号墳 Dトレンチ周溝	弥生土器 長頸壺	8.4	－	－	2.5YR5/4 にぶい赤褐	5Y5/2 灰オリーブ	良好	縦位ミガキ、線刻による直線文・重弧文	ナデ	3 中					免田式土器、外面赤彩	9
	8	33号墳 Aトレンチ	弥生土器 長頸壺	(9.4)	－	－	7.5YR4/2 灰オリーブ	10R4/1 暗赤灰	良好	縦位ミガキ、線刻による直線文・重弧文	ナデ	4 多					免田式土器	7
	9	33号墳 Dトレンチ周溝	弥生土器 直口壺	9.2	0.8	7.9	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR4/3 褐	良好	ハケメ	ナデ	5 多					内外面風化	8
	10	33号墳 Aトレンチ	弥生土器 長胴壺	11.5	14.4	29.7	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR3/1 黒褐	良好	ミガキ後波状文・直線文、ナデ	工具ナデ、ナデ、指オサエ	3 中					免田式の影響による特異な器形の壺	10
	11	33号墳 Aトレンチ	弥生土器 器台	(35.0)	－	－	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい褐	良好	波状文、工具ナデ	ヨコナデ	1 中						6
	12	33号墳 A・Dトレンチ	弥生土器 器台	－	－	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	良好	円形透孔、沈線、ハケメ	斜め方向の工具ナデ	3 中					大型の器台片	4
	13	33号墳 Aトレンチ	弥生土器 壺	－	9.75	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	良好	？	？	5 多					内外面風化著しい、混和材非常に多い	5
p.45 第32図	14	33号墳 Dトレンチ周溝	弥生土器 壺	26.0	6.1	－	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR4/3 褐	良好	突帯、沈線、ミガキ、ナデ	ナデ	2.5 多					大隅産、雲母片が顕著	13-1 13-2 13-3 13-4
	15	33号墳 客土	須恵器 甕	－	－	－	7.5YR5/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	良好	平行タタキ後ナデ	当て具痕、ヨコナデ	3 少						12

※胎土 A:宮崎小石 B:長石・石英 C:輝石・角閃石 D:雲母 E:黒染

第Ⅲ章　総括

第１節　生目９・33 号墳の墳形について

9 号墳、33 号墳の調査の結果、9 号墳を後円部、33 号墳を前方部とする前方後円墳である可能性が高まった。ここではその如何も含め検討をおこなうことにする。

前方後円墳であることを最も端的に証明するにはくびれ部を確認することである。しかし 9 号墳と 33 号墳の場合は、くびれ部に位置するところが切通しにより大きく削平されている。この削平は現地表から数 m に及び、検討する材料が失われている。また残存度合いが幾分良好である南側くびれ部に相当する位置の 9 Ｇトレンチでは、後円部と前方部の接続部分に、古墳に後出する大型の別遺構が切りあっているため、検討材料が失われている。このようにくびれ部から 9 号墳と 33 号墳が前方後円墳であるという証明は不可能であり、他の調査結果から傍証していく必要がある。

9 号墳は調査をおこなった範囲内では、周溝外縁の立ち上がりがすべて削平されており、周溝の有無も確定的ではない。このため 9 号墳の周溝の流れから、円墳か前方後円墳かの判断は不可能である。33 号墳では墳丘南側において、9 号墳に向け直線的に伸びる周溝を確認した。この周溝は西へ直線的に伸びるが、屈曲せず調査区内において収束する。この直線的に伸びる且つ屈曲しないという点から、33 号墳は円墳や方墳ではなく、前方部隅角で周溝が収束する「九州南部型前方後円墳」（橋本 2013）の前方部となる可能性が高い。そこで 33 号墳南側周溝を、9 号墳を後円部とする前方後円墳の前方部側面の周溝と仮定し、9 号墳の中軸線を延長した線で反転してみると 33 号墳の北側で検出された周溝と思われる遺構よりも更に北側に墳丘端が位置する。前章第 4 節の墳丘横断面の項でも、北側斜面は削平を受けており本来の墳丘形態ではない可能性を述べたが、この点からも北側斜面は削平を受けている可能性が指摘できる。削平を受けていると捉えた場合、33 Ａトレンチの土層断面図 12 層の取り扱いが問題となる。12 層は墳丘盛土上から周溝とされた遺構を一括で覆う層となっている。自然堆積層の基本層序Ⅳ層に類似するが、遺構部分の埋土のみが弥生時代後期の遺物を多量に含むことから、遺構部分と斜面の埋土は別のものであり、遺構部分は古墳築造以前の遺構である可能性がある。

これらの点を踏まえ、9 号墳を後円部、33 号墳を前方部とする前方後円墳を復元したのが第 33 図である。復元に際しては、沼澤豊氏の 24 等分値企画法（沼澤 2005）を参考にした。後円部は 9 Ａ、9 Ｚトレンチと 9 Ｇ調査区の調査成果から径 38m に復元されている。前方部に関しては 33 号墳南側周溝が収束する位置から復元をおこない、墳長 60m、前方部長 22m、前方部幅 25m の値が得られた。前方部長が後円部径の 6 割程度の短小な前方部を有する前方後円墳である。この復元案を、生目古墳群内の他の前方後円墳と比較すると、近似値を示すものが、生目古墳群中最小の前方後円墳である生目 21 号墳である。21 号墳は概要報告書の中で墳丘復元をおこなっているが、墳丘端の位置が周溝内の立ち上がりの位置ではないとの指摘を受けており（生目古墳群シンポジウム 2014 内での柳沢一男氏の発言）、本来の墳丘は概要報告書の復元より一回り大きくなる。詳細な復元に関しては、21 号墳の報告書に委ねたいが、柳沢氏の指摘を基に復元をおこなうと、墳長 42m、後円部径 28m 値が得られる。後円部を 1 とした場合の前方部の比率は、9・33 号墳が 0.55、21 号墳が 0.5 となる。両者は発掘調査の成果から、葺石をもたない点、周溝が前方部前面に向かって浅くなり、隅角付近

で収束する可能性が高い点も共通している。

また 9 号墳の大きな特徴として低平な墳丘が挙げられる。発掘調査の結果、墳丘面の直上に Th-S を含む黒色土が堆積していることから、これは築造当初のものではなく、古代から中世の初め頃にかけて 9 号墳が大きく改変されたことを示している。また 33 号墳も、墳丘面の直上層は客土であり、本来の墳丘高は明らかではなく、墳丘の立面形に関しては復元することができない。

以上のように、9 号墳、33 号墳は前方後円墳である可能性が極めて高い。その墳形は前方部形状が若干異なるものの、21 号墳に類似する短小な前方部をもつものと思われる。立面形に関しては後世の改変により明らかにすることができなかった。

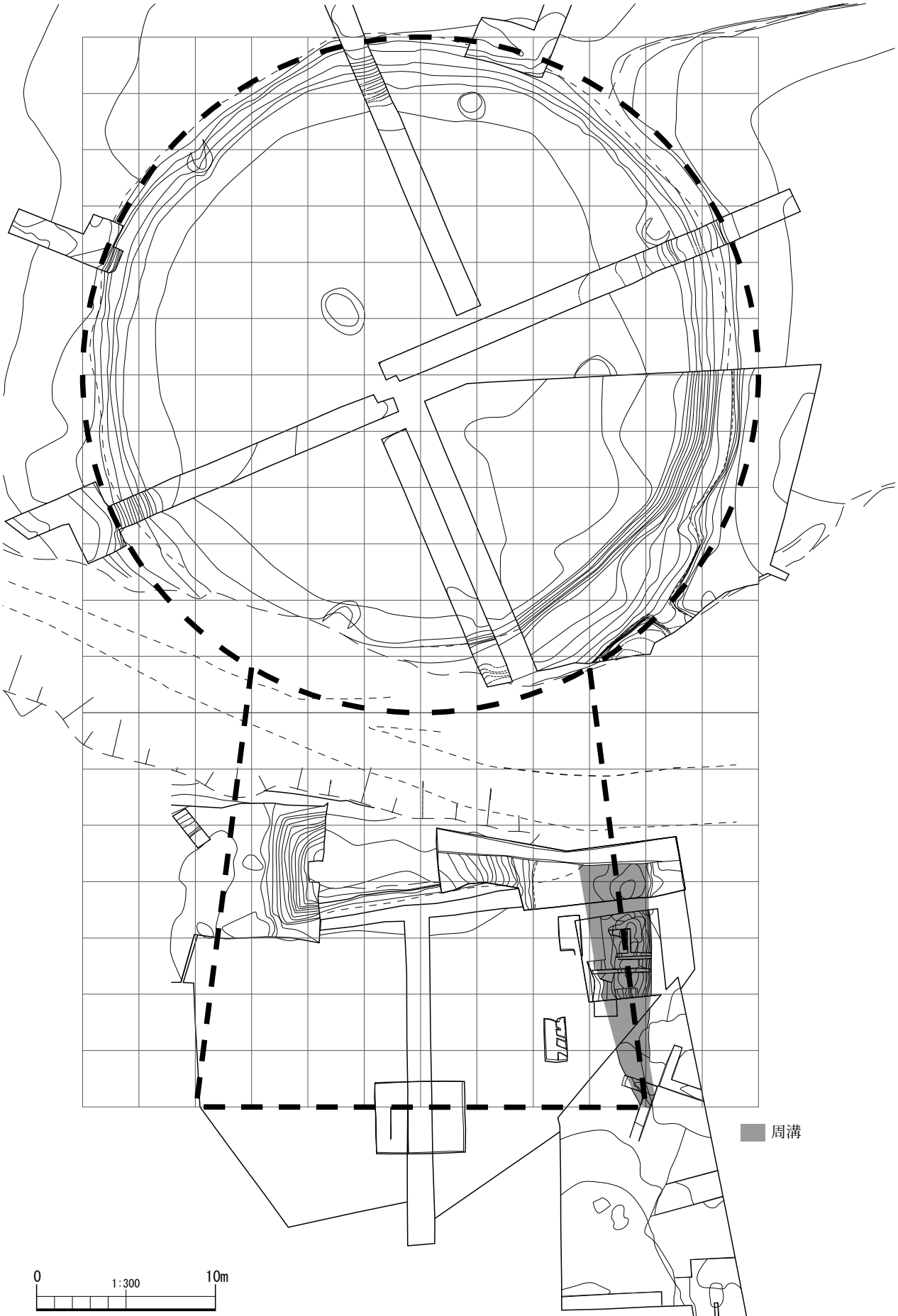
第 2 節　生目 9 号墳周辺の地下式横穴墓について

生目 9 号墳の周辺では、33 号墳周溝内のものも含め 5 基の地下式横穴墓が確認されている。その中で玄室まで調査をおこなったものは、『史跡生目古墳群周辺遺跡』で報告されている、7 号、8 号地下式横穴墓のみである。9 Ａトレンチで確認された 51 号地下式横穴墓、33 Ｂトレンチで確認された 52 号地下式横穴墓は竪坑検出、33 Ｄトレンチで確認された 53 号地下式横穴墓は竪坑の一部をサブトレンチによって調査をおこなっている。構築位置は、7 号・8 号地下式横穴墓ともに復元した 9 号墳の墳丘端から約 5m の位置にあり 9 号墳を意識した構築位置といえる。両者ともに 9 号墳の周溝外縁が確認されていないため、周溝内か周溝外か明らかでないが、周溝内に構築された地下式横穴墓は、基本的に玄室を設ける際に墳丘もしくは周溝外縁の立ち上がりを利用することから、各々の構築位置と玄室方向から鑑みると、周溝外に構築されていると思われる。玄室方向は 7 号地下式横穴墓が 9 号墳の墳端付近に玄室を向け、8 号地下式横穴墓は 9 号墳の墳丘方向へ玄室を向ける。このため、周溝内の場合、墳丘内に玄室を設ける形となるが、前述のとおり確認された墳端から距離があり、墳丘立ち上がりを利用したものとは考え難いためである。51 号地下式横穴墓は、9 号墳墳端部に竪坑を設け、墳丘内に玄室を構築する。玄室規模は不明であるが、竪坑の規模から大型の地下式横穴墓の可能性は低い。52 号、53 号地下式横穴墓は、両者ともに周溝内に竪坑を設け、周溝外縁に玄室を設ける。構築時期が明らかになっているものは、玄室内まで調査をおこなった 7 号、8 号地下式横穴墓である。各々出土した鉄器から 7 号地下式横穴墓は古墳時代中期中葉に、8 号地下式横穴墓は須恵器 TK73 ～ 216 併行に位置付けられている。時期が明らかになった地下式横穴墓は、両者ともに、現段階で宮崎平野部最古の 5 世紀前葉に位置付けられている生目 43 号地下式横穴墓が構築されてから大きく時間を経ていない比較的古い段階に位置付けられる。

第 3 節　生目 9 号墳・11 号墳・12 号墳の時間的位置付けについて

ここでは今回調査をおこなった古墳の時間的位置付けについて検討したいが、33 号墳は、9 号墳の前方部である可能性が高いため、33 号墳を 9 号墳にまとめ、9 号墳（ここからの記述では 33 号墳を含む)、11 号墳、12 号墳の 3 基について検討する。なお、時期が確定的な 12 号墳から順に記述する。

前述のとおり、今回の調査で出土遺物から時間的位置付けが可能な古墳は 12 号墳のみである。12 号墳は、周溝内から出土した須恵器から、須恵器 TG232 ～ TK73 併行、古墳時代中期初頭～前

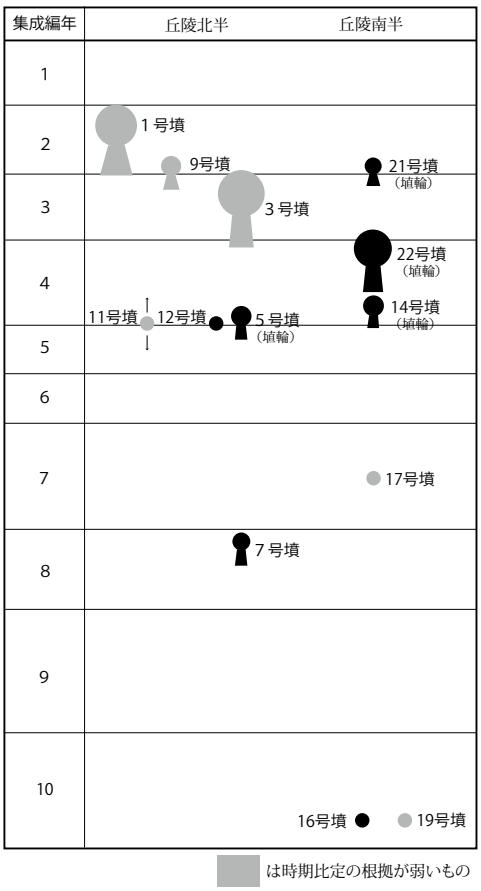


第33図　生目9号墳墳丘復元図(S=1/300)

葉に位置付けられる。生目古墳群内においては、生目 5 号墳がほぼ併行する時期に築造されている。5 号墳と 12 号墳はともに丘陵北群に位置し、5 号墳は墳長 57m の前方後円墳、12 号墳は直径 20m の円墳であることから、北群内においても階層構造が見られることが明らかになった。

11 号墳は、12 号墳の周溝が 11 号墳を避けるように築造されていることから、12 号墳に先行して存在していたと考えられる。ただし、生目古墳群周辺遺跡 11 － 1 トレンチで出土した須恵器が 11 号墳に帰属する場合は、11 号墳が 12 号墳の直後に位置付けられる。隣接する位置に存在する円墳であることから、12 号墳に近接する時期で先行もしくは後出する可能性が高いが、確証を得る手立てはない。

9 号墳は、その規模や周辺の円墳群の中で最高所に位置することから、周辺の円墳に先行する可能性が高い。前述のように 12 号墳が中期初頭に遡るため、9 号墳は前期に位置付けられる。また、9 号墳は 21 号墳に似た短小な前方部をもち、21 号墳と同様に葺石をもたないことから、21 号墳に近接する時期の可能性がある。宮崎県内における古相段階の前方後円墳をみると、西都原 81 号（4 世紀初頭）、生目 21 号（4 世紀前葉）といずれも短小な前方部を有し葺石をもたない。これらの点から生目 9 号墳も同時期に位置付けられる可能性が高いが、墳形や葺石の有無のみで時期を判断することには慎重でありたい。



第34図　生目古墳群主要古墳変遷図

これら 3 基を生目古墳群の主要古墳の変遷に当てはめたものが第 34 図である。柳沢氏の指摘のとおり、北群、南群でそれぞれほぼ併行する時期に前方後円墳が築造された可能性があり（生目古墳群シンポジウム 2014 内での柳沢氏の発言）、埴輪の有無に関してもあり方が異なる。また前述のように各群内においても階層構造がみられることから、2 つの集団が生目古墳群を墓域としていたと捉えられる。

【第Ⅱ章・第Ⅲ章主要引用・参考文献】

青木　敬　2003「墳丘構築法の再検討」『古墳築造の研究』－墳丘からみた古墳の地域性－、六一書房。

橋本達也　2012「3 地域の展開 ①九州南部」『古墳出現と展開の地域相』古墳時代の考古学 2、同成社。

沼澤　豊　2005「前方後円墳の墳丘規格に関する研究（上）」『考古学雑誌』第 89 巻第 2 号、日本考古学会。

宮崎市教育委員会　1996『史跡生目古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第 28 集。

宮崎市教育委員会　2011『史跡生目古墳群 保存整備事業発掘調査概要報告書Ⅷ』－生目 21 号墳の調査－、宮崎市文化財調査報告書第 85 集。

写真図版

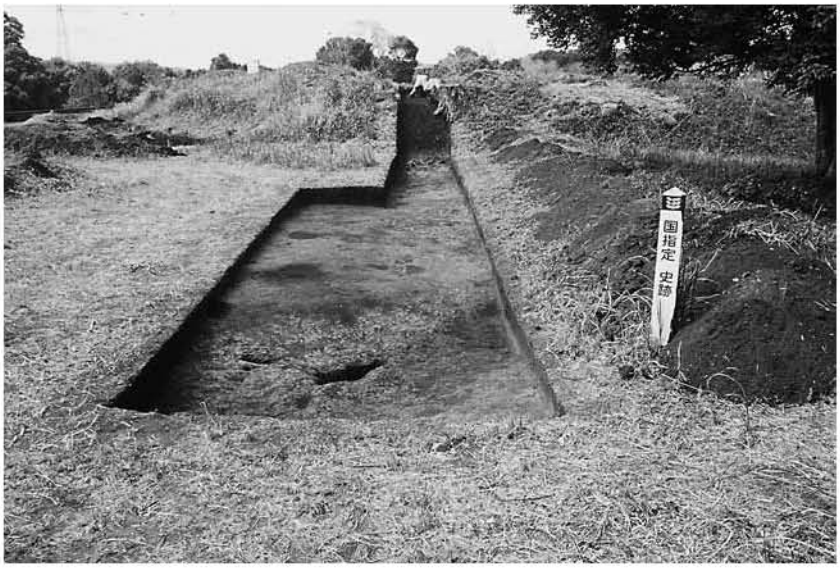
図版 1

9 号墳垂直写真（2008 年度調査時）

9 Ａトレンチ：墳頂部

9 Ｂトレンチ：墳丘裾地下式横穴墓竪坑検出

9 C トレンチ



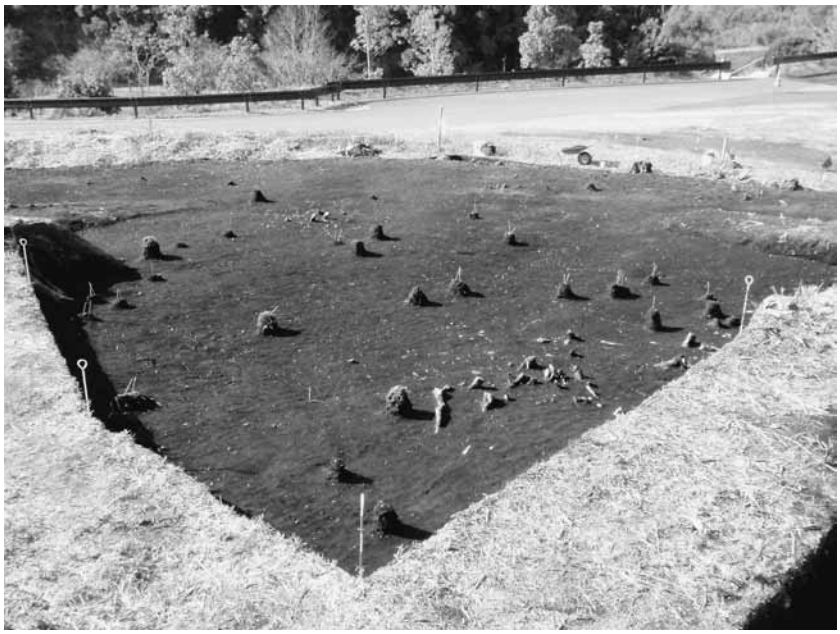
9 Z トレンチ

9 D トレンチ

図版 3

9 Ｅトレンチ：墳丘斜面

9 Ｇ調査区



9 Ｇ調査区：墳頂平坦面
遺物出土状況

9 G調査区：土橋状施設

9 G調査区：土橋状施設北側

9 号墳出土遺物

図版 5

9 号墳周辺調査区垂直写真

9 Xトレンチ：遺構

9 Yトレンチ：東端の暗褐色土堆積状況

11 Cトレンチ

11 E・12 Aトレンチ：11 号墳側

11 Gトレンチ：墳頂部

図版 7

11 E・12 Aトレンチ：12 号墳側

11 E・12 Aトレンチ：12 号墳墳頂

9 X－2 トレンチ：12 号墳周溝内
遺物出土状況

9 Z トレンチ：周溝内石出土状況

12 号墳出土遺物①

12 号墳出土遺物②

図版 9

33 号墳周辺垂直写真（2004 年度調査時）

33 A土層堆積状況（北から）

33 A遺物出土状況

33 号墳南側周溝検出状況（2013 年度：西から）

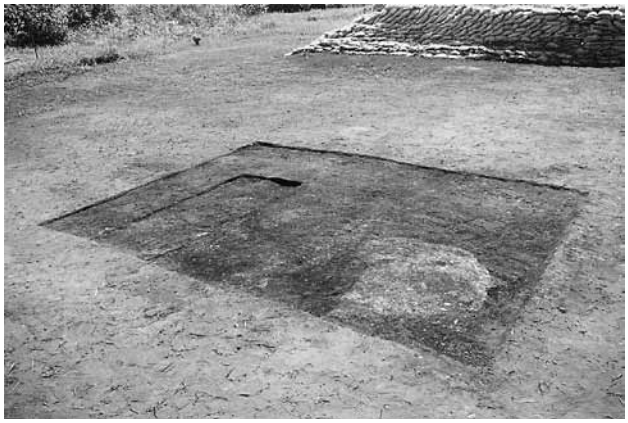
33 号墳南側周溝検出状況（2014 年度：西から）

図版 11

33 Ｂ周溝・不明遺構 1
土層堆積状況（北東から）

33 Ｂ周溝内地下式横穴墓
検出状況（北東から）

33 Ｃ調査状況（西から）



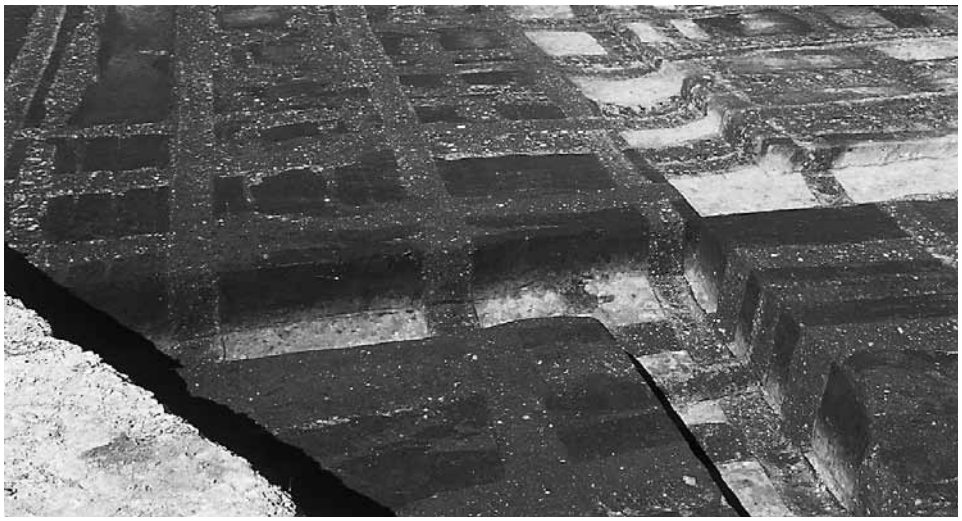
33 Ｇ調査状況（西から）

33 D調査状況
（東から）

33 D
地下式横穴墓
調査状況（東から）

図版 13

33 D土坑 1
調査状況
（南から）



33 F不明遺構 2
土層堆積状況
（南東から）

33 F 調査終了時
状況（西から）

33 号墳出土遺物①

図版 15

33 号墳出土遺物②

33 号墳出土遺物③

報　告　書　抄　録

ふりがな	いきめこふんぐんご
書名	生目古墳群Ⅴ
副書名	生目 9・11・12・33 号墳発掘調査報告書
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 108 集
編著者名	石村 友規（編集）、竹中 克繁
編集機関	宮崎市教育委員会
所在地	〒 880-0805　宮崎市橘通東 1 丁目 14 番 20 号
発行年月日	2015 年 3 月 27 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いきめ　ごうふん 生目 9 号墳 いきめ　ごうふん 生目 11 号墳 いきめ　ごうふん 生目 12 号墳 いきめ　ごうふん 生目 33 号墳	みやざきし 宮崎市 おおあざあとえ 大字跡江	45201	24-059	31° 26′ 54″ 付近	131° 23′ 15″ 付近	2004.4.16 ～ 2005.3.30 2008.4.14 ～ 2009.3.30 2009.5.15 ～ 2010.3.30 2010.4.20 ～ 2011.3.17 2011.4.8 ～ 2012.3.30 2013.7.2 ～ 2014.3.27 2014.7.14 ～ 2015.3.31	886㎡	保存整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
生目 9 号墳	古墳	古墳時代	古墳墳丘、 地下式横穴墓	弥生土器	33 号墳を前方部とする前方後円墳か
生目 33 号墳	古墳	古墳時代	古墳墳丘、古墳周溝 地下式横穴墓	弥生土器	9 号墳を後円部とする前方後円墳か
生目 11 号墳	古墳	古墳時代	古墳墳丘		
生目 12 号墳	古墳	古墳時代	古墳墳丘、古墳周溝	須恵器壺・弥生土器	初期須恵器出土

要約	生目 9 号墳	9 号墳を後円部、33 号墳を前方部とする墳長 60m の前方後円墳の可能性が高い。後円部墳頂は中世以前に削平されており、埋葬施設は確認されなかった。後円部墳丘下に玄室をもつ地下式横穴墓が構築されているが、竪坑の規模から中心埋葬施設とは考え難い。
	生目 33 号墳	
	生目 11 号墳	復元径 15m の円墳。墳丘は無段築、葺石をもたない。周溝の位置関係から 12 号墳に先行する可能性が高い。
	生目 12 号墳	復元径 20m の円墳。北側の周溝が、隣接する 11 号墳を避けるように幅が狭くなっていることから 11 号墳に後出するか。周溝内から TG232 ～ TK73 型式の須恵器壺が出土。

宮崎市文化財調査報告書 第 108 集

生目古墳群Ⅴ

生目 9・11・12・33 号墳
発掘調査報告書

2015 年 3 月
発行　宮崎市教育委員会